小僧はやう〳〵人心地せり。

「何うだそれならば食はれよう。まだ亡者と稱へて海豚の刺身もある。」

小僧は正體を聞きて心を安んじ、空腹のことなれば、(亡者)と(幽靈)を多量に食し、飽けば乃ち眠氣ざしつ。朝來主人のために散々に使はれし疲勞もあり、殊に角屋敷の戸口にて異形の怪物に抵觸られしを始めとして、心を激すること度に過ぎたれば、前後を忘れて坐睡を始め、果はころりと肱枕して、ついぐつすりと熟寢せり。

恁て幾時を經たりけむ、小僧の夢を破りし時は、鬼の夫婦は傍にあらで、酒肴の調度も片付きたりき。

小僧は主家にありし時の朝とは違ひ、強ひて起されしにあらざれば、眼は分明と開きたれども、心は半ば夢路を辿れり。

「先づ生命には別條無しと、こゝで落着いて相談をせねば可んよ。喃長松。」

「へい。」と自から小聲に答へつゝ、首を縮めて舌を吐き、

「何だ馬鹿々々しい。えゝと、あゝして、あゝやつて、お汁粉を喰べたと、それは先づ可しで、それからあゝなると、あゝなつて、而して、あゝして、それが濟むと宙へふわり。……待てよ、此處らから怪しいんだ。(夢に夢を見た夢を見る)ことがあるもんだつて番頭さんが謂つたつけが、

おらあ、幾つめの夢だらう。(夢に夢を見た夢を見るか)さあ、分らない。(夢に夢を見た夢……)えゝ、つまらない。こんな六かしいこと考へてると、眠くなつて、また夢だ。さう〳〵夢ばかり見て居ちやあ目が覺めない。何でも可いとして、こゝは何處だらう。妙に薄暗い變な家だ。」

なほ頻りに圓なる眼をきよろつかせ、

「おつと、妙不思議、奇代、素敵と面白いことがある。彼處の棚に乘つてるなあ、昨夜雄の方の鬼が開けて見て、「お燒の御新さん」の何時何日に往生するといふことを檢べた帳面だぜ。待て待て、一つ見て遣らう。玉乘も見たいものだが、あれと、大社の緣結の帳面ほど見たいものはないよ。」

と無遠慮なる長松も極めて祕密なるものならむと思ふにぞ。跫音を盜みて恐る〳〵彼の帳簿を取下し、手疾く開きて一眼見しが、俄に失望の聲を揚げたり。

「あゝ！情ない。こりや弱つたな。ちつとも讀めない。皆が(手習をしろ〳〵)といふのを、(へン屁ならば放ろ)なんてつて馬鹿にしたが、あゝ！惡かつた。こゝで字が讀めようもんなら、番頭佐兵衛今日頓死とやつてころりとさせてやらうものを。口惜いな。待てよ、一寸、天神樣にお汁粉を禁つて見ようか知らむ。」

小僧は一字も讀めざれども、またと得難き寶なれば、未練起りて棄てもならず。はじめより終

りまで一葉々々丁寧に繰返し、穴のあくまで視詰めつゝ、うつかりとする耳を貫き、

「きやつ！」と叫べる婦人の聲せり。

小僧は思はず飛上りて、

「ほう、吃驚した。見着けられると天窓から鹽だらう。」と舊の處に帳簿を納めつ。耳を澄ませば婦人の悲鳴頻に聞ゆ。

八

小僧は婦人の泣聲を慕ひ行きて、とある板圍の隙間より、其外の方を覗きけるに、其處は樹も無く、草も無き、一面の砂原なるが、中央に六尺四面ばかりの大なる穴を穿ちて、これを爐となし、炭を山の如くに積上げて、焰々と火を起し、牛頭馬頭の鬼大團扇を以てはた〳〵と煽立てつ。上座とも見ゆる處に、一脚の鐵榻を排して、鳩槃茶は其妻の毘舍闍とともに在り。

此方に瘤ほどの小さい角ありて、犬の皮の褌襠したる、劣等の鬼兩個あり。左右より無手と一個の妖艶なる婦人の手を扼りて、荒らかに引立てなむとす。

悲鳴を上ぐるは此婦人なり。既に奪衣婆の手に剝取られぬと覺しくて、腰のみ布もて蔽へるが、丈なす黑髮蓬の如くはら〳〵と亂懸れる間より仄に洩るゝ顏は物凄きまで蒼ざめたり。渠が全身

の雪は今や烈火の上に置かるゝならむ、かよわき腕に力を籠め足を以て地を蹴りつゝ其まゝ土に根を下して、一歩も動かじとぞ悶ゆるなる、其容貌の誰なるかを、戰きながら小僧は視たり。果せるかな、これ昨夜風説されし處の妬婦なりき。

小僧は呼吸を密めつゝ、一種殘虐なる演戯を見物せり。効なき婦人の力にていかばかり抵抗するとも、いかんぞ渠等に敵すべき。苦もなく宙に引立てられ、將に火坑に投ぜられむとしたりし時、突然、鳩槃茶は手を擧げて、兩個の鬼を制し留め、

「待て、待て。」

「待てとは？」獄卒は怪めり。鳩槃茶は弱々しく、

「餘り可哀相だ。塵芥ではあるまいし。生身の人間を火責にするなんて、そんな非道なことがあるものか。まあ休にしろ〳〵。」

元來ものの憐愍を知る惻隱の情なるものは、直立動物を形造る分子のうちに在るものなれば、いかに殘忍なるものといへども、衷心一點の慈悲無きはあらざるべきも、渠等鬼の社會には寸毫もさせる傾のなきものなれば、殆ど豫想にだも及ばざる鳩槃茶の言を聞きて、雌鬼毘舍闍は謂ふに及ばず、一同呆れし狀なりき。

鳩槃茶は渠等に向ひて、憐愍深き老人の口氣を帶び、

「何うぞ堪忍して遣つてくれ、己あもう何ういふものか、いぢらしくて堪へられねえ。」
「いぢらしいた何のこつたい。」と毘舍闍は堪り兼ねて呻出せり。
「先刻から聞いてりや、イヤ哀だの不便だのとお前そりや佛の方で謂ふこつた。馬鹿々々しい！」
「さうでないことさ。佛だつてあながち嘘ばかり謂ふでもない。偶にや感心なこともいふわな。」
と生暖きいひぶりなり。
「だつてお前、それにした處で此婦人は惡性者で、澤山男を玩弄にした淫婦だといふぢやあないか。」
「姉御左樣だとも。」鬼等は聲を揃へて謂ふ。鳩槃茶は首を掉り、
「うんにや、普通の人間より罪障の深い女人はなほ不便だ。罪を造つた奴と思へばおらあ可哀相で涙が出る。」と眞實の涙を流す、毘舍闍は癇癪の牙を嚙み、
「此鬼や串戲ぢやないぜ。お前、閻魔樣からいひつかつて、地獄から出張して、最寄の亡者は此方で處分をしようといふ、怪雲洞の主人ぢやないか。そんなことを謂つて濟むと思ふかい、贅六め。」
鳩槃茶は投首して、
「何と謂はれたつて仕方が無い！一層極樂へ宿替をしようか知らむ。」

「姉御、親方は氣が違つたんだ。」
「而して見や、變なものを被つてらあ。」
鬼等は叫べり。
毘舍闍は氣着きぬ。
「うむ、さう謂へば、昨夜歸つたまんまで、まだ脫がねえ。何でもこれを被つて來てから、しみつたれなことばつかしいふが、こりや一番穿鑿ものだよ。おい、其頭巾を取つて見せな！」
「えゝ！」と鳩槃茶は顏色變へて、毘舍闍の取る手を遮りぬ。
「おや！いよ〳〵怪いぞ。皆な一寸手を貸しな。」
「合點だい！」
「それ無暗にひんめくれ。」
ばら〳〵と立懸れば、こは堪らじと搔潛る、毛僧帽子を拔取られて、鳩槃茶は揑と坐し、
「いや早、面目次第も無い。」と天窓を抱へて踞まる。
其角の無き坊主頭に、左右を圍める鬼等は、顏見合せて茫然たりき。

九

「あれ！あれ！酷いことを遊ばすよ。あれえ！誰ぞ來て下さいまし。」
と泣聲を揚げて救を呼ぶに、女隱居の慌しく駈け行く一室には、彼の鬼の角を拾ひし老人、肌脫になりて嫁の胸倉を取つて伏せ、片手に持てる盃の酒を其口に注がむとして、藥を幼兒に飲ます時の如き大騒をなしつゝありけり。
女隱居は大に驚き、
「酒狂にも事を缺いて、お爺樣何をなさる。」と餘りの所業に腹立たしく、勃氣になりて極附けたり。老人は血走りたる眼を刮きてぎろりと睨み、
「婆々の出て來る幕では無い。引込んでろ！」
「いゝえ、引込んぢやあ居られません。何處の何處にかお前さん、若い婦人を摑まへて酒を口中に注入れるなんて、狂氣染みた眞似をするものがありませう。お對手が無くて淋しければ、悴なり、私なり、いくらもお對手をしようでは無いか。ほんに〳〵本氣の沙汰とは思はれません。」
疊を叩きて詰寄りぬ。老人は取つても附けず、
「己のしたいことを己がするに、誰に遠慮が要るもんだ。何も酒の對手をさせようといふのでない、世話を燒かずと引退れ。ちと思はくのあることだ。」
「其思はく聞きませう。」と老婆は開き直りて、

「お前樣嫁どのは九月の病人だよ。手荒いことをして、もしひよつと仕損があつたら何うなさる。ちやつと其處をお退きなさい。」と老人を押退くれば、嫁は這々擦拔けて、泣きながら遁出したり。老人は突立ちて、
「やい、待て！用がある。おのれ、舅のいふことを肯ないか。」
追懸くるを懸隔てて、爭ふ老婆を突飛ばし、血相變へて躍出づるを、
「まあ〳〵〳〵、下に居て下さい、これ父樣。」
此時馳來れる若主人は戶口にて其父なる老人を抑留し、辛うじて座に就かしめ、
「もし、何うしたものでございます。母樣こりやまあ何うしたことで。」
と老婆の方を顧みたり。老婆は此方に向直り、
「おゝ、悴か、良い處へ來てくれた。」と其一條を語るを聞きて、若主人は眉を顰め、
「驚きますな、飛んだことをなさいます。」
「飛ぶも飛ばぬもお前摑まへ處のある所業ぢやないわね。」
「さればですな。病人の嫁を捕まへて、押伏せて、咽口割つて酒なんざ、お話になりません。」
二人の頻に非難するを、空耳走らせて聞かざる狀を裝へる老人は、此時不意に一喝せり。
「默れ！默れ！汝がそんなことをしやべる口も原は己が拵へて遣つたのだ。己といふものが、も

しさ、此己といふものが居らなかつたと假に思つて見ろ。汝といふものが此世へ出よう筈のない理窟だ。喃、可しか、已に汝がなかつたものとして見れば、嫁も何もあるもんぢやあ無い。身體を拵へて貰つた禮として、彼の嫁を己に吳れろ。何と異存はあるまいな。」

「彼の父様が何をおつしやるやら、とかく御酒の上でございませう、はゝゝゝ。」と若主人は笑に紛らす。然るに老人は生眞面目なり。

「おのれ！酒の上だなんぞと、惡く己を嘲弄しやあがる、串戲では決して無いぞ。」

「而してまた悴の嫁を何になさる。」老媼は傍より問へり。

「うむ、何にしようと、彼にしようと、貰つた上は己の勝手だ。」

「いえさ。」と老婆は推返して、

「無暗に酒を飲まさうとして、思はくがあるとおつしやつたが、さあ、何ういふ思はくか、それ聞かせて。」と詰寄れり。

老人は澄し込み、

「なにも、高價酒を醉狂に振舞ふ譯はない。一寸酒汐で味をつける目算さな。」と眞顏にて謂ふ。

「おや。酒汐で味をつける。悴や、何のことだらうの。」

「へい、奇代なことをおつしやいますが、父様、何でございますえ。」

母子は老人を瞻りぬ。

「何をつて、嫁をよ。」

「えゝ！」

「彼奴、むつちりして何様にか旨からう。」

と老人は早舌なめずり。

十

「あゝ、お情ない父様、左様なことをおつしやるのは果然御病氣の故でございます。何卒とつくりお心を落着なすつて、お藥を召上つて下さいまし。此間から些少宛御様子が變でございますので、種々藥を差上げましても、更にお用るございませんが、其ではお惡うございます、え、もし父様。」と愁然たり。老人は無頓着、

「藥も品に因つちやあ飲まんでも無いが、葛根湯やなんか元伯の調合ぢやあ見る氣も無えの。」

「ではまあ何様藥が可いのだえ。」

「老年の藥には、蝦蟆の精血が一番可いて。」

「え、なに、蝦蟆の精血！」と母子は吃驚、

「む、蝦蟆の精血に限る。悴や、早速飲ませてくれ。」
若主人は困じ果て、
「御無理ばつかりおつしやります。今時何處に蝦蟆の血が……いえさ、あつたにした處で、人の飲むものでございますか。」
「知れたことだ。人間の飲む樣な不味物が飲めるかい。」
「あれですもの、母樣。」
「おい喃。」と母子は顏を見合せぬ。
「おい、早速ながら蝦蟆の精血に有附きたいな。」
若主人は益々窮し、
「此節蝦蟆が居りますものか。餘り御無理でございます。」
「だからよ、强て藥を飲ませろとは謂はん。嫁を吳れりや其で可いのだ。」
「嫁御は活きて居りますわね。」
老人は冷笑ひ、
「死んではまるつきり味が變る。何がなし、活きてる奴を引裂いて、手足をばら〳〵にする。可いか、臀の肉は刺身にして、心臟の血を打懸ける。あとは吸物よ。骨は叩にしてもり〳〵とお茶

請だ。處で生肝が甘煮になる。臓腑はぶつ〳〵切にして腦味噌で和る奴さ。こゝに尤も己が目を懸けるのは彼のはらんで居る嬰兒で、こいつ附燒にして天窓から嚙む。まあ何んなにか旨いだらう。」と言懸けて涎を流しぬ。
若主人は蒼くなれり。老婆は聲を震はせて、
「えゝ、もう何の因果で此樣恐しいことを聞くことだ。ほんに〳〵蟲も殺さぬ佛の樣な人だつけが……」
皆まで謂はせずせゝら笑ひ、
「汚はしい、嘘にも佛なんていつてくれめえ。癪に障る。」
と嘯けり。
老婆は胸を据ゑて身を擦寄せ、
「要らざる長生をするから起つて、聞くまいことも聞いたり、見まいことも見たりします。私はもう此世に愛想が盡きた。あの可愛い嫁殿に指一本でも指さされようか。ちやつとお食りなさい、嫁のかはりに私を食はつしやれ。さあ、喰附け、覺悟した！」
「なに、私を食へだ、壓の强い。脂肪氣も何にもない、まるで金魚麩の樣なものだ。薄汚え。」
かつぷと痰を吐懸くる、狼藉既に人列の外にあり。

「餘りだ〳〵、父上餘りだ。とても本氣の沙汰ではあるまい。店の物が使に行けば寒からうといつては御自分の炬燵にあたらせてお遣りなさる。老人が蚤く起きては若い者が寢からうと無理に御寢なつて在らつしやる、といつた樣な父上が、誰の怨、何の罰で、淺ましい。折角御丹精遊ばした內の暖簾に疵が附く。貴父の恥と思ひますから番頭始め店の者親類一家不殘に祕して居れば相談もならず。一體節分の晩お歸りなされてから急にをかしくなんなすつたは、大方道でひよんなことがあつたのでもあらうかと、推量をするばかり。お陪從をさした小僧が居れば、些少はあたりも就かうと思へど、彼も其ツきり行方知れず、何を何うして可いのやら、殆ど途方に暮れまする。」父への意見、母への繰言、己が愚癡さへ取交ぜて若主人は呟きつ。唯見れば老人は足踏伸し仰樣に踏反りて、鼾聲雷の如くなり。若主人は歎息して、

「母樣。」と其傍に差俯向ける袖を曳く。

「おいよ。」と老婆は振返る。

「母樣。」

「悴や。」

「弱つたことになりましたな。」

「何とか嫁とも相談して。」

「方法を着けねばなりますまい。」

眼を覺さしては面倒と、ぬき足して忍び出で、嫁の居室に到り見れば、衣類調度を取散らして、おや〳〵おや！嫁は泣く〳〵落支度。

十一

若主人は慌てて嫁の袂を控へ、

「これ〳〵お花お前こりや何處へ行く。」とおろ〳〵聲なり。嫁は花の紅の襦袢の袖を嚙切めながら、

「何處へも行きはいたしません。お父樣のお望なら私や殺されても可いけれど、肚の兒まで恐しい附燒にされては可哀相でございますから、濟みませぬが暫時實家へ參ります。何卒堪忍して下さいまし。其かはり身二つになりますれば、直ぐ歸つて來て、鱠にでも刺身にでもなりませうと、覺悟して居りまする。」とわつとばかりに泣出せり。

若主人は貰泣して、

「おゝ、それでは殘らず聞いて居たか。」

「あい、心許なさに竊聽して私や酒汐を飲まされたことも、手足をばら〳〵にされることも、も

う、疾に存じて居りますよ。」
「やれ勿體ない。爺様の謂ふこと肯かうなどと、虚にも謂つておくれでは、却つて罰があたります。早くお里へ遁げておくれ。お前も定めし愛想を盡して、また歸つて來てはくれまいけれど、樂にして居る初孫の顔だけは、これぢや、拜みます。そつと見せて下されや。」と手を打合せて老婆は泣く。若主人は遮りて、
「しかし母様。今嫁が歸りますと、里をはじめ怪んで何故といふ疑ひを起しませう。すれば祕すにも祕されず、明けて謂はねばなりませぬ。狂氣も多いけれど、何處に人間を食はうといふ恐しいのがありませう。私は何うしても父様の恥を人に知らしたうございません。これお花、まさかお前を生きながら肉俎の上へ載せる様なこともせまいから、我慢して行かずに居て呉れ。私が一生の賴ぢやほどに、肯分けてくれまいか。」
と熱き涙を灑ぎける。嫁は身もよもあられぬ思、屹と心を定めたり。
「唯、宜しうございます。貴下さへ御承知なら、何の生命を惜みませう。里へ參ると申したのも、肚の兒が大切に、思うたゆゑ、私の身は萬が一ぶつ〳〵切になりましても、ちつとも厭はいたしませぬ。」といと潔く言放ちぬ。
「おゝ、よくいつてくれたぞ。」と姑は嫁に縋れり。

「これで一方は片附いたが、さて困るのは父様の容體おりや。」
息子は思案の腕拱く。
「もし、貴下。何とかしやうはございませぬか。」
「さればさなう。」
と三人が齊しく首をうなだれて、暫時言途絶えたる時しも深と夜の更けて、丑三の鐘幽に聞え、寒さ、寂さ、身に染みて、鬼氣陰々と人に迫るに、一座思はず慄然とする、天井の方にてくすくす笑。啊呀と見れば人も無く、唯聲ばかり聞えつゝ、
「はゝゝゝ、へい、旦那今晩は。御新姐様、お寒うございい。はゝゝゝ、御隱居様、御機嫌宜しうッ。」
「あれえ！」
「おや！」嫁も老婆も蒼くなりぬ。
「誰だ。」
「へい、御存じの長松で。」
「なに、長松だ。をかしな奴だな、何處に居る〳〵？」
若主人はあたりをきよろ〳〵。

「旦那。此處に居ますよ。此處に〳〵、はゝゝゝ。」小僧は破風口より顔を出して、「あばッ」

十二

小僧は三人を驚かせり。

三人は實に驚きたり。驚きたる三人の傍へ小僧は身輕に飜然と下りて、主人の前に畏まりぬ。

「へい、多日御不沙汰いたしました。」

「御不沙汰も無いものだ。汝一體今まで何處を……」

若主人の語未だ半ばならざるに小僧は急に遮りたり。

「否、旦那。(今まで何處を)なんて私を叱つていらつしやる隙はありませんよ。へい、驚いちやあ不可せん。」

これより小僧は豫てのお饒舌に疲懸けたる疾口にて、お汁粉以來の怪談をさら〳〵と物語り、

「でね、旦那私も思はず噴出しました。奴が天窓を抱へて悄氣返つた其風采ッちやあないんですもの。

へい、角の無い鬼は初めて見ましたね。處が笑つたのを聞いたと見えて、(や、人間の聲がする)と、青鬼が飛んで來て、私を攫出します。一方ぢや雌の鬼が、(角は何處へ何うして來た)つて

雄の方を小突廻すと、其奴がいふにやあ、(つい節分の豆に面くらつて、遁出す機會に、此小僧に抵觸る拍子に落ことしたのだ)と私を指さして、(これの主人と見える老年に奪られた、)といひました。もし、旦那、御隱居樣は鬼の角をお拾ひなすつたといふのですが、そんなものを持つていらつしやいますか。へい、へい、成程はあ、邪慳非道なことを。へい、いやそりや屹と其故でせう。ですもの、角を落した鬼の方は、無暗に憐つぽくなつてまさあ。處で鬼等が寄つて、懸つて、(そいつは異事だ、早く取返さねば、不可)つてせッついてね、とう〳〵赤鬼を納得さして、其處で私を案内者にして、暗雲で御家まで駈けて來ました。すると例の赤鬼が、(こんな態で不意に推込んぢや、家内の者が吃驚して目でもまはすと氣の毒だつて、)何處までも優しいね。他の奴等が、(何、構ふものか)といふのを無理に控へさして、私を先觸に一寸御案内に寄越しました。早く何處かへお遁げなさい。今にも飛込んで參りますぜ。私は先づ御免蒙りましてお先へ遁げます。また蛇の雷干なんて、亂暴なものを食されると大變だ。誰方もお早く。」と謂ひもあへず、尻引襄げて遁出したり。

三人はなほ半信半疑の間に迷ひて、遁げむともせで猶豫ふ内、腥き風一陣破風口より入るよと見えし、鳩槃茶は牛頭馬頭の鬼を從へて、俄に姿を顯せり。

これにぞ啊呀と驚きて、轉けつ、まろびつ、遁げんとする、最騷がしき物音に、奥なる老人は

眼を覺し、

「ばた〳〵する！ばた〳〵する!!ばた〳〵する!!!　おのれ！嫁を遁がすんだな。」

謂ふより疾く躍り出たり。母子は既に遁れども、身重なる嫁は走ること意に任せず、氣をのみあせりて這擦廻るを、老人は目疾に見着け、矢庭に髷髮を無手と摑みて、宙に釣り下げ突立つ處を、鬼どもは早押取卷き、

「やい老耄、鳩槃茶の角を返せ。」

「否だといふが最後だぞ。」

鐵棒を突立てて牛頭と馬頭とが呼はりたり。老人は怯氣ともせず、冷笑ひて嫁を指さし、

「己あこれの舅なら、汝等は千疋來た處でたかが小姑の分際だ。なに猪口才な、一旦手に入る寶物、舍利になつても渡すものか。ならば腕盡で取つて見ろ。」

「問答無益だ！」

「遣附けろ。」

鐵棒取伸べ身構ふれば、老人は騷げる色なく、徐に懷中を搔探り、件の寶を取出して、

「金の角だぞ。」

牛頭馬頭は逡巡せり。蓋し金の角は渠等に對して、偉なる位階と、勢力とを保てばなり。

「金の角だぞ。」老人は再び謂へり。

渠等は一同に平伏せり。

老人は得意になりつ。繰返してまた叫びぬ。

「金の角だぞ。やい！頭が高え。」

彼等は頓首再拜せり。これを見て老人はにこやかに、

「う、、可し、可し、汝達も折角娑婆へ來たものだ、むざ〳〵とも戻されまい、此奴を少し宛搖つて分けて遣らう。」と捕へたる嫁お花の正體無きを差示しぬ。

「へい、難有う存じます。」

「見たばかりでも唾が走る。御馳走樣でござります。」

牛頭と馬頭とは恐悅す。

鳩槃茶は悄然と座の片隅に彳みしが、今や老人の嫁を摑みて、足より裂かむとするを見るより、あわててこれを押留めたり。

「飛んだことをなされます。罪も無いお嫁御を滅相な、お土産なんぞ要ますものか。」

「でも己等が欲いんだい。」と傍より牛頭は叫べり。

鳩槃茶は聲に怒を帶びて、

「控へろ！」と一喝せしが、金の角を持たざれば、少しも渠等を威するを得ざりき。
馬頭は輕侮の色を顯し、
「お前は今ぢや何にもならない。御隱居樣が賴もしいや。」
「あゝ！是非も無い。」鳩槃茶は悄然たり。
老人は委細構はず、あはや犧牲を屠らむとする時、後馳なる雌鬼昆舍闍は雲を踏みて忽然と顯れつ。
「汝！老耄、良人に角を返さぬか。阿修羅王より借請けた此劍が返せとあるぞ。」
玉散る劍を額に翳し、星眼銳くはつたと睨めば、さすが魔王の威に恐れて、老人は打戰き、立ちも得せず膝行して、角を鳩槃茶に返しける。鳩槃茶は恭しく其角を三度戴き、一度天窓に冠むれば、こゝに再び備はりたる、夜叉の形相凄まじき鳩槃茶俄に氣色を變へ、銀の髯を蠢かし、金の眼を怒らして、朱盆の如き口を開き、
「無禮至極の人非人、餌食にして腹癒せうにも、木葉の樣な汝の肉は、口へ入れるも氣味が惡い。其かはりに嫁を食ふぞ！」と焰の如き舌を吐く。
「やれ悲や。」と老人は身を投出して嫁を庇ひぬ。
見よ、老人が其本性に歸着せしは、鬼の角を棄てしに因るを。こゝに筆を擱きて、漫に亂神を

說けるを謝す。幼年諸子、諸子また讀過一遍の後は、此鬼の角を匣底に棄てて、更に机上の經典を繙け。

取

舵

上

「こりや奈何も厄介だねえ。」

觀音丸の船員は纍々しき盲翁の手を執りて、艀より本船に扶乘する時、恁は呟きぬ。

此の「厄介」と與に送られたる五七人の乘客を載了りて、觀音丸は徐々として進行せり。

時に九月二日午前七時、伏木港を發する觀音丸は、乘客の便を謀りて、午後六時迄に越後直江津に達し、同所を發する直江津鐵道の最終列車に間に合すべき豫定なり。

此憐むべき盲人は肩身狹げに下等室に這込みて、厄介ならざらむやうに片隅に踞りつ。人ありて其齢を問ひしに、渠は皺嗄れたる聲して、七十八歳と答へき。

盲にして七十八歳の翁は、手引をも伴れざるなり。手引をも伴れざる七十八歳の盲の翁は、親不知の沖を越ゆべき船に乘りたるなり。衆人は其無法なるに愕けり。

渠は手も足も肉落ちて、赭黑き皮のみぞ骸骨を裹みたる。軀低く、頭禿げて、式ばかりの髷に結ひたる十筋右衞門は、略畫の鴉の飜るに似たり。眉も口も鼻も取立てて謂ふべき所あらず。

頬は太く痩けて、眼は窅然と陷みて盲ひたり。

木綿袷の條柄も分かぬまでに着古したるを後裏にして、繼々の股引、泥塗の脚絆、煮染めたるばかりの風呂敷包を斜に背負ひ、手馴したる白檮の杖と一蓋の菅笠とを膝の邊に引寄せつ。產は加州の在、善光寺詣の途なる由。

天氣は西の方曇りて、東晴れたり。昨夜の雨に甲板は流るゝばかり濡れたれば、乘客の多分は室内に籠りたりしが、やがて日光の雲間を漏れて、今は名殘無く乾きたるにぞ、蟄息したりし乘客等は、先を爭ひて甲板に顯れたる。

觀音丸は船體小にして、下等室は僅に三十餘人を容れて肩摩すべく、甲板は百人を居きて餘あるべし。されば船室よりは甲板こそ乘客を置くべき所にして、下等室は一個の溽熱き窖廩に過ぎざるなり。

此内に留りて憂目を見るは、三人の婦女と厄介の盲人とのみ。婦女等は船の動くと與に船暈を發して、且嘔き、且呻き、正體無く領伏したる髮の亂に汚穢を塗らして、半死半生の間に苦悶せり。片隅なる盲翁は毫も惱める氣色はあらざれども、話相手もあらで無聊に堪へざる身を同じ枕に倒して、時々南無佛、南無佛と小聲に唱名せり。

拔錨後二時間にして、船は魚津に着きぬ。箇は富山縣の良港にて、運輸の要地なれば、觀音丸

は貨物を積まむために立寄りたるなり。

來るか、來るかと濱に出て見れば、濱の松風音ばかり。

櫓聲に和して高らかに唱連れて、越中米を滿載したる五六艘の船は漕寄せたり。

俵の數は約二百俵、五十石内外の米穀なれば、機關室も甲板の空處も、隙間無きまでに積みたる重量の爲に、船體は稍傾斜を來して、吃水は著しく深くなりぬ。

俵は殆ど船室の出入口をも密封したれば、さらぬだに鬱燠たる室内は、空氣の流通を礙げられて、窖廩は竟に蒸風呂となりぬ。婦女等は苦悶に苦悶を重ねて、人心地を覺えざるもありき。

睡りたるか、覺めたるか、身動もせで臥したりし盲人は矢庭に起上りて、

「はてな、はてな。」と首を傾けつゝ、物を索むる氣色なりき。側に在るは、然ばかり打惱める婦女のみなりければ、渠の壁訴訟は竟に取擧げられざりき。盲人は本意無げに呟けり。

「はてな、小用場は何處か喃。」

仍應ずる者のあらざりければ、渠は困じ果てたる面色にて有間默せしが、やがて臆したる聲音にて、

「はい、もし、誠に申兼ねましたが、小用場は何處でございませうかなあ。」

渠は頸を延べ、耳を欹てて謂へり。答ふる者はあらで、婦女の呻く聲のみ微々と聞えつ。

渠は居去りつゝ攫寄れば、袱ありて手頭に觸れぬ。

「どうも、はや御面倒でございますが、小用場をお敎へなすつて下さいまし。はい誠に不自由な老夫でございます。」

渠は路頭の乞食の如く、腰を屈め、頭を下げて、憐を乞へり。然れども猶應ずる者はあらざりしなり。盲人は愈々途方に暮れて、

「もし、何卒御願でございます。はい何卒。」

惴々其袱を曳きて、慨隱の情を動かさむとせり。打俯したりし婦人は蒼白き顏を纔に擡げて、

「えゝ、もう知りませんよう！」

酷くも袱を振拂ひて、再び自家の苦惱に悶えつ。盲人は此一喝に挫がれて、頸を竦め、肩を窄めて、

「はい、はい、はい。」

中

取舵

甲板より歸來れる一個の學生は、室に入るより其溽熱に辟易して、

「こりや劇い！」と眉を顰めて四邊を眄せり。

狼藉に遺へりし死骸の棄てられたらむやうに、婦女等は算を亂して手荷物の間に横はれり。
「やあ、やあ！慘憺たるものだ。」
渠は此慘憺さと溽熱さとに面を皺めつゝ、手荷物の鞄の中より何やらむ取出して、忙々立去らむとしたりしが、忽ち左右を顧て、
「皆様、これぢや耐らん。ちと甲板へお出でなさい。涼しくッて奈何なに心地が快か知れん。」
是空谷の跫音なり。盲人は急遽聲する方に這寄りぬ。
「もし旦那様、何ともはや誠に申兼ねましてございますが、はい、小用場へは何方へ參りますでございますか、何卒、はい。……」
盲人は數多渠の足下に叩頭きたり。
學生は渠が餘りに禮の厚きを訝りて、
「うむ、便所かい。」と其風體を眺めたりしが、
「あゝ、お前様不自由なんだね。」
恁と聞くより、盲人は飛立つばかりに懼びぬ。
「はい、はい。不自由で、もう難儀をいたします。」
「いや、そりや困るだらう。どれ僕が案内してあげよう。さあ、さあ、手を出した。」

「はい、はい。其は何うも、何ともはや、勿體もない、お難有う存じます。あゝ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」
優しくも學生は盲人を扶けて船室を出でぬ。
「どッこい、これから階子段だ。氣を着けなよ、それ危い。」
恁て甲板に伴ひて、渠の痛入るまでに介抱せし後、
「爺様、まあ此にお坐り。下ぢや耐らない、宛然釜烹だ。奈何だい、涼しかろ。」
「はい、はい、難有うございます。これは結構で。」
學生は其側に寢轉びたる友に向ひて言へり。
「おい、君、最少し其方へ寄ッた。此爺様に半座を分けるのだ。」
渠は快く其席を讓りて、
「抑も半座を分けるなどとは、這個敵手に用ふ易い文句ぢやないのだ。」
恁言ひて其友は投出したる膝を拊てり。學生は天を仰ぎて笑へり。
「這麽様時にでも用はなくッちや、君なんざ生涯用ふ時は有りやしない。」
「と先言ッて置くさ。」
盲人は疑懼其席に割入みて、

「はい眞平御免下さいまし。はい、はい、此は何も、お蔭様で助かりまする。いや、これは氣持の快い、宛然極樂でございます。」

渠は涼風の來る毎に念佛して、心竊かに學生の好意を謝したりき。

船室に在りて憂目に遭ひし盲翁の、此極樂淨土に佛性の恩人と半座を分つ歡喜のほどは、著くも其面貌と擧動とに露れたり。

「はい、もうお蔭様で老夫め助かりまする。かうして眼も見えません癖に、大膽な、單獨で船なんぞに乘りまして、他様に御迷惑を掛けまする。」

「果然だよ、爺様。」

と學生の友は打笑ひぬ。盲人は面目無げに頭を撫でつ。

「はい、はい、御尤で。實は陸を參らうと存じましてございましたが、つい此の老者と申すものは、無闇と氣ばかり急きたがるもので、一時も早く如來様が拜みたさに、こんな不了簡を起しまして。……」

「うむ、無理は無いさ。」と學生は頷きて、

「何も目が見えんからと云ッて、船に乘られんといふ理窟は些も無い。盲人が船に乘るくらゐは別に驚くことはないよ。僕は盲目の船頭に邂逅したことが有る。」

其友は渠の背に一擊を吃して、

「吹くぜ、お株だ！」

學生は躍起となりて、

「君の吹くぜもお株だ。實際ださ、實際僕の見た話だ。」

「へん、躄の人力挽、啞の演說家に雀盲の巡査、孰れも御採用にはならんから、然う思ひ給へ。」

「失敬な！荒誕だと思ふなら聞き給ふな。僕は單獨で話をする。」

「單獨で話をするとは、覺悟を極めたね。其志に免じて一條聞いてやらう。其代り莨を一本。……」

眼鏡越に學生は渠を惡さげに見遣りて、

「其口が憎いよ。何も其代りと言はんでも、與れなら與れと。……」

「與れ！」と渠は其掌を學生の鼻頭に突出せり。學生は直にパイレットの函を投付けたり。渠は其一本を抽出して、燐枝を袂に搜りつゝ、

「うむ、それから。」

「うむ、それからも無いもんだ。」

「まあ然う言はずに折角話したまへ。謹聽々々。」

「其謹聽のきんの。字は現金のきんの。字だらう。」
「未だ詳ならず。」と其友は頭を掉りぬ。
「それぢや其莨を喫んで謹聽し給へ。
去年の夏だ、八田潟ね、彼處から宇木村へ渡ッて、能登の海濱の勝を探らうと思つて、家を出たのが六月の、あれは十日……だつたかな。
渡場に着くと、丁度乘合が揃ッてゐたので、直に乘込んだ。船頭は未だ到なかッたが、所の壯者だの、娘だの、女房達が大勢で働いて、乘合に一箇宛折をくれたと思ひ給へ。見ると赤飯だ。」
「鹽竈よりは可い。」と其友は容喙せり。
「謹聽の約束ぢやないか。まあ聽き給へよ。見ると赤飯だ。」
「おや。二個貰ッたのか。だから近來は何處でも切符を出すのだ。」
此饒舌を懲さむとて、學生は物をも言はで拳を擧げぬ。
「謝ッた〳〵。これから眞面目に聽く。善し、見ると赤飯だ。それは解ッた。」
「そこで……」
「食つたのか。」
「何を？」

「いや、善し、それから。」
「これは如何いふ事實だと聞くと、長年此渡をやッてゐた船頭が、もう年を取ッたから、今度息子に艪を讓ッて、いよ〳〵隱居を爲ようといふ、此日が老船頭、一世一代の漕納だといふんだ。面白からう。」
渠の友は嗤笑ひぬ。
「赤飯を貰ッたと思つて太く面白がるぜ。」
「こりや怪しからん！僕が赤飯の爲に面白がるなら、君なんぞは難有がッて可いのだ。」
「なぜ〳〵。」と渠は起同れり。
「その葉卷は如何した。」
「うむ、なるほど。面白い、面白い、面白い話だ。」
渠は再び横になりて謹聽せり。學生は一笑して後件の譚を續けたり。
「其祝の赤飯だ。其上に船賃を取らんのだ。乘合も其は目出度と言ふので、若干金か包んで與る者もあり、卽吟で無理に一句浮べる者もありさ。まあ思ひ〳〵に祝ッてやつたと思ひたまへ。」
例の饒舌先生は又呶々せり。
「君は何を祝つた。」

「僕か、僕は例の敷島の道さ。」
「ふゝふ、寧ろ一つの癖だらう。」
「何か知らんが、名歌だッたよ。」
「然し伺はう。何と云ふのだ。」
學生は姑く沈思せり。其間に「年波」、「八重の潮路」、「渡守」、「心なるらむ」などの歌詞は斷々に打誦ぜられき。渠はおのれの名歌を忘却したるなり。
「いや、名歌は姑く預ッておいて、本文に懸らう。左右して居る内に船頭が出て來た。見ると疲曳の爺樣さ。どうで隱居をするといふのだから、老者は覺悟の前だッたが、其疲曳が盲なのには驚いたね。
それが又感が惡いと見えて、船着まで手を牽れて來る始末だ。無途方も極れりと謂ふべしぢやないか。これで波の上を漕ぐ氣だ。皆呆れたね。險難千萬な話さ。けれども潟の事だから川よりは平穩だから、萬一の事もあるまい、と好事な連中は乘ッて居たが、遁げた者も四五人は有ッたよ。僕も好奇心でね、話の種だと思ッたから、そのまゝ乘つて出ると又驚いた。
實に見せたかッたね、其疲曳の盲者が卒と云ッて櫓柄を取ると、仡然としたものだ、まるで別人さね。なるほど此は其道に達したものだ、と僕は想ッた。固より彼くらゐの潟だから、誰だッて漕げるさ、けれどもね、其躰度だ、其氣力だ、猛將の戰に臨んで馬上に槊を横へたと謂ッたやうな、凛然として奪ふ可からざる、いや實に其立派さ、未だに僕は忘れんね。人が難の無い事を(眠つて居ても出來る)と言ふが、其船頭は全く其なのだ。能く聞いて見ると、其理さ。此疲曳の盲者を誰とか爲す！若い時には錢屋五兵衞の抱で、年中千五百石積を家として、荒海を漕廻してゐた曲者なのだ。新潟から直江津ね、佐渡邊は持場であッたさうだ。中年から風眼を病らッて、盲れたんださうだが、別に貧乏といふほどでもないのに、舟を漕がんと飯が旨くないといふ變物で、疲曳の盲目で在ながら、畢竟洒落半分に渡をやッてゐたのさ。
乘合に話好の爺樣が居て、其が言ッたよ。上手な船頭は手先で漕ぐ。巧者なのは眼で漕ぐ。それが名人となると、肚で漕ぐッ。これは大いに然だらう。沖で暴風でも吃ッた時には、一寸先は闇だ。然いふ場合には名人は肚で漕ぐから確さ。
生憎此近眼だから、顏は瞭然見えなかッたが、咥煙管で艪を押す其の持重加減！遥れ見物だッたよ。」
饒舌先生も遂に口を噤みて、不覺に興を催したりき。

魚津より三日市、浦山、船見、泊など、沿岸の諸驛を過ぎて、越中越後の境なる關といふ村を望むまで、陰晴頗る常ならず。日光の隱顯する毎に、天の色は或は黑く、或は蒼く、濃綠に、淺葱に、朱の如く、雪の如く、激しく異狀を示したり。

邇く水陸を劃れる一帶の連山中に崛起せる、御神樂嶽飯豐山の腰を十重二十重に縈れる灰汁の如き靄は、搖曳して巔に騰り、見る〳〵天上に蔓りて、怪物などの今や時を得むずるにはあらざるかと、いと凄じき氣色なりき。

元來伏木直江津間の航路の三分の一は、遙に能登半島の庇護に因りて、辛くも內海を形成れども、泊以東は全く洋々たる外海にて、快晴の日は、佐渡島の糢糊たるを見るのみなれば、四面淼茫として、荒浪山の崩るゝ如く、心易かる航行は一年中半日も有難きなり。

然るほどに汽船の出發は大事を取りて、十分に天氣を信ずるにあらざれば、解纜を見合すをもて、却りて危險の虞寡しと謂へり。然れども此日の空合は不幸にして見謬られたりしにあらざるなきか。異狀の天色は益々不穩の徵を表せり。

一時魔鳥の翼と翔りし黑雲は全く凝結して、一髮を動かすべき風だにあらず、氣壓は低落して、呼吸の自由を礙げ、あはれ肩をも抑ふるばかりに覺えたりき。

疑ふべき靜穩！異むべき安恬！　名だたる親不知の荒磯に差懸りたるに、船體は微動だにせずして、疊の上を行くが如くなりき。是或は軈て起らむずる天變の大頓挫にあらざるなきか。

船は十一分の重量あれば、進行極めて遲緩にして、糸魚川に着きしは午後四時半、豫定に後ること約二時間なり。

陰曀たる空に覆れたる萬象は盡く愁ひを含みて、海邊の砂山に著るき一點の紅は、早くも揭げられたる暴風警戒の球標なり。さればや一艘の傳馬も來らざりければ、五分間も泊らで、船は急進直江津に向へり。

驚破海上の危機は逼ると覺しく、彼方此方に散在したりし數十の漁船は、北るが如く漕戻しつ。觀音丸に近くものは櫓綱を弛めて、此異腹の兄弟の前途を危はしげに目送せり。

やがて遙に能生を認めたる邊にて、天色は俄に一變せり。——陸は甚だ黑く、沖は眞白に。と見る間に血の如き色は颯と流れたり。日は將に入らむとせるなり。

こゝ一時間を無事に保たば、安危の間を駛する觀音丸は、恙無く直江津に着すべきなり。渠は其全力を盡して浪を截りぬ。團々として渦卷く煤烟は、右舷を掠めて、陸の方に頽れつゝ、長く水面に橫りて、遠く暮色に雜りつ。

天は昏瞢として睡り、海は寂寞として聲無し。

甲板の上は一時頗る喧擾を極めたりき。乘客は各々生命を氣遣ひしなり。されども渠等は未だ

風も荒まず。波も暴れざる當座に慰められて、坐臥行住思ひ〳〵に、雲を觀るもあり、水を眺むるもあり、遐を望むもありて、其心には各々無限の憂を懷きつゝ、惆息して面をぞ見合せたる。

方に此時、衝と舳の方に顯れたる船長は、蠢立して水先を打瞶りぬ。俄然汽笛の聲は死默を劈きて轟けり。萬事休す！と乘客は割るゝが如くに響動きぬ。

觀音丸は直江津に安着せるなり。乘客は狂喜の聲を揚げて、甲板の上に躍れり。拍手は夥しく、觀音丸萬歳！船長萬歳！乘合萬歳！

八人の船子を備へたる艀は直ちに漕寄せたり。乘客は前後を爭ひて飛移れり。學生と其友とは良有りて出入口に顯れたり。其友は二人分の手荷物を抱へて、學生は例の厄介者を世話して、艀に移りぬ。

艀は鎖を解きて本船と別るゝ時、乘客は再び觀音丸と船長との萬歳を唱へぬ。甲板に立てる船長は帽を脱して、滿面に微笑を湛へつゝ答禮せり。艀は漕出したり。陸を去る僅に三町、十分間にして達すべきなり。

折から一天俄に搔曇りて、颯と吹下す風は海原を揉立つれば、船は一支も支へず矢を射るばかりに突進して、無二無三に沖合へ流されたり。

舳櫓を押せる船子は慌てず、躁がず、舞上げ、舞下る浪の呼吸を量りて、浮きつ沈みつ、祕術

を盡して漕ぎたりしが、又一時暴增る風の下に、瞻るばかりの高浪立ちて、唯一呑と屏風倒に頽れむずる凄じさに、剛氣の船子も啊呀と驚き、腕の力を失ふ隙に、艫はくるりと波に曳れて、船は危く傾きぬ。

しなしたり！と渠は益々慌てて、此の危急に處すべき手段を失へり。得たりやと、波と風とは益々暴れて、此艀をば弄ばむと企てたり。

乘合は悲鳴して打騷ぎぬ。八人の船子は効無き櫓柄に縋りて、

「南無金毘羅大權現！」と同音に念ずる時、胴の間の邊に雷の如き聲ありて、

「取舵！」

舳櫓の船子は海上鎭護の神の御聲に氣を奮ひ、矢庭に艪をば立直して、曳々聲を揚げて盪しければ、船は難無く風波を凌ぎて、今は我物なり、大權現の冥護はあるぞ、と船子は忽ち力を得て、爰を先途と漕げども、盪せども、益々暴るゝ浪の勢に、人の力は限有りて、渠は身神全く疲勞して、將に昏倒せむとしたりければ、船は再び危く見えたり。

「取舵！」と雷の如き聲は更に一喝せり。半死の船子は最早神明の威令をも奉ずる能はざりき。

學生の隣に竦みたりし厄介者の盲翁は、此時屹然と立ちて、諸肌寛げつゝ、

「取舵だい!!」と叫ぶと見えしが、早くも舳の方へ轉行き、疲れたる船子の握れる艪を奪ひて、金

輪際より生えたる如くに突立ちたり。

「若い衆、爺が引受けた！」

此聲と與に、船子は磯と僵れぬ。

一艘の厄介船と、八人の厄介船頭と、二十餘人の厄介客とは、此一個の厄介物の手に因りて扶けられつゝ、半時間の後其命を拾ひしなり。此老いて盲なる活大權現は何者ぞ。渠は其壯時に於て加賀の錢屋内閣が海軍の雄將として、北海の全權を掌握したりし磁石の又五郎なりけり。

聾の一心

一

三十六番、と看護婦の呼ぶに應じて、一個の少年の肩に縋りて、余が面前に動出たるは、先年寄宿せし家の主翁なり。半白の髪は蓬と亂れ、髭髯は谷間の苔と生ひて、其眉は顰み、其眼は陷み、頤尖り、頰痩けて、額は幾重の皺を刻み、憂愁面に溢れて、身邊に髣髴として死の影を認む。渠が疾の輕からざるを念ふと共に、患者を憐むの情油然として起りぬ。

「久濶でしたね。奈何なさいました。」

患者は最懷し氣に見えたり。渠は耳よりは寧ろ眼を以て余が言葉を解せむとする如く、余の顏を打瞶りて後、徐に少年を顧みて、右なる耳を傾けぬ。渠は聽くことの疎きなり。少年は其心を得て、

「あのね、何處が不快のだッて藤井樣がおつしやるの。」

患者は頻に頷く。少年は余に向ひて、

「あの通り耳が遠いのですから。僕が申します。」

かく言ひて、左の肩を脫がしむれば、右の腋の下まで袈裟懸に繃帶したるが、腫物と覺しく、左の首の附根は梨子の實大に隆起して、布に入染める血膿は赭黑く凝固せり。

爾時少年は効々しく繃帶を解放ちて、

「こら這箇になつて！」

と氣遣しげに指示せり。之を檢すれば、余が金澤病院に來らざる先に、何人か刀を下せしと見えて、腫物の眞中を拇指の頭大に抉り、疵口には一塊の綿撒絲を介みたるが、左鎖骨上窩全部潰瘍して、皮腐り、肉爛れたるに、多量の膿汁附着して、不潔謂ふ可らず。

咄、何等の庸醫ぞ！余は此施術の當を得ざるに驚きぬ。

「今迄何處の醫者に懸つてお出だ。而して何時誰が此療治を爲たの？」

病者は覺束なげに眉を顰めて、唯余の面を視むるのみ。

少年は問に應ぜり。聞くが如くば、私立……病院の醫師某輕々しく之を切開せりと。唉！人肉を見ること死魚に齊し。余又何をか謂はむ。少年は慨然として、

「先生が當地にさへ在らつしやれば、他へ行くのぢや無かつたのですけれど、故郷へ歸省になつてお留守だものだから、あの、……」

言はむとするを余は制して、

「否、其醫者の名は聞くまい。他の醫者の後始末をする氣で無く、此だけの病氣として、私が引承けて療治をしよう。其處で、」

と既往の經歷を訊問して、やがて少年に諭して曰ふ。

「何しろ、此は綺麗に掃除をして、すつかり膿を出してしまはぬと、到底癒ることは無いからずつと切開いて、而して手當をするのだねえ。」

少年は姑く思案して、

「でも切つたら血が出やしませんか。」と仔細げに質問せり。

余は思はず微笑を含みて、

「ふ、ふ、無論、出るとも。」

「やあ、其奴は困る。」

と少年は頭を搔きて、

「僕は構ひませんけれど、姉樣は氣が弱いもんだから、血といふと蒼くなつて、何ぞといふと御飯も食べないので、仕樣の無い女子だから困つちまふ。」

と慧しくも腕を拱きぬ。

少年には阿駒といへる姉ありて、父に事へて孝なることも、弟を育てて悌しきことも、姉弟に

母の亡きことも、余は豫て之を知れり。

「あゝ、お前の姉樣なら左樣だらう。しかし血は直に止まるから、切つたといはないで措けば可い。而して其內に理由を謂つて聞かしておあげ。」

少年は忽ち、

「それぢや、是非、癒るやうにして下さい。」

這般の談話十分時。病人が聞得しは十の二三に過ぎざるべし。渠は少年の顏と余の顏とを交々打見遣りて、穩ならぬ面色にて、屢々乾びたる咳せり。

余は手術臺を指さして、

「彼へお乘なさい、療治をしてあげるから。」

注意して命ぜし聲は渠の耳に入りぬ。唯々として半ば身を起せしが、惑へる狀にて逡巡して、眼を以て愛兒に是非を問ふ。意を了して少年は父の手を緊と握り、

「あの、全治るやうにしてあげるッて。」

と導けば疑ふ色無く手術臺に這上りぬ。

事に馴れたる看護婦は、咄嗟に萬端準備して、

「貴下、枕を。」とて横臥を勸むれども、患者は應ぜず、

「父上、横におなんなさい。」
と少年の言下に渠は横はりぬ。
刀を下すに先だちて、余は少年を遠ざけむものと、
「血が出るから彼方へおいで。」
と注意せり。少年は一足退りて、
「こゝで見てゐます。」
施術の模様は語るを欲せず。強てせば人をして不快の念を生ぜしめむのみ。畢ると等しく少年は衝と來りて、徐に父を扶起しぬ。此間一語を出すもの無し。新らしき繃帶を施して、看護婦は吻と呼吸を吐き、
「あゝ、驚いた、剛い方だ。貴下は眞個に能くお堪へなさつたね。」
渠は先に患者の容貌の愚なるを見て施術の煩はしきを慮り、痲醉劑を投ぜむことを勸めし言にや恥ぢけむ、口を極めて稱揚す。余は亦其膽力を驚嘆せり。
「こんなのは寡い。」
「さうですとも私は始てです。」
と看護婦は答ふ。少年の意氣揚々たり。渠は今瞑目して心を靜めつゝある乃父の耳に口して、

「阿爺々々能く堪へたね。此でもう可いの。」
と其背を撫づれば、患者は太き呼吸を吐きて、
「應、此位辛抱したら、彼の龜は出來ようかな！」
少年は活潑に、
「えゝ、出來ますとも。」
「龜さへ出來りやあ、此しきの事。」
と病翁の面上一時生氣を帶びて輝く如し。

二

渠は金銀の細工師にて、彫刻の妙手と聞えたり。（聾の一心）といへる名縣下に遍く、實名を知る人極めて稀なり。年紀五十二。少きより彫刻を業として精錬の手腕三百六十五本の鑿を操縱して心の欲する所に從はずといふこと無し。
志潔く、行正しく、法華に歸依して、其言頗る僻なり。意氣人と合はず。世事に疎く、愚の如く、頑の如く、或時は狂の如し。
人は半日にして作すといふ一本の銀の簪を造るも、經營苦心三日餘を費して、家道の衰ふるを

省みず。凡そ一心が作料を以てせば、世間黄金無垢の簪を造り得む。天下幾人の好事者ありて、彼黄金を捨てて此銀を取らむや。要するに、渠は人を悦ばしむる美術家にあらずして、自ら娛む職人なり。

偶々盃の象嵌、急須の彫刻、黒棚、廚子、屏風の金具等の註文ありて、人其好仕事を得たるを視ずれば、一心懌ばずして、「こりや俳諧の附合。」と、蓋し他作に照應するを專として、打越、去嫌の斟酌におのれの志を展得ざるを憾めるなり。

常に予に語りていへり。「我大なる願無し。唯纔に自ら善といふ物一個作得てむ。是一期の思出なり」と。常に貧を憂へず、病を懼れず、醫を勸むれば、「措け。人は病を以て死するものにあらず。天壽盡きて死期來らば、姉は鼓を拍て、弟は立つて舞へ。我は小鍛冶を謠ひて一酌を傾け、微醉機嫌の間に往生を遂げむ。」と、予は其人となりを察て、或は此言の實行し得べきを想ひぬ。

今や然らず、腫物に惱みて兢々たり。「龜が……」云々の一語は所以無くはあらず。問試みむと思ひしに、診を乞ふもの連りに臻りて、暇無くてさて寢みぬ。午後二時半院務を終へ家に歸るに先だちて、前に一心に施術せし時、切取りたる一片の肉を取出でて仔細に顯微鏡に照したり。之を久しうして今まで萬一の僥倖を期せし予は覺えず「肉腫。」と叫びて、顯微鏡を持てる手を放ち、失望せる顏を擧げて今朝一心が歩去りし廊下の方を目送しつゝ、

「可哀相に、所詮駄目だ。」

然れども予が見果して是なるか、然らざるかを確めむと、——否寧ろ老一心の爲に願くば予が見の否ならむことを發見せむと——再び顯微鏡を熟視せしに、依然として髓樣肉腫組織の細胞を認めたり。

「藤井樣熱心ですね。」

と言ふ聲に頭を回らせば、外科々長木村醫學士亭として予が背後に立てり。

「いや、先生。」

醫學士は微笑みつゝ、「何の試驗です。」

予は先刻抉去したる組織を指して、「御覽下さい。」と椅子を讓れり。

醫學士は鏡上に隻眼の瞳を凝して、

「は、は、成程、肉腫だ。樣子に依つたら、手術をして半歲は助かるも知れんが、位置は何處です。」

予は既往の經歷と、目擊せし顯象を說くこと一番、醫學士は頭を掉りて、

「斷つておしまひなさい。」

「否、私を信じて命を任せました、のみならず、知己ではあり、可哀相なものですから。」

と語るを聞きて、醫學士は、「いかにも。」と頷きぬ。
「然し張合がありません、止を讓られたも同一です。」
醫學士はまた頷き、
「いかにも。其で、」
「爲方がありません。潰瘍面を鋭匕で浚つて、洗流して防腐繃帶を施して、斯酒を强壯劑に與へました。」
醫學士は連に頷きて、「可矣。」
予は其最終の意見を問へり。外科を支配して神の如き科長は、衝と身を起して、「豫後不良。」と言捨てて、冷々然と室外に去りぬ。

三

やがて師走になりぬ。その二十日は、實に肉腫の患者が病院に來れる最後の日なりき。
此日腹部の疼痛を訴ふるにより、余は按檢を試みしに、病毒漸次に蔓延せるが爲に、肝臟は著しく增大して、左は副胸腺の邊まで、下は臍窩の高きに達せり。病の危急はこれのみならず、肉腫の顯象恐るべきかな、無花果の熟したらむ如く、皮裂け、肉爛れ、濃紅に色附きて、殆ど牡丹

の花に似たり。
肉腫は稀に見るものなり。然れど皆無といふにはあらず。他の該難症に惱めるものの、來りて診を乞へるもありしが、未だ爾く甚だしきを知らざるなり。是他なし、庸醫施術を過りて毒汁を盛りたる囊を破り、一瀉して之を老彫刻家の全身に浴びせしに因る。爆裂彈の恐るべきも、破裂に先だつ刹那に於て、疾く之を他方に放擲せば或は危難を免るべし。一發轟然として碎散せば、誰か能く之を防がむ。
一心が死期遠からず、將に旬日にして斃るべし。全治の望無きよしは、先日既に少年の耳に囁きぬ。さりながら病者の失望せざらむため、豫て少年を警戒して、父にはたゞ、「心長閑に養生せよ。」といはむことを命じたれば、一心渠自身は全癒すべしと信ずるならむ。
却説患部を清洗して、防腐繃帶を施して後、少年に諭して、一心に勸むるに撮影せむことを以てせり。蓋し珍しき腫物なれば、參考に供せむとてなり。
渠は少時默考せる後要求を容れたれば、最寄の寫眞師に赴かしめ、一足後れて余は出でつ。只見れば父子の影は無かりき。「さては寫眞を嫌へるか。」と屹と四邊を見廻せば、父子は病院の前面なる紺屋の店頭に立ちたるが、少年は手以て余を招きぬ。「先生、此處に。」足疾に其處に抵れば紺屋の妻は奥より出て、一心に來意を問へり。少年は父に代りて、

「御家に蓑龜が居りますつて、他所で聞いて參りました、親父が是非と申しますが……見せて下さいましな。」

妻は快く諾ひ、良ありて、一個の水鉢を携へ來りて、之を病者の手に渡しぬ。

爾時一心は欣然として水鉢を取らむとせしが、病苦に力衰へて、須臾も支ふる能はず、少年をして捧げ持しめ、傍目も觸らで視めたり。

實に珍しき龜にして、甲の直徑一寸二三分、首及び手と足は通常の龜に異ならず。但尾の上に蔽懸りて藻に類したる水草の茸々と附着せるが、描ける蓑龜は是ならむか、不可言の靈氣ありて存せり。

一心は恍惚として醉へるが如くなりしが、矢庭に水鉢に手を入れて、龜を水中より出ださむとす。少年は慌だしく、「あれ、父上。」其不遠慮を制すれば、「いゝえ、可うございます。」と妻は許せり。少年は喜ばしげに、

「父上、手に受つても可うございますとさ。」

少しく猶豫ひたる病者の指は、直ちに龜を掴みぬ。一心固より近視眼なれば、鼻頭を凝視して、多時他念あらざりしが、やう〳〵會得やしたりけむ、龜を放ちて滿面笑を含めば、少年は恭しく一禮し、父も齊く小腰を屈めて、此處を去りぬ。

道すがら余は、

「龜といふのは、何か。何處かの註文かい。」

「へい、ある金滿家の誂物で、百五六十匁の地金を黃金無垢でしようといふので、作料は惜まず、暇は構はずに、親父の思ふ存分に仕上げろと謂ふものですから、親父は大喜で、こんな仕事は滅多に無い。一生に一度はあるだらうと思つて居たら、到頭手に入つた。これは佛樣の御引合だつて、長い間精進をして、蠟型が一月半懸つて、やう〳〵其來上ると、龜の眼の玉を穿る鏨が一本、何しても工合の良いのが無いとつて、三晩寢ずに考へて、それからいよ〳〵眞物に懸るとなると、地金も吹かない前に病氣が重つて、平時なら勸めても肯かないのに、今度ばかりは自分から騷出して身體が不自由で鐵鎚が持てないから、早く治して仕事がして見たいッて御醫者樣に懸つたんですけれど。」と圓なる目を瞬き、「でも自分は癒る積りで、今も紺屋の龜……龜、」と言ひさして悚へず涙を流しけり。

肉腫を撮影せる寫眞は、今尙止めて病院にあり。就いて見よ、「死」を有形に表はすに適當なる模型を得む。

四

二十三日の午後より、予は半日の閑を得て、大川一つ彼方なる友人の家に遊び、碁に夜更して、雪中歸途に就きぬ。

臥龍山の麓を流るゝ淺野川に架したる天神橋を渡る時、山寺の鐘一點、降りしきる雪に響きて、我より他に人無かりき。

恰も狐の聲せり。予は思はずも一足退りぬ。橋の半に婦人の裳紅なるが仄見えて、間近に行けば、果せるかな、冷たき綿に頰を埋みて、女一人偃伏したり。髮亂れて風に散り、布子は埋れて鷺鳥の毛織の如し。雪明に一見して、疑ふ可くもあらず、阿駒なるを認めたり。

もし予が此處に來ることの一時晩からば、――はた今こゝに來れる者の醫を學びたるにあらざりせば――阿駒は此まゝに、往來の人の涙手向くる、橋の女神となりしなるべし。

「お前は、まあ何したのだ。」と搔抱きつゝ問出でたり。女は只管身を恥ぢて、白き頸の見ゆるまで予が胸に俯きつ、袖を重ねて面を蔽ひ、暫時は物も得言はざりけり。

折から山颪颯と雪を吹上げ、吹下ろして、川靄深く立籠めたるに、吹雪は空に渦卷きて、眼をも口をも開くべからず。

予は二重外套の一重を脫ぎて、女の肩に打被け、

「須臾も此處には居られない。何しろ早く彼方へ行かう。」

と扶起して立上れば、阿駒は身を退りて、

「私には御介意無く――お疾く去らつしやつて。……」

予は太く怪みて、

「此處に立つて居て何うする氣だ。」

女答へず。推返して、

「既に凍えようとしたでは無いか。此上冷えると生命が無いよ。」

と少しく聲を勵ませば、

「私はあの……私は、……」

と歔欷に聲曇りて、あまたたび言淀みけるが終に、

「助けて下すつた貴下が怨めしい。」

とわつと哭びて、欄干に打伏しけり。予は言忙しく、「何故。」

女は涙を呑みて、

「父上が、もう、もう、助から、ないと、申しますから、……私や、何うしませう。譬ひ壽命でも、私の、生命と取替へて、龜の細工の出來るまででも、何うぞ癒してあげたくつて。」

と切々に語り出づる。

「そりや飛んだ心得違ひだ。何して神佛がまた其樣無理を容くものか。」
「でも母上は、容いて下さいます。亡くなりました母は大層私を可愛がつて、ですから願つたら叶ひませう、と毎晩此處まで參りました。墓が向の山にございます。今夜が丁度七晩め、先刻あのまゝに死にましたら、其こそ願が協つたので。」
と聲を忍びて泣居たり。其心中を察すれば、誰か之を迷信と謂はむ。母にして假靈あらば——されど——靈あらば、尙いづくんぞこの理由無き犧牲を享けむや、一旦死して復活せるにて、母の心は知るべきなり。
女の肩を輕く壓へて、予は曰ふ。
「これ、心を落着けてよく考へて御覽。人參の代に身を賣るより、煎藥一杯飲せないでも、傍に居る方が餘程孝行だよ。お前の一分は其で立たう。死ぬ方が氣が晴れよう。が後へ殘つた者の身になつても見るが可い。何しろ今夜は內へお歸り。私が門まで送つてあげる。ともかくも一晩寢て、翌日になつて思直すが可い。」
雪は何時しか降歇みて、北方に鬱積せる幾層の雲の底より、寒月冷かなる光を放てり。醫王三峰の山遠く、峨々たる水晶玲瓏たり。近き臥龍山の頂より天神橋の袂まで、絕壁雪に埋もれて、聞えぬ瀑ともいふべからむ。魔所の名高き五本松、宇宙に朦朧と姿を顯じて、梢に叫ぶ天狗風、

川の流と相應じて、音無き夜より物寂し。
「心配するな。お前が死なないでも龜は出來る。むゝ、なに、虛言をいふものか。なか〳〵重い病氣だけれども、昨日今日少し見直したから、介抱が大事だ。」
と信しやかに欺けば、女ははじめて顏を上げぬ。月下雪中の美人、神女の姿と今も忘るゝこと無し。

五

爾來余は最も苦慮して、適切なる對症治方を施し、患者をして齡を重ねしめたり。曆は二十七年に更まりて、一心行年五十三、余は信ず、醫は得て天に勝つことを、病症を推して考ふるに、造化が一心を取去る期は、五十二歲の年末なりしなるべきなり。
一夜、日は忘れたり。十時を過ぐる頃なりき。少年は慌しく余が當時の住居に駈來りて、突然腫物より出血あり。水の低きに就く如く滾々として流れて止まずと、因りて往診を乞へり。余は我兒の急に赴く如く、取るものも取りあへず、其家に到りし時、幸に出血減じたれど、氣落やしけむ、一心は茫然自失せるが適當なる手當を施して、後其心地を問ふに及びて、渠は始めて余の在るを心着きぬ。

「起きるには及ばない、其儘に。」
と余の制むるをも肯かず、辛くも身を起して、寢床の上に畏り、
「早速御見舞下さいまして難有う存じます。何が扨些細なことに夜夜中お騷がし申しまして、好い年紀をしながら、其樣に婆婆が戀しいかと、おさげすみ下さるな。龜が拵へたいばつかりに、未練で死にたうございませぬ。」
とはら〳〵と落涙せり。余は少しく膝を進めて、
「遠慮するには及びません。用があつたら一時が二時でも呼びにお寄來し。」
と少年を顧みて、「父上は遠慮深いから、お前樣達が氣を着けて、可いか、何時でも。」
一心は余に向ひて、
「身體がめつきり弱りまして、段々御膳も戴かれなくなりますが、何と塩が持てる樣になりませうか。」
と心細げに問ふ哀さ。余は事も無げに、
「辛抱なさい、きつと快くなる。」
一心は少年の方に耳を差出して打傾き、
「何とおつしやる。」少年は大聲に、「いまに快くなりますと。」

愁然と横を向きぬ。一心は嬉しげに、
「貴下がさうおつしやつて下さりますれば、氣丈夫にございます。」
余は四邊を見廻せしに、傍に据ゑたる机の上に、蠟にて造りたる龜の型あり。「龜といふのは此ですか。」手に取りて打視めぬ。
一個の這ふ龜の背に、其子と覺しきが負はれたり。負はれたる龜の兒は水より這出でたる狀なれば、其尾の未だ水氣を帶びて垂下せる趣を表さむため、殊に意匠を盡せりとか。水の垂る如き細工振なり。唯指をもて試みたりし蠟型だに斯の如し、塩を以て造り出ださむには恐らく古今の靈物ならむ。
女は此時茶を煮て我に齎しぬ。先夜天神橋に於ける一條の物語は父に祕めたれば言出でず。唯其清しき眼を以て感謝の情を表するのみ。余も亦知らず顏にもてなしつ。
少年は老實だちて、「姉樣おいしいものは無いの。先生に。」「否もう歸る。」と座を改むれば、愈々急きて、「姉樣てば。」父もまた傍より、「これ何ぞ進げますものは無いか。」女は、「唯、唯。」と答へたるが、何やらむ含羞みて竊と少年に眼授せして、座を外し次の室にて何事をかひそ〳〵囁く聲す。
「御蔭樣で便通があるやうでございまする、御免下さい。」

と一心身を起さむとすれば、少年は馳來りて連行きぬ。入違ひに女、
「折惡くあの何でございますし、……愚父も如彼申しますものを、……」
と口の裡にて謂ひしが聞えず。紙に包みたるものを余が傍に差置きつ。
「父上にはお菓子と見えまする樣に、此處にお置き遊ばして、……」
とまた口籠りて顏を赧めぬ。只見れば花簪を包みたるなり。
一心が家の豐ならざるは、我能く之を知れり。況して病床に呻吟して收入の道絕えたるをや、酸鼻の情に堪へざりき。
「餘計な心配せんでも宜しい。藥は無料あげるから、其價で牛乳でも鷄卵でも身體が弱ると不可から。而して風邪を感かさぬやうに。」
女は唯涙にくれぬ。
此時父子は座に歸れり。一心は炬燵櫓に攀上りて、柱時計を打視め、
「おゝ〳〵、今やつと十一時。夜の明けるのはまだ〳〵間があるの。」
「父上が、またお極だ。」と言へば女も少しく微笑を含みて、
「平時でも小用に行つて來ると、屹度時計を見ますんですよ。」
「いや、翌日になつたら蟄が持てるか、翌日はまた翌日はと、そればつかりが思出で、たゞ翌日

の日が待久しうございます。はゝゝゝゝ、本卦返は未だでございますれども、嬰兒の樣だというては、兒等に笑はれまする。」
と物寂しげに笑を洩らせり。余も莞爾として、
「左樣ですとも、氣永に翌日をお待ちなさい。」
と慰めし時の余が心中はいかむ。一心が翌日を待つは、卽これ死を待つものなり。誰か彼のみを然りといはむ、謂はずや人生朝露の如しと、されば老と幼とを問はず、翌日ありとて樂しむ者、蓋し皆死期を樂しむ者なり。
其より後老一心が身體は、日一日に衰へて、一月九日正午十二時、死に先立つこと三十分、少年は余に馳せて變を報ぜり。直ちに急に赴きしに、父は女に抱かれて昏々として眠れる如し。皮下注射一回、二回、三回に及びて余は大聲疾呼、
「藤井が來たぞ。」
一心吻と呼吸を返して眼を睜き、
「殺された。龜、龜が鼠に嚙まれて死んだ。」
と拳を握りて切齒する側より、少年は龜の蠟型を片手に捧げ、右手には父を抱きながら、
「父上、これ御覽なさい。活きて居ますよ。」

と眼の前近く差寄すれば、阿駒は聲を震はして、
「しつかりして下さいまし。死んぢやあ不可ません、よう父上！」
一心は屹と瞳を据ゑて、
「應。」
名工聾の一心は、竟に不歸の人となりぬ。

祕妾傳

一

榮枯盛衰時なる哉、さしも北國を管領して、鬼と呼ばれたる柴田修理亮勝家も、賤ヶ岳の合戰に猿冠者が智恵袋に盛入められ、既に討死と決せし時、勝家恩顧の愛臣なる毛受勝助家照、漢の紀信が義を重んじ、金の御幣の馬印出沒自在に敵を支へ、其場に命を致せし間に、勝家主從八騎にて、柳ケ瀨より十三里、越前の國府中まで心靜に落行きけり。

時に府中の城將は前田又左衞門尉利家なり、勝家打負けて此處に落來ると聞くより、親ら出迎へむとせられしを、近臣目賀田又右衞門慌しく押留めて、「敗軍の將はともに兵を談ずべからず」と承る。今勝家單身にて當城に參るこそ幸ひ、討取つて首になし、秀吉公に參らせ給はば、御本領安堵疑ひ無し」と憑むれば、利家耳にも懸け給はず。ハヤつか〳〵と座を立たれしかば、又右衞門袂を扣へて聲を勵まし、「こは心無き振舞をし給ふものかな、秀吉やがて追來り、當城を圍まむには、いかにして防ぎ候べき、今にして御心を定められずば、悔ゆとも其詮候はじ」と言ひも果てぬに、利家憤然として色を作し、手なる扇子を以て又右衞門の横顏をしたゝかに打擲したまひ、

「コヤ利家ほどの者が筑前の武威に恐れて、匠作を賣ると想ふか、譬ひ天下を得ればとて、不義なることとして何とせむ、汝が如き臆病者は見るだにも眼の穢なるぞ。」とて立處に御目通りを遠ざけ給ひ、急ぎ城門に出迎はれ、勝家が馬上に悄然たるを御覽じ、「これは〳〵匠作どの、よくこそ御入候へ」さも懷かし氣に手を取りて、書院に伴ひ給ひけり。

鬼柴田勝家は感慨胸に充滿て更に一言も發し得ず、座定るに及びて愁然として利家の顏を瞻りけるに、利家はこれを慰め、「など左のみ氣を屈し給ふぞ、北の庄には未だ勇士達も多かるべきに靜に後の計をなし給へ、筑前やがて來らむには某此處に喰留めて快く一合戰すべきにて候ふ」と勇ましげに勵まし給へば、勝家きつと容を更め、「否、勝敗は兵家の常なれども人には死すべき時あり、我勝家十三歲の初陣より今五十七歲に到るまで、大小の合戰七十餘度、遂に不覺を取りし事無し、然るに猿冠者が惡智恵に脆くも敗を取る斯くまで賴少なく成果てしは、これ天我を亡ぼし給ふなり、無益の戰何かせん、靜に最後を急ぐべく候、唯御邊が信義のほど身に染みて嬉しく存ず、さりながら所詮報酬はなし難し、筑前御邊とは分けて心安きなかなればつらくは當り申すまじ、渠猿の敏捷を以て追着けこゝに參るべければ、城を開いて和を講じ、本領安堵なし給へ、些少も恨には存ぜず候ふ、今日の戰に今は斯うと思ひたれば、所詮御目には懸からるまじと遺憾く存ぜしに、斯く心置きなき對顏を得たるは勝家一生の思出に候なり。」と鬼の眼に暗涙を浮べた

り。

利家は腕を扼し、「いひ効なし勝家どの、天命は人に因りて定まるものぞ、利家斯くてある内はよも筑前に御身の白髪首は見せ申さじ、いでや諸共に當城に籠られよ、筑前來らば目にもの見せむ」と犬千代の勇氣毫も衰へず今にしてます〳〵壯なり、勝家心地好げに莞爾と笑み、「御邊爾くある間は織田公の公達情なき目は見給はじ、これにて安堵いたしたり、但勝家は運の究と存ずればこの命を貪る合戰は仕らじ。」とさすがは猛將末路を知りて悠々たり、利家も慰め兼ねて口をつぐむ、一座蕭條、聲なくして鬼神の哭するを聞く、少時して勝家は言を繼ぎ、「我城に皈るの日、北の庄は焦土とならむ、就ては一條の依頼あり、今日我を落さむとて、最愛の臣毛受家照、我に代りて討死したり、渠には勝家が領地の半ばを割きても與へま欲しき者なれども、世を辭したれば力及ばず、こゝに小侍從といへる女、家照が妹にて今北の庄の奥にあり、せめては渠に天壽を全うせしめて家照が後弔をさせむと存ずれば、物に託つけ後より當城に送り越すべし、御邊心あらば我が微衷を察し小侍從を養ひくれよ」と鬼にも人知れぬ情あり、利家快く打頷き、「餘りお安きことに候ふ」

今はハヤ思置くことなし勝家胸襟を開きて座を寛げ、「時に又左、我太く饑るたり、何は無くとも苦しからず、湯漬一杯御無心申す」利家「既に酒宴の用意いたせり」

斯くて修理亮勝家は快く太白を滿引して談笑常の如く、醉うて後飽くまで湯漬を喫し、さらばとて辭して城外に出でたり、利家戀々としてこれを送る、何處までも名殘は盡きじ、勝家はしかと利家の手を握り、「御邊長に壽長かれ我は已に老いたり」と滿面に羞を帶び、呵鞭一擊馬を分ちて、北の庄へと急ぎける。

二

玆に勝家の室小谷の方は、故織田公の妹にて固淺井長政の室なりしに、長政滅亡の折城を出でて、お初、おちや、おのぶといふ三人の姫君とともに命を助かり去年北の庄に入輿ありし女性なり、既に良人と死を齊しくせず、況して兩夫に見えしほどの節操無き婦人なれば、賤ヶ岳の合戰に味方敗軍と聞きて恐れ惑ひ、さて世はいかゞなるべきぞと易き心もなき處へ、勝家散々になりて引返せしかば、小谷の方見苦しく取亂し、我返咲の世に出でて安樂に日を送り榮耀榮花に暮さむと思へばこそ、見るもいぶせき鬼侍に可惜肌身を汚したれ、然るに要らざる軍を起し勝ちて天下でも取ることか、兄信長の草履摑猿冠者づれに打負けて淺ましく成下り憂目を見することの怨めしさよ、斯る言効無き良人何にかせんと、はしたなき愛想盡し衣引被いて打臥しつゝ、勝家に逢はむともせざりけり、あゝ淀君の母なるかな。

されば勝家も小谷の方の心底を計り兼ね、死を決するに及びて豫め文荷齋德庵をして其心を探らしめたり。文荷齋德庵命を承けて、小谷の方の御前に出で、「さてはや當城も今を限りとあひなり候ふ、姫君御三方は慥に織田殿下の姪にて渡らせ給へば秀吉酷くは扱ひ申さじ、早く城を出だし參らせよと君のおほせられ候ふ。」とばかり故と小谷の方に言を及ぼさず、斯くと聞きて小谷の方「妾はいかにせむ」と心許なげに問はせ給ふ、文荷齋は潛かに歎息して所詮操を完うしたまふことはあらじと思ひ、「君にも同く落ち給ふが宜しからむ」と申しけるに、吻と呼吸をつきて安心の色を露し直ちに落支度をなし給ふ、時にお初どのといふ第一の姫君生年十五になり給ふが傍よりソト母公の袖を引き、「父上はいかゞならせ給ふべき」と言懸けて其顏を瞻り給へば、小谷の方ハッと行詰りて顏を赤め、言句も出でで不機嫌なり。

母公はともかく姫君は必ず落し參らすべき內命を請けたれば、今もし實を謂はば父上と死をともにせむとて城を出で給ふまじ、如かず賺さむにはと文荷齋心に領き、「君にも追附け落給ふべきにて候ふ、早先達ちて出でさせ給へ」と事も無げにこしらゆれば、小谷の方はニコ〳〵顏、「あれ聞きや、德庵がいやる通りぞ、足手纏ひにならぬやう早く城を出でられよ、ソレ誰かある、伴いたせ」と自分が急きて促し給へど、お初殿は肯入れ給はず、「いやそれは虛言よ、父上いかで落ち給はむ、よしそれとても一所ならでは得こそ立たじ。」とむづかり給ふ、文荷齋は其殊勝さに泣き

ながら是非の問答無益なりと矢庭に姫を負參らせ、おちや、おのぶの二方は腰元に抱かして衝と この處を立出でたり。

小谷の方いそ〳〵して取るものも取りあへず後れじとし給ふ時、毛受勝助家照が妹、生年二十になりけるが小侍從と呼ばれてこの北の庄の奥に事へたる兄に恥ぢざる義烈の美人、見るに見かねて進出で、「お情なし內室樣、殿の先途にも立ち給はで御立退は何事ぞ」と慨然として諫めける、小谷の方ギョッとせしが空惚氣、「君にも城を落ち給ふよし只今文荷齋の申したり、妾のみ助からむといふにはあらず」と言巧みに言ひ廻す。小侍從は面を正し、「德庵殿は姫君を賺せしにて、殿の御生害遊ばすことは我も人も知るところ、君は正しく織田公の御妹にて勝家公の御內室ともいはれたまふ御身なるに、餘りと申せば御卑怯な。」と思ひ餘りて言鋭く恥かしむ、小谷の方堪へず眉を揚げ、「おのれ主を主とも思はず、女と侮り無禮を申す、卑怯者とは何事ぞ、いま一言いうて見よ、其分には差置かぬ」と睨め附け給へど恐るゝ色無く、「妾に並居る腰元達、數ならぬ私までお城とともに焚死ぬ覺悟固より命は惜からず、御存分に遊ばしませ、なれど君の御未練より殿の御名まで汚し給ふが口惜しければ斷つて御立退きの儀は御無用。」と面を犯して詰寄る小侍從、小谷の方は恐を抱き、「妾强ちに命を惜むにあらず、文荷齋も落給ふが宜しといへり、それゆゑに」となほ只管遁構へ、小侍從は心を決し、「斯ほどまでに申しても御肯入れ無ければ是非に及ばず、

今見せ參らすものあり。」と内懷より取出すは封じ目切りたる一通の文、片手に持ちてじり〳〵と寄り、「君の御召物を疊む時、御袖の裡より出でたる密書、御覺え無きことよもあらじ」と差附けらるゝを一目見るより、「それ見られては」と小谷の方蒼くなりて遁げむとす、蓋し秀吉の艶書なり。

秀吉藤吉郎といひし頃より小谷の方の艶色にあこがれしがはじめは長政のために思ひを果たさず次にまた勝家に取られしを口惜く思ひしかば北の庄没落に先だちて小谷の方に文を通はし、我心に從ひ給はば榮耀と歡樂を與へむと其水心を誘ひしなりけり、後に秀吉おちやどのの容色の最も能く母公に肖たるを愛で娶つて妾としたるものこれ卽ち淀君なり。

小谷の方は鬼を猿に乘換ゆる下心ありしかば今小侍從に内祕を發かれて大きに驚き、コハ溜らじと遁げむとする片袖を捉へて小侍從一聲鋭く、「お待ち遊ばせ」右手に觸るゝは懷裡の短刀。

三

小谷の方は殺氣を含める小侍從に引留められて震ひ戰き、泣聲を揚げて、「アレ主殺し」と助を呼ぶ、腰元はこれを見れども小侍從既に迫りて手中に生殺の權を握り居れば、今更如何とも詮方なく唯あれ〳〵と立騒ぐのみ、救ふ者無ければ小谷の方は絶體絶命、取られたる袖を引切らむと

急り給ふ、裳を攫みて引僵し小侍從心中に謝罪ながら、雪より白き胸元にグザと刺して抉りければ、小谷の方は苦とばかり手足を悶きて呼吸は絶えける、小侍從は熟と最後を見定め、いで追着きて三途の川の瀨踏して參らせむと、短刀逆手に取直す、此時襖の外より雷の如き聲を懸け、「小侍從、待て」と呼ばはり留めつゝ柴田勝家出來れり。

小侍從後るゝとにはあらねども、鬼神が雷聲に呵せられて思はず自殺の手を留む、勝家は言靜かに、「汝小侍從我が面汚しの小谷めをよくも刺殺しくれしよな禮をこそすれ敢て咎めじ、仔細は既に聞いたるぞ」とさも卑めたる態度もて妻の屍を流眄せり、小侍從は唯恐入り、「勿體なき御言、何と申上げむ樣も無し、我儘の自殺は思留まり候へば、いかなる御仕置をもなし下さるべく。」と惡怯れもせで覺悟の體、勝家は頭を掉り、「イヤ小谷が自から身を殺せし體にもてなさでは我が恥辱は蔽ひ難く汝の苦衷も水の泡なり、さすれば弑逆の罪を以て罰し難し、また汝も罪を贖はむため自殺することあひならず。」と說諭されて小侍從は死ぬことも得ならず唯ひれ伏して泣き居たり。勝家は豫て小侍從を府中の利家に遣はして生存へしめむと欲する心構へなれば言を更め、「小侍從、申附くべき用事あり、そは餘の儀にあらず、府中の利家より我方へ人質として女一人參り居れり、今は人質も何かせん、今夜の中に府中へ返さむと思へば其使者汝に申附くる、心を附けて送り來よ」と大切なる使節の命、此方は固より決死なり、顏を上げて、「御言を返すは恐れあれど

其は他人にても勤るべく存じ候ふ、私はたゞ御城の土とならむとこそ願ひ候へ。」と思入つて陳べけるに、勝家不便とは思ひながら故と聲を勵まし、「何によらず主人の命令に負くべからず、斷つて行くまじとならば可立處に勘當する。」と呵られて小侍從は返す言も無く、「唯々」と畏る、勝家は面を和らげ、「よく聞分けたり、即時府中に趣くべし」

斯くて小侍從は惜からぬ玉の緒をしばらく繫ぎ留めつゝ前田家の姫が乘輿を守護なして北の庄を立出でたり。此時北の庄を圍みたるは羽柴方に名譽の弓取、堀久太郎秀政なるが、心ありてひた攻には攻寄せず故と遠卷して勝家が自滅を待てり。小侍從靜に駕籠を擁して畷路に懸りけるに、堀が手の者夜巡回をなしたるがこれを見附け落人遣らじと押取卷く、小侍從は自若として、「これは府中なる利家どのの姫君の人質として北の庄に在したるを唯今送り返すにて候ふ。」と憚らず申しけるに、軍卒等はこれを疑ひ、「利家どのの身内ならば仔細なし、されど誰にてもあれ一應檢めたる上ならでは此處一寸も通し難し、いざ駕籠の中を見せられよ。」と小侍從が端麗なるに荒漢の心も和らぎけむ、いともの柔しく詰りける、されど深窓の花浮世の風にはあて難し、小侍從駕籠傍に立塞がり、「やむごとなき姫君にて渡らせ給へば駕籠には錠を下したり、北の庄に籠りたる郎黨勇士何とて卑怯なる振舞せむ、これは姫君に相違あらじ、穩便に通されよ。」としとやかに腰を屈む、軍卒どもいかで容易く通すべき、「斷つて見せじとあらばせむ樣あり」と殘らず打物を取

直せば、スハ狼藉と謂ふまゝに此方の伴の衆十人ばかり得物を取りて立向ふ、堀が手の者口々に「さあらむには容赦すな、斬散らして駕籠を奪へ」と哄と喚いて斬つて懸るを、少時がほどこそ支へつれ、此方は固より無勢なり討死するもありて殘るは駕籠と小侍從のみ、其時小侍從少しも騷がず並木の松を小楯に取り、駕籠傍に引添うて短刀片手に引そばめつ寄らば斬らむと身構ゆる、只見れば窈窕たる美人なれども毛受勝助家照と一所に育ちし希代の勇婦、風采四邊を拂ひける、野人固より人を知るの眼無し、女と侮り事もなげに飛懸る二三人の鎧武者忽ち左右に斬僵さる、これを見て得物を揃へ引包んで討つて懸れば小侍從は拔けつ潛りつこゝを先途と働けども單身なり素肌なり、最も危く見えたる處にいかになしけむ軍卒ども人礫をうつて投出ださる、これはと驚く多勢の中につッと立ちたる一個の英雄、「堀尾茂助吉晴が通行の邪魔するは、そも何奴ぞ」と呼はつたり。

四

堀尾茂助吉晴と名告るを聞くより、軍卒どもは太刀を控へ鎗を伏せ水打ちたる如く靜まり返る、吉晴其時呼吸つき居れる小侍從を鐵扇以て麾ねき、「其なるは何人ぞ、最早憂慮候ふな、名を聞かむ。」と問懸くれば、小侍從衝と出でて阿容たる體無く、「これは柴田殿の身内に毛受勝助家照が

妹小侍従と申すもの」といふ顔つくゝ打視め、「さては日本一の忠臣の妹御にておはすよな、敵ながらも家照殿は天晴羨ましき名を擧げられたり、さすが其妹御ほどありて先刻の御働物蔭より見物なし、おたしなみのほど感じ入る、して駕籠は誰、何方へ志され候ぞ。」とまた他事も無く見えければ、小侍従吉晴の名は知れり、羽柴方に屈指の武邊者、物の情は辨ふべし、祕しては惡かりなむと其前田家に人質を送る由を明かしけるに吉晴ハタと手を拍ちて、「好き侶伴に候ふ某も秀吉公の密旨を受け府中へ使者に參るなり路には野武士も多からむにいで伴なうて參らせむ。」と謂はれて小侍従渡に舟、此英雄と打連れて無事に人質を送りける。

吉晴が秀吉の使命といふは和を講ずるにありしなり、されば利家に謁見して「君と我が秀吉とは昔より別懇の間、申さば竹馬の友に候ふ、此度の合戰も勝家こそ秀吉の威望を嫉みて我意を振舞候ひしなり、君には故織田公の恩を重んじて公達三七殿のために勝家と合體なされしにて、敢て私の心おはさぬこと秀吉よく承知いたせり因りて惡くは存じ居らず（秀吉勝家を追うて御城下を過ぎり候はむには快く御通し候へ、此方より決して御當城に向ひて一矢をも放つまじきにて候ふ）と申上げよと秀吉申附け候」と淀無く說きけるに、利家公打案じ「秀吉どのの御厚情某多謝仕る、勝家勝戰ならむにはともかくも致さむが、今北の庄に蟄居して命も旦夕に迫るに際し秀吉どのと和睦せむにはこれ利に趣く不義なれば利家は承引き難し、もし秀吉どの何となく來られな

ば某朋友の好誼を以て城門を押開き迎へて麁茶なりとも饗應申さむ、北の庄の勝家に詰腹切らせに御通りあらば屹と路を遮りて、得こそ此處はお通し申さじ、御身皈りてしか謂はれよ、御使者大儀に候ふ。」とばかり後は他を言うて取合ひ給はず、吉晴ほどの者なれば早く利家の意を推せり、好漢義氣金鐵の如し、容易に說破るべからずと斷念して敢て强ず、「和議御承引無き段不本意には候へども御決心ならばいたし方無し、某立皈り秀吉に左樣申聞け候はむ」と吉晴は辭して歸りぬ、後にて利家公小侍従に對顏あり、客を以て遇し給ひ、渠が生命を長からしめて忠臣が靈魂を慰めむといふ勝家の情のほどを丁寧反覆して說き聞かし、辛うじて小侍従を納得させ府中の城に留め置きける。

斯くてまた利家は秀吉が和議を容れずして、素氣無く吉晴を歸したれば直ちに來り攻めむは必定なりと籠城の用意をなし給ふ、固より聞えし名將なれば時の間に準備を整へ、勝誇れる上方勢幾萬なりとも寄せて來よ、眼覺ましく最後の戰を決すべしと手ぐすね引いて待懸けつも鋭を凝し氣を籠めて城中森と靜まりたり。

準備既に成りたる後、秀吉來らば其堀尾を遣はしたる好意に對し一片の挨拶をせではかなふまじと、利家公は櫓に出でて屹と四方を見渡し給ふ。東方白めり、天漸く明けたり。萬有將に覺來らむとして未だ鳥聲をも聞かず、彌望極顧唯煙霧、時に眞黑なる武者一騎地平線の盡頭に顯れた

り、顯れしは誰ぞ、別人ならず、羽柴筑前守秀吉なり。

堀尾茂助吉晴が復命を聞きし秀吉は固より草履を掴みし手に天下を握れるほどの人傑なれば其胸中には殆ど人の思惟し能はざる一段の神の存するあり、されば利家が和を肯ぜざるを聞きて潛かに思ふよしあり、柳ケ瀬より長驅して洪水の如く越前に推寄する大軍に先立ちて單騎霧を踏み て馬を飛ばし、一呼吸に府中の城の大手の木戸まで乘着けたり、こゝにてひらりと馬より下り得 意の大音を發して高く城中に向うて呼べり。

曰、「又左、又左」

五

渠がために我死せむと、利家が死敵と思へる秀吉の單身城門を敲きて、又左々々と呼立てたる他意無き腹藏無き無邪氣なる振舞に、又左衛門利家心解けて急ぎ櫓を飛んで下り、城門左右に押開けば、秀吉少しも遲疑する色なくつか〳〵と城に入る、此時加藤虎之助後を慕うて追到れり。

利家は秀吉主從を案内して直ちに書院に通し、主客の座も未だ定らざるに秀吉は大胡坐、「又左早速ぢやが湯漬を振舞へ、ものに紛れて昨夜より何も食はねば我甚だ空腹なり。」と二三度腹を撫で給ひカラ〳〵と高笑、虎之助横を向きて吹出だせば、利家も思はずくす〳〵、「何が扨てわけも無

い事早速お振舞ひ申すべし」と手を叩きて膳部を取寄せ、いざまゐれと薦めけるに、秀吉公珍重、珍重と呟きながら餓虎が美食を得たる如く呼吸をもつかでさら〳〵と掻込み給ひ、「さて〳〵旨いことなり尚替へて賜はるべし、」と碗を差出し箸を置かむとせらるゝ時、疾風一陣襖の外より留木の薫颯と來りて、頭上に閃く金光蛇、「秀吉どのお覺悟あれ」とすつくと立つは小侍從なり。

秀吉危く身を交はせば討損じて空を突く、其手を虎之助が無手と取り、「こは變つたる御給仕かな、」と片頰に笑みつゝ取つて伏せる、利家はこれを見てスハ一大事が起つたると、心中に驚きながら勝家が懇に我に托せし婦人なれば此場合に棄置き難しと太刀に手を懸け片膝立て虎之助を屹と睨む、虎之助も睨め返し彼是ともに默念たり。

猿どの平氣に箸を置き、「又左こりや何ぢや」と其顏を瞻り給へば、利家默して答へなし、組敷かれたる小侍從聲を懸け、「利家公は御存じないこと、妾は北の庄より使者として當城に參りし者、我君勝家の怨敵秀吉こゝに見えられしは天の與へ、一太刀怨まむと近附きしに討損じて最口惜し、女なれば御容赦あつて繩目の恥を見せ給ひそ、ハヤ御太刀を汚されよ。」と覺悟極めし烈婦の魂、虎之助は其殊勝さに感じ入り、「心憎し名を名告れ」利家、「某が申すべし其なる婦人は小侍從として勝家が愛臣なりし毛受勝助家照が妹、北の庄に遣はし置し某が人質を昨夜送つて參りしが、少しく仔細ありて留置き候なり」と秀吉に向ひ申されけるに秀吉は聞きもあへず、「虎之助大事ない

其手を放て」とおほせの下、虎之助も猶豫はず靜に小侍從を引起すをまた急に押留め、「待て、待て、手を弛めな、放たば卽座に自殺せむ、しつかりと押へて居よ、イヤ小侍從とやら出來したな、秀吉を討たうとはアハヽ愉快い〳〵。」と秀吉は頻に興がる、小侍從刃は手にしながら虎之助に押へられて自殺する事も得ならずさも口惜げに涙ぐめり。秀吉は語を繼ぎ「されど御身が兄勝助家照、茶臼山に殿なし秀吉が大軍を三度まで追崩せし拔群の武勇柴田が鬼の名に恥ぢず然も自から勝家と名告り其身代に立ちたれば、これ勝家を討ちしも同然。されば家照の忠義に面じ、またこな又左どのの顏も立てて北の庄の鬼どのは我助けむと思ひ居れば、小侍從今より馳歸りて此旨匠作に申すべし、兄に劣らぬ御身にも花を持たせてやるわさ。」と四海を呑むべき大腹中、死敵を容るゝ度量あり、小侍從は首を低れたり、虎之助は聲を勵まし、「小侍從斯くとも異存があるか」小侍從漸く顏を上げ、「情に刃向ふ刃も無く死後れては死なれもせぬ、お放し遊ばせ憂慮無い」と刀を納め容を更め、「譬ひ左樣に申しても我君勝家何として命を助かり給ふべき、さればとておほせの趣傳へませぬも道ならねば先づ申上げて見ませう、」と不承々々に承引きける、さはとて利家健馬を引かせ「時後れては間に合ふまじ卽刻行けよ、」と促し給へば小侍從は身支度なし「そんなら御免遊ばせ、」と馬に跨る風流武者、北の庄指して馳せ出だす、其後を見送りて秀吉利家虎之助顏を合せて莞爾とせり。

利家俄に心着き、家臣奥村助右衞門永福に命じ、「汝小侍從の先途を見よ、もし未だ到らざるに先達ちて北の庄に火の手懸らば、アノ氣象者活きては歸らじ、さしては勝家の遺託に對して我が一分立難し。」と其後を追はしめたり、助右衞門永福汗馬に鞭を揚げて追續きけるに、果して路未だ半ばならざるに、遙に北の庄の天に中りて黑煙團々として渦き起り大空を籠めて立騰れり、あ已に遲し、小侍從は行方知れず。

六

北國の亂平らぎて後利家は加賀二郡能美石川並びに能登の國の主となりて、文祿元年名を金澤と更めしが、其頃は未だ尾山と謂へりし尾山の城に入給ひつ、天正十一年夏五月加越能第一の要害たる能州末森に城を築き、家の名臣奥村助右衞門永福をして固くこれを守らしめたり。

時に越中富山の城には北越名代の大健兒佐々内藏助成政あり、渴虎餓鮫の慾を逞しくして常に天機を窺ふ處に今や尾張の秀信公、日に增す秀吉の威望を嫉み、德川家康を語らひて遠三尾の兵を催し一度風ぎたる海面に忽然として波濤を起し長久手小牧の合戰最中、勝敗未だ分ち難し。内藏助成政時來れりと勇み立ち先づ越中の間道とて音に名高きサラ〳〵越より潛に美濃に忍び出で、秀信に申すやう「我北國より切つて出で公の御味方申さむには時の間に秀吉を討滅ぼし、本意を

遂げ給はむは必定なり、然らむには加越能三ケ國は我成政に賜はるべし。」と、またこれを家康の耳に囁きて、確と約束取極め、再びサラ〳〵越より越中に引返せり、成政が路を問道に取りて太く此擧を祕したるは蓋し利家に憚ればなりき。

斯くて成政歸國して、直ちに兵を發ださむとは思へども、敵に取りては面倒なる利家加賀にて押へたり、先づこれを討たざれば境に出づることを得じと、故と加州に使者を遣はし、成政已に四十を越えて未だ一人も嗣子あらず、幸ひ女二人あり、一人は秀吉に質としたるが、姉なる女の家にあれば、御子息一人賜はれかし、養うて家を繼がしめ長く兄弟の國とならむと慇懃にいはしめけるに、利家公元來佐々とは古朋輩たり、且つは隣國の好誼もあれば快くこれを諾し、二男又若利政をば遣はすことに定まりけり。

いよ〳〵婚儀熟せる上は、一日も早く合巹の式を擧ぐべしと利家より催促あるに、固より成政野心ありて其虚を討たむず緣談なれば、此月八月は祝儀の月にあらず、婚禮は九月に延ばし賜はるべしと何氣なく虚構へ置き、其油斷あるを見澄まして、スハ打立てといふまゝに、豫て準備は整へたり、錬鍛へたる甲兵二萬、手足の如く繰出だして、天正十二の秋九月八日、不意に末森を襲はむと間道よりして兵を進む、山路に懸りて日は暮れたり。山また山を分け入る頃、既に三更になりけらし、群岳重疊雲近く、行路は蜀道覆車の險、さるからに越中勢地の理に暗き其上に故

と松火の數を減じたり、如法暗夜のことなれば、木の根岩角に遮られ、沼、林に蹈迷ひて、馬の足並しどろなり、斯くては夜の中に末森に達せむこと覺束無し。何者にまれ獵取りて案内させでは叶ふまじと、成政士卒に命を傳へて、急に山間を漁らしむ。

然るに斯る深山なれば容易く人家は見當らず、士卒等百方に驅巡りて纔に一宇の茅屋を得たり、人やあると呼ばはりながら、土足のまゝ踏込めば、暗香一脈燈影暗し、經机に肱を凭たせて美人一人居睡りたり、神か、仙か、はた妖か、コハ訝しと士卒どもギヨッと一足逡巡して暫時顏を見合せたるが、可何にてもあれ率て歸かば手を空しうして皈るには增るべしと、起きよ〳〵と呼ぶ聲に前刻より心は着きながら故と睡眠を裝ひたる怪しき婦人は眼を開けり、士卒どもはものをも謂はせず、此方へ來ませと左右より無體に手を取り引立てて本陣に馳皈り斯くと成政に傳へける、成政すなはち手綱を控へ、馬上に松火差翳し路傍に支膝せる彼の美人を屹と見て、「山路の案内心得居るか、」と氣早の豪傑、鷲の尾に請狀は無し花の友、名も素性も聞かばこそ直に意のある處を謂ふ、問はれて端麗なる顏を上げ、「はい存じ居り候、」と答へけるに成政欣然として、「可、然らば少しにても近路より末森にまで案内せよ、命に背かば斬殺せむ。」と手にせる松火を美人に與へて二萬騎の眞先に立たしめたり。美人は唯々として命を奉じ、松火を振照して先導せるが、もし逃走る事もやあらむと士卒二人が鎗の穗先を婦人の兩腋に突附けてスハと謂はば突伏せむず威

を示してぞ押して行く、總勢二萬、松火三點、一は本陣にあり、他は後陣にあり、前鋒の松火は美人の手にあり、斯くて漸次進行くに、軍卒が不圖心着きしは幾度も同所を歩行む樣にていはばくるりと引返しては舊來し道を再びするかの感あること是なり、這奴油斷ならずと美人を責めて此由を詰りけるに美人は吻々と打笑ひ、「方樣達は知らでやおはす、此邊の山路は皆同一樣な所ばかり、さればこそ前刻には蹈迷ひ給ひしなれ。」と淀み無く説明かすにぞ、いかさま或はさもあらむ、殊に婦人なればと心を許して、なほ二三里も導かれつ、右せむか、左せむか、道兩岐の道に至れる時、忽爾エイと聲を懸けて、婦人は松火を投消したり、南無三寶と突出す鎗に空を突かせて身を沈め、巖の後に入るよと見えしが搔消す如くに失せたりける。

七

佐々内藏助成政が大軍を寶達山中に弄びて松火に影を隱せし怪しの美人は、翌九日の朝霧に朦朧たる姿を以て末森城の門外に顯れたり、這の般の婦人他になし、是や海内有數の人、毛受勝助家照が妹小侍從のこゝに再び出現せるなり。

渠さきに秀吉が勝家を助命せむとする其飛報を齎らして、府中の城より健馬に鞭ち、北の庄に趣く途次にて遥かに落城の烟を望み萬事休せりと絶望し、既に死せむと思ひしが、豫て利家に諭

されて能く勝家の意を知れば自から死せざるはさすがにて、纔に生を保ちながら身は無きものと棄果てて、雲に乘り風に駕し何處とも無く遍歷して能登の山中に分入りつ、彼處に幽寂の地を卜してこゝに仙たらむと欲せしなり。

然るに成政が爲に獵出されて末森襲擊の先導を强ひられけるに、小侍從利家が往日の恩を忘れず、もし此の大軍押寄せて備無きを攻めむには、城將いかに勇なりとも一支へも支へ得じ、末森落ちむか響に應じて、尾山の城もまた落つべし、然する時は利家公亡國の君となり給はむ、いかにもして成政が未だ迫らざるに先達ちて末森に注進し籠城の用意を整へしめむと、地の理に因りて路を替へ、同一所を幾度も巡りつ出でつ越中勢を山の深みに迷はせ置き、よきほどに身を隱して疾走こゝに至りしなり。

最も國家の大事なれば城將奥村永福に親しく申すべき事の候ふと、小侍從は己が名を以ていひ入れける、軍卒斯くと通ずれば、永福物蔭より物色するに豫て利家公切に小侍從をもとめ給ひて、其人相書は出だしあり、其に照して相違なく殊にまた永福は府中の城にて一度見たりし事もあり、其は疑ふべきものならずと出でて小侍從に面會せり。

小侍從は言忙しく昨夜の次第を物語り、「渠等山中に迷ひ居れば此處に寄するまでに今一時間は猶豫あらむ、早く籠城の御用意あつて尾山におはす利家公に後詰を御賴みあるべし。」と少しも

脫心らぬ勇女の進退、永福且つ感じ且つ驚き、「微妙もせられし小侍從どの、油斷とにはあらねども、既に渠成政とは御曹司利政君御緣組もありと聞けば斯らむとは夢にも知らず昨夜も安眠いたしたり、もし不意を襲はれなば某今朝迄活きてはあらじを、よくぞたばかり下されし見事籠城なし遂げむは皆これ御身の賜物なり。」と太く勞らひ、夫人加藤氏を呼びて小侍從に紹介せ、言短かに始終を說き、「麁略ならずもてなすべし、これ君侯の客人なり、追着け合戰始まらば諸共に內を守るべし。」とものゝ馴れたる老功の名士危急に際して慌てず騷がず、小侍從が注進の趣は相違あらじと信じながら未だ敵の旗印も見えざる前に、一城の主が輕々しく尾山に報ずるは心なきに似たりと其事は先づ差措きて直ちに籠城の用意をなす、城中の將士千五百、永福よりて手分けすらく、先づ當城の副將たる千秋主殿助は東城を守れよ、內城の固には永福自からこれに任ぜむ、さて外城は……といふほどこそあれ、間近に聞ゆる人馬の音、なにさま馬には枚を銜ませ大軍地をすつて來たると覺しく遠雷の如き響して地盤どう〳〵と鳴渡れり。

永福スックと立揚り、「しなしたり、存外早く寄せたるぞ、城の手配間に合ひ難し、アハレ誰にてもあれ城を出でて一支へして暇取らせよ。」と左右を屹と見廻すに、今城を出でて戰はむ者は到底活くべき數にあらねば死を惜むとにはあらねども思はず眼と眼を見合していづれも疾に答へなし、小侍從はたゞ機を得て死なむことを願へるなれば此時衝と出でて聲を勵まし、「利き打物を貸

し給へ妾が向ひ候はん」と凜乎として言出でける、永福の夫人水の如き瞳に微笑を湛へ、「イエ御客を煩はして何とせむ。いで妾が、」と英氣を含んで雪の顏紅を潮せり、これがために勵まされて城中の勇士土肥茂次、「どつこい、こゝに男あり。」と愼然として躍立ち「要らぬ命を持つものあらばソレ續けや、」と呼ばはりつ十文字の鎗引提げて一文字に飛出だせば其隊の從卒三十人後れはせじと續いたり。

佐々內藏助が軍勢は、ハヤひた〳〵と押寄せて哄と揚げたる吶喊の聲、坪井山の山を崩し、鯨波の波を飜して凄まじなんどいふべからず、土肥茂次鞍壺に突立ちて、屹と見渡し大音揚げ、「來たは越中の親仁どのか、スハ御迎に參るぞ。」と雲霞の如き敵の中へ、眞黑になつて飛込みしが、赤に染みて躍り出で、一人も殘らず討死す、此間に城中は備を固めてヒツソとせり。

八

佐々內藏助成政は一婦人のために籠絡されて夜攻の計略喰違ひしを憤り、怒氣心頭に發して手負猪の牙を鳴らし無二無三に寄來る、勢猛烈にして殆んど當るべからず、名にし負ふ成政が數年鋭氣を養へる石甲鐵鎧の精兵なれば、深山を出でし虎の如く獅子奮迅の氣競を發し、櫓も塀も揉潰せ木戸石垣を打毀せと英々聲を出して懸りければ、東城も外城もまたゝく間に乘取られて、

皆内城に逃籠り必死となりて保つのみ、こゝを固むる奥村こそ油斷ならざる勇將なれ、さはとて何ほどの事やあると揉みに揉んで攻立つるを、永福じつと持堪へて手痛く防ぎ戰ひける。

永福の室加藤氏は音に聞えし賢夫人美にして勇なり、女童を指揮なし自から襷懸けになりて兵糧を拵へたるが、同くともに手傳へる小侍從の効々しきを見て喜び感じ、「モシ小侍從どの始めての御入に饗應もいたされず、折も折とて此の合戰、御不興さこそと察しまする。」と此の中で落着いたものなり。小侍從は笑を含み、「餘りことの急なれば染々御挨拶も申上げず、お初の見參に斯く申すもいかゞなれど、貴女は天晴な御魂、斯る事には幾度も御出合ひあつたと思はれまする。」と北の庄の小谷の方に夫人の膽勇を思ひ較べて、小侍從は今昔の感あるべし。奥村夫人も豫て小侍從のことを知れり。「イエ貴女こそ、府中のお城で秀吉公に討懸け給ひしことあるよし人傳に聞きました、妾如きが何として、御言に恥ぢ入ります。尤も斯る合戰に逢ひますのは今がはじめて、然し夫助右衞門豫々教へて申すには、何か變事の起らむ時、座にある婦人が取亂しては、親なり或は夫なり總じて男の足手纏ひになりて、これほど邪魔になるものはなし。故に婦人は平生の心懸肝心にて、如何なる場合にても事あるに逢ふ時は、あら嬉しこれは冥加な目に逢ふ事ぞと、却つて變を喜ぶやうに常々心懸けて置くが可と始終申し聞けますゆゑ、此度の大變もあら難有い冥加ないと、斯やうに思うて居りまする」といひ〳〵握飯を拵へる。小侍從は思はず感じ入り、「さ

ればこそ、内室が其御心なら先づ此お城は大丈夫」さもあらばあれ、寄手の大將佐々内藏助成政は地獄よりも恐ろしと名に聲きたる猛將なるに、憤餘怒號夜叉より猛く、「やあ言効なし者ども、成政が手を下すに閻魔王が籠りたる地獄の鐵門何かあらむ、かばかりの廢城押潰せば倒るゝことよ。」と自から馬を乘出だせば、スハヤ押に押潰せと幕下に名垂たる猛卒勇士、鎧の袖を搖弩し鍬を傾け楯を仗き、射ても突いても物ともせず、味方の死體を乘越え蹈越え肉薄して攻むることいと急なり。

城中これに色めき立てば奥村永福齒切をなし、「最早尾山の利家公後詰に來り給ふべきぞ、それまで支へ得ずもあらば死體を君に見せ奉れ、城を枕に討死せよ退くな〳〵。」と勵ませども、入替る勢は無し、呼吸も吐かれぬ難戰に將卒疲れて綿の如く過半は倒れて呻吟きけり。

それと見て驅出でたる三十餘の紅裙一隊、奥村夫人が薫陶にて男氣象の腰元ども、振袖を結びて肩に懸け、紅の裳を飜へして矢玉の間を驅廻り、餓ゑたる者には食を與へ、渴ける者には水を與へ、手負は肩に懸けて引退き、矢を射盡せば替を出し、弦切るれば張替へて助けをなすこと大方ならず、夫人と小侍從は左右に分れて、彼處に倒れし者あれば後抱に抱き起し、「これ〳〵抱かれて寢たい女があるぞえ、城が落ちては詮が無いもう一呼吸なう、しつかり。」と小侍從玉の腕を以て其首筋にからみつけば、死者蘇生りて勇を振ふ。此方に働く者あれば、夫人背を打叩き、「テ

モ天晴な働振、若殿原嬉しいぞ。」と優しき聲にて賞め立つれば死榮ありと奮戰す。

花柳の腰元等またこれを見習ひて八方に馳廻り、直に尾山の後詰が來る、もうそれまでござんする、働き給へ、骨折り給へ、女房どもが可愛うないか、城さへ無事に支へたらソレまたこんな好き事あり。」と武者髭に前髪擦附け士卒に抱附き、引抱へ莞爾と笑ふ妖艶さに、今生死の境にも色には脆き人心、血眼に笑を湛へて生死のほども顧みず、氣を取直して防戰せり。されば累卵の如き危き城の、アハヤ〳〵と見えながら、其都度旗色取直して三四度敵を追崩しぬ。成政呆れて眼をみはり、「不思議々々〳〵、成政斯くまでに力を盡して未だ拔き得ざるは怪むべし。察するに籠中の鳥遁るゝ路のあらざれば、死を以て防ぐならむ、可、一方の圍の解きて如かず英氣を挫かむには。」と、故と搦手の圍を解きて再び手痛く攻立てたるも、内に賢夫人の守るあれば、落つべき路はありながら、士卒は固より一婦人一小童の城を出づるはあらざりし。

然るに夜に入りて山頭素月を吐く時、搦手より城を出づる一人の美人あり。これ蓋し小侍從なり。

これより前、急を尾山に報ずる使者相望んで走りしに、最後の一人は途中より引返して、「敵軍川尻に援道を斷ちて尾山の通路を遮りたれば、我等使者といへども通行いたし難し、斯くては先達ちて參りし者もいかで尾山に達すべき。」と、蒼くなりて注進せり。城中モハヤ力なし。唯尾山

より利家公の後詰を待つが力にて、足を跂だて首を伸ばしつゝあるものを、情を訴ふることさへなし能はずんば、そもまたこれをいかんせむ。こゝに於て小侍從自から注進の任に當り、川尻の敵を横切りて尾山に至らむとするなりけり。小侍從は疾驅せり。馳せて川尻に來りし時、路傍の樹の枝に敵が我が急使の首を斬りて連ね梟けたるを見たり。四顧寂然天色赤し、蓋し前途なる敵陣の篝の空に映ずるなり。小侍從は屹と見て、帶を搖上げ細帶を引緊め、「八幡、我もし捕へられて尾山に到ることを得ざらむか、末森の城兵亦一人も活きざるべし。」

九

能登の川尻川は北國屈指の大河なり奔流恰も矢の如く水冷たうして底清し、舟を漕ぐに難きを以て岸より岸に藤蔓を懸渡して縋り〳〵人を渡す昔加越の一筋路に、藤蔓の渡といひしもの卽ちこれなり。

渡は夜に入りて唯激流の轟く音のみ、時に小く輕き足音立てて此方に疾走する者あり、跫然として續き起る數十人の足音、逃ぐるを追ふと覺しく川瀨に響く聲々に、「逃がすな」「やるな」

輕き足音は眞先に燦然たる白銀の光を浴びて月下に影を露せり、只見れば柳腰花顏の人、黑髮颯と振被りて衣破れ袖裂けたり、帶は解落ちて已に無し、下〻ばかりの態亂れて紅蹴出す脛白

く、手に血刀を提げたるが飛ぶが如くに河畔に來りて前途を望み、流に俯し、吻と呼吸つく間もあらばこそハヤ追迫る追騎一隊、鎗の穂先は達くべし。

美人は少しも猶豫はず後様にひらりと飛び、彼の藤蔓に身を縋して踵を宙に手繰返へ〳〵、瞬時に中流に釣られ行けり。

追ひたる者ども足を跂て拳を上げアレ射て取れと呼ばはり叫びて亂箭美人を射立てけるに、コハ叶はじと屹と思案し咄嗟に刀を振上げて、命の綱を丁と打てば、藤蔓はふツつと切れて其身は水中に沒せしが緊乎と藤蔓に縋りたれば其長さあるまで下流に流れて難なく横なぐりに向岸に達しける、我活きたりと這上りて悠々と衣を絞り髪を握りて水を切り、身震ひして突立ちつ、對岸なる追兵が狂呼絶叫の聲を聞きて冷かなる微笑を漏し柳暗の裡に沒し去れり。

これは小侍從なり。名にしおふ成政が二萬騎の鋭をすぐりて、一息に突懸けたることなれば、永福城を死守すといへども、なでふ久しきを支ふべき、あはや落つべく見ゆること幾度といふことを知らねど、敵は二十重に城を圍みて、尾山の連絡を斷ちたれば利家に急を報じて後詰の催促をなすことあたはず、既に今朝より幾人か、走卒、城を出でしかども、最後の一人が遁れ歸りて、かれら、皆敵のために捕へられ、其首をば梟けられたりと、喘ぎ〳〵告ぐるに因りて、効なかりしをはじめて知りつ、今はかうと見えしかば、いでさらばとて、小侍從が自から城を忍び出で、

とかうしてこゝに來りしなり。

斯くして小侍從が尾山の城に達し利家公に謁見せしは、翌日十日の午後なりき、末森より尾山に至る行程凡そ十六里、蓋し婦人の足にしては健中の健なる者なり。

然るに風の音信はなほ早く成政出軍の巷説道路に喧びすしく二三の國老の耳にも聞えたれども、未だ確信を得ざれば君聽を驚かさず、利家は知らでおはしぬ。小侍從が末森の急を報ずるに及びて、其言未だ半ばならざるに利家公眼を睜りて末森の方を屹と望み、「ナニ佐々か、……奥村危し。」と呟き給ひつ、衝と身を起し鎧を取つて投懸け給ふ其疾さ神の如し、御傍に居たる近習の武士餘りの急に氣を奪はれ啞然として自失せり。

小侍從は高らかに、「人やおはす、君の御出馬候ぞ、馬引き給へ」と緣端に立ちて呼ばはりたり、君夫人奥より走り出で給ひ、利家公の鎧の袖に縋附き、「コハ我良人ものに狂はせ給ふか、御勢を揃へられて後打立ち給ふとも遲からじ」と動悸に聲を震はし給へば、利家公ハタと振切り、「女が何を知る者ぞ女々しい奴め、」と一喝し、今廣庭に引寄せたる馬にひらりと乘り給へばアレヨ〳〵と呆れ果つる近習の武士を、鞭を擧げて麾き、「我末森に趣くよし早く松任へ告げ知らせよ、兒はよく親の心を知る、孫四郎利長、汝等を率ゆべし其時來よ。」と利家公駿足に一鞭して風の如くに驅出し給へり。

斯くて城下の盡頭なる大樋に至り給ふまでも未だ追續く者あらず、小侍從一人引添ひたるが、昨夜來長途を馳せたる疲勞の出でて歩行み惱むこと一方ならず、ともすれば躓き僵れて呼吸づかひも苦しげなるに利家公憐を催し、休めで馬を馳せながら「小侍從々々、城に皈りて休息いたせ戰勝ちて皈りし後、言ふこと聞くこと多くあり、故勝家の遺言なるぞ、何處へも行くな、身を厭へ」と呼ばはり〳〵打ち給ふ。

小侍從は君を迎ひに來りしものの後れて末森に皈らむは言効なしと心は逸れど、所詮歩行に堪へざればおほせを畏み、「さらば先達ちて打たせ給へ、後より追着き參らせむ」

十

尾山より末森に至るの途次、四里を行きて津幡に城あり、當時の城將は前田秀繼、これ利家の同母弟なり、末森の急既にこゝには聞えつれども秀繼は到底其救ふべからざるを知れば固きを取りて後詰をなさず、唯尾山の動靜を窺ひけるに十日黄昏城門の外に一騎あり、城に向うて大音に呼ぶらく、「出でよ秀繼、我今末森に趣き助く」と揚言一番馬を進めて早くも東に去らむとす、これ蓋し利家の小侍從に別れてより唯一騎駒を驅りて此處を過れるなり。

城將秀繼一驚を喫し、自ら城外に馳せ出でて阿兄が馬の轡を取つて、「何事に候ぞ末森の孤城

とても救ふべきにあらず、今輕々しく後詰をせむは毛を吹いて疵を求むるものなり、如かず當城に御入りありて、こゝに成政を待たむにはこれ全勝の策に候ふ。」と聲に力を籠めて押留む、利家公言忙しく、「ナニ全勝の策ぞとな、全勝の策は悠長閑散なる戰に用ふるもののみ、今こと急、無理に勝たむと思ふなり」と大氣焔を吐き給ふ。秀繼はいよ〳〵制し、「こは血氣の勇と申すもの、秀繼が兄上には餘り御分別が無さ過ぎ候ふ」利家、「可、利あらずとも敢て關せず、唯我がために死せむとする奥村永福見殺しになるべきか、御身等不可と思はば來らざれ利家一騎助けに行く。」と斷乎として動き給はず、士を愛し給ふ心に感じて秀繼返す言も無し、されども太く危ぶめば尙も馬前に立塞がる。

斯る處へ其頃神人と稱へられたる卜筮の名人淡島默齋、何心無く來懸りしがはしなく貴人に面を合はせて慌しく避けむとせり、秀繼屹と視て、「默齋かこゝに來よ」と召近附け、利家に申しけるは、「こは某が存じたる卜筮の名人にて未來を相ること掌の如き奇代の上手に候ふなり、後詰の吉凶占なはせて御覽ぜよ。」と其凶と謂はむを期して只管に勸めける、利家公、斯ることは好まざれど素氣なく卻けむは秀繼に對して心なしと思ひ給ひ、彼の默齋を顧みて乳虎一聲、「什麼後詰の吉凶は」易者、「さん候ふ」と打咳き懷なる筮竹を探り陰陽の書を取出だすを見て、利家ハッタと睨め附け、「我必ず親から進んで佐々を討たむ、汝易を知らば愼んで覩て誤るなかれ」ともし告ぐ

るに凶を以てせむか、軍氣沮喪せむことを慮り動くまじき決心をソレとはなしに示し給ふ、淡島默齋其意を得て筮竹を棄て書を納め、「天吉、地吉、日月あはせて吉、卽時御馬を進め給はば御勝利疑候はず」と實しやかに申しければ利家カラ〳〵と打笑ひ、「汝實に好く未來を知れり、いかに秀繼斯らむには憂慮あらじ續け〳〵。」と一聲、二聲、三聲めはハヤ聞えずなりて既に一町驅給へり、この頃ほひ尾山にては城中或は家中の諸士、彼と此と出合ひては、イヤ時に何某どの、君には末森に向ひ給ひしよし、エナニ最早御出馬か、コハ後れたり、ソレ續けと、斯る狀にて郎黨勇士、途中にありては家にも皈らず上下のまゝにて驅出すあり、晩餐を喫する者の箸を棄てて飛出すあり、知己の火事見舞に馳するが如くまつしぐらに打立ちたれば備も何もいるものかは、思ひ〳〵に押出す者往還畧に引きも切らで絡繹として織るが如し。

某等の軍勢津幡なる秀繼が兵を出だすに會し其處にて勢を整へつ三千五百と聞えたり。

此時既に利家公は高松在まで達し給ふ、其時三更、未だ追到る者あらず、御馬廻十人餘前後を守護するばかりなり。されど利家後をも見で只管前途を急がせ給ふ、背後より婦人の聲、「喃々其へ打たせ給ふは利家公と見奉る、小侍從唯今追附き候ふ、しばし〳〵、」と呼び懸けたり、小侍從は早駕籠にて尾山より宙を飛び、漸くこゝに到りしなり、渠は今駕籠の垂を上げ半身を外に顯せり。

利家馬の手綱を控へゝ「おゝ來りしか小侍從疲勞はいかに」と顧み給へば駕籠より出でて御傍に馳せ寄り、「最早御憂慮遊ばすな」といひつゝ轡頭をしつかと取つて、「いざ末森へ御案内」と英氣の滿てる容顏は玉に一段の光を帶びて夜目にも著き美しさ、綠の前髪ばらりと溢れて後顱卷凛々しく緊め雪の腕も露はなる襷懸けにて小褄を端折り、柳の腰には堪へじと見ゆる重き刀を插落して長刀小脇に搔込めり。

利家思はず其手を取り、「小侍從御身が此度の功勞はそも我いかにして報いんか」小侍從は聲に應じて、「君妾を妾とせよ」利家聞きもあへず馬を颯と驅出しながら、半身を捻ぢて振向き給へば、ハヤ眼の及ぶ處まで味方の軍勢近附きて、旗旒々空に靡き、松火滿天の星の如し、山野ために炫然たり。じつと視めて利家莞爾として曰「可」更に左右を顧みて、「祕せよ、然らざれば人は我を以て色を愛づるとせむ」

此祕妾後一子を設く、利家潛かに國老に託し子としてこれを養はしむ、三代の英主前田家隨一の明君、微妙院殿利常是なりと云ふ。

十一

自筆にて申入候近年内藏助(成政)度々國境へ人數を出だし殊に末森の城過半攻落す處に貴殿

父子早速後詰有之により大利得られ其後越中蓮沼へ兵を入れ燒働きして敵を討取り大手柄の由上方へも聞え候て心地よく覺え候成政は表裏の者にて似合はざる事多く候此度きつと征伐遂げむと存候へども御本城どの(織田信雄)頼みいろ〳〵にわび其上入道になり申す上は其身も今ぞ合點仕るやと助け新川一郡與へ候殘り三郡は貴殿へ參らせん、さりながら度々骨折り鎗先にて取り申され候へば聊か滿足にて思召すまじく此方よりも褒美とも存ぜず候、常々の御禮には我等家名ともに參らせ候あひだ向後は前田又左衛門をかへ羽柴筑前守と御名乘り可有之候最も孫四郎(利長)儀も羽柴と申さるべく候其方へも劣りなく度々手柄共承及び候然れば越中三郡(射水、婦負、礪波)當所に折紙調へ候へども若所望候はばいか樣にも其方望次第に候(中略)奥村父子事は度々申す如く末森にて大手柄我等滿足也いづれもへ御心得候て禮を申參候、尙淺野彌兵衛口上に可申述候恐惶謹言

天正十二年九月二十一日

羽柴筑前守殿

秀吉(判)

讀過一遍豐公の風采躍如たるを見む利家の勳功亦惟ふべし、豐公未だ成政を斃さざるに先だちて早く已に越中を利家に與へしは疑ふべからざる事實なり、傳へて謂ふ末森の急なるや、城中の士上原清兵衛なる者坐して利家の援軍を待つに堪へず、身を大樹の梢に攀ぢて終夜後詰を望む。

十一日味爽金風煙霧を拂へば、利家の牙旗の翻翻たるを見る、清兵衛喜極つて絶せむとし、仰向に地上に落ち骨盤を折きて起つこと能はず、處嫌はず轉げ廻りて、「公來り援ふ公來り援ふ」と狂喜の聲を揚げしとかや、また以て末森籠城の一般を察すべし。

豐公前記の書を賜ひてより利家は羽柴を氏とし筑前守利家と呼べり、豐公の愛顧他に異にして利家が荷ふ處薄しとせず。

さればにや慶長四年閏三月三日の夜、利家病重うしてまた起たざらむとせる時、君夫人芳春院枕頭に近づき泣く〳〵も、「君武勇絶倫におはしぬれば御手づから鎗を取り或は手の者に戰はせて夥多の人を殺し給ひつ罪業のほども恐しきに、日頃は忌はしとのたまひつれ、今は何をか厭はせ給ふべき、豫て自が御爲めに仕立て置きたる經帷子を召させ給ふべし。」と申されける、これを聞きて利家は憤然として、「あら女々し、我亂世に生れて此處彼處の戰場に敵を殺すこと數知れずといへども、故なきに人を苦しめず、そも何の罪あつて地獄に落ちむ、よしまた閻王利家を見損ひて鬼に呵責をさせむずならば、先達つて世を去りたる當家の勇士あまたあり、渠等を前後に從へて鬼どもを攻なびけ武勇を冥途に振ふべし、益も無き譫言な申しそ。」と一呵の下に退け給ひつ、病勢ます〳〵加はりて、いまは斯うと見えし時、金星の如き眼を赫と見開き、「利家死後に懸念無し但今生に遺憾あり、故太閤の遺子秀頼幼くおはして我を加賀祖父とのたまひつゝ懷き慕ひ給

へるが眼の前に見えていたはしさ限なし、それさへあるに故太閤我に秀頼を託せしものを、せめて今五年命あらば秀頼が天下となして快く眠るべきに不起の大病、あら口惜し、今むざ〳〵と煩死して何の顔あつて故太閤を見む、我は死なず、疊の上にて我は死なず。」と拳を握り齒切をし給ふ、時に小侍從病床に侍せり、渠よく利家の心を知り、側に置きたる新藤五國光の脇差を取りて君の御手にまゐらせつ、「囘生の良藥いざ召しませ」と申しけるに、利家頷きながら莞爾と笑み「もはやものも得いはせ給はず」鞘ながら胸を突くこと三度にして、眼を睜りしまゝ遠く逝けり。

徳川家康後このことを傳へ聞き身の毛を悚立てて戰きけるとぞ、されば加藩の累代が世々徳川氏に憚られし其引こゝに存せるならむか。

最後に鋭刀を參らせて、利家の先途を見屆けたるにて、祕妾小侍從が傳完し、餘生は無事悠々の間にありてまたいふべきことなければなり。

記し終りて筆を置き柴田羽柴佐々徳川前田等諸公の靈に向ひて不文漫に其英名を傷けたるを謝す、朝露夕電世は果敢なし、公等がなせし多少のこと、こゝに殘篇の閑話となりぬ、英雄豪傑何かあらむ、時としては漁樵が談話の柄のみ。

夜行巡査

一

「こう爺様、お前何處だ。」と職人體の壯佼は、其傍なる車夫の老人に向ひて問懸けたり。車夫の老人は年紀既に五十を越えて、六十にも間はあらじと思はる。餓ゑてや弱々しき聲の然も寒さにをのゝきつゝ、

「何卒眞平御免なすつて、向後屹と氣を着けまする。へい〳〵。」

と、どぎまぎして慌て居れり。

「爺様慌てなさんな。こう己や巡査ぢやねえぜ。え、おい、可哀相に餘程面食つたと見える、全體お前、氣が小さ過ぎらあ。なんの縛らうとは謂やしめえし、彼様に怯氣々々しねえでものことさ。俺片一方で聞いててせえ少癇癪に障つて堪へられなかつたよ。え、爺様、聞きやお前の扮裝が惡いとつて咎めた様だつけが、それにしちやあ咎め様が激しいや、他にお前何ぞ仕損ひでもしなすつたのか、えゝ、爺様。」

問はれて老車夫は吐息をつき、

「へい、誠に吃驚いたしました。巡査様に咎められましたのは、親父今が最初で、はい、もう何うなりますることとやらと、人心地もござりませなんだ。いやもうから意氣地がござりません代にや、決して後暗いことはいたしません。唯今とても別に不調法のあつた譯ではござりませんが、股引が破れまして、膝から下が露出でござりますので、見苦しいと、こんなにおつしやります、へい、御規則も心得ないではござりませんが、つい屆きませんもんで、へい、唐突にこら！ツて喚かれましたのに驚きまして、未に胸がどき〳〵いたしまする。」

壯佼は頻に頷けり。

「むゝ、左様だらう。氣の小さい維新前の者は得て巡的を恐がる奴よ。何だ、高がこれ股引が無えからとつて、仰山に咎立をするにやあ當らねえ。主の抱車ぢやあるめえし、ふむ、餘計なおせつかいよ、喃爺様、向うから謂はねえたつて、此寒いのに股引は此方で穿きてえや、其處が各々の内證で穿けねえから、穿けねえのだ。何も穿かねえといふんぢやねえ。然もお提灯より見ッこのねえ闇夜だらうぢやねえか、風俗も糸瓜もあるもんか。汝が商賣で寒い思ひをするからたつて、何も人民にあたるにやあ及ばねえ。ん！寒鴉め。彼様奴も滅多にやねえよ、往來の少ない處なら、晝だつてひよぐる位は大目に見てくれらあ、業腹な。我あ別に人の褌襠で相撲を取るにもあたらねえが、これが若いものでもあることか、可哀相によぼ〳〵の爺様だ。こう、腹あ立てめえよ、

眞個さ、此狀で腕車を曳くなあ、よく〳〵のことだと思ひねえ。チヨツ、べら棒め。洋刀がなけりや袋叩にして遣らうものを、威張るのも可い加減にして置けえ。へむ、お堀端あ此方人等のお成筋だぞ、罷間違やあ胴上げして鴨のあしらひにしてやらあ。」

口を極めて既に立去りたる巡査を詈り、滿腔の熱氣を吐きつゝ、思はず腕を擦りしが、四谷組合と記したる煤け提灯の蠟燭を今繼足して、力無げに梶棒を取上ぐる老車夫の風采を見て、壯佼は打悄るゝまでに哀を催し、「而して爺樣稼人はお前ばかりか、孫子はねえのかい。」

優しく謂はれて、老車夫は涙ぐみぬ。

「へい、難有う存じます、いやも幸と孝行な悴が一人居りまして、能う稼いでくれまして、お前樣、此樣な晩にや行火を抱いて寢て居られる勿體ない身分でござりましたが、悴はな、お前樣、此秋兵隊に取られましたので、後には嫁と孫が二人皆な快う世話をしてくれますが、何分活計が立兼ねますので、蛙の子は蛙になる、親仁も舊は此家業をいたして居りましたから、年紀は取つても些少は呼吸がわかりますので、悴の腕車を斯うやつて曳きますが、何が、達者で、綺麗で、安いといふの三拍子も揃つたのが競爭をいたしますのに、私の樣な腕車には、それこそお茶人か、餘程後生の善いお客でなければ、とても乘つてはくれませんで、稼ぐに追着く貧乏なしとはいひまするが、何うしていくら稼いでも其日を越すことが出來惡うござりますから、自然裝なんぞも

構ふことは出來ませんので、つい、巡査樣に、はい、お手數を懸けるやうにもなりまする。」

最長々しき繰言をまだるしとも思はで聞きたる壯佼は一方ならず心を動かし、

「爺樣、否たあ謂はれねえ、むゝ、道理だ。聞きや一人息子が兵隊になつてるといふぢやねえか、大方戰爭にも出るんだらう、そんなことなら默つて居ないで、どし〳〵言籠めて隙あ潰さした埋合せに、酒代でもふんだくつてやれば可いに。」

「えゝ、滅相な、しかし申譯のためばかりに、其事も申しましたなれど、一向お肯入がござりませんので。」

壯佼はます〳〵憤り一入憐みて、

「何といふ木念人だらう、因業な寒鴉め。トいつた處で仕方もないかい。時に爺樣、手間は取らさねえから其處等まで一處に歩びねえ。股火鉢で五合とやらかさう。ナニ遠慮しなさんな、些相談もあるんだからよ。はて、可いわな。お前稼業にも似合はねえ。馬鹿め、こんな爺樣を摑めえて、劍突も凄まじいや、何だと思つて居やがんでえ、こう指一本でも指して見ろ、今ぢや己が後見だ。」

憤慨と、輕侮と、怨恨とを滿たしたる、視線の赴く處、麹町一番町英國公使館の土塀のあたりを、柳の木立に隱見して、角燈あり、南をさして行く。其光は暗夜に怪獸の眼の如し。

二

公使館の邊を行く其怪獸は八田義延といふ巡査なり。渠は明治二十七年十二月十日の午後零時を以て某町の交番を發し、一時間交替の巡回の途に就けるなりき。

其歩行や、此巡査には一定の法則ありて存するが如く、晩からず、早からず、着々歩を進めて路を行くに、身體は屹として立ちて左右に寸毫も傾かず、決然自若たる態度には一種犯すべからざる威嚴を備へつ。

制帽の庇の下に物凄く潛める眼光は、機敏と、鋭利と嚴酷とを混じたる、異樣の光に輝けり。渠は左右の物を見、上下のものを視むる時、更に其顏を動かし、首を掉ることをせざれども、瞳は自在に回轉して、隨意に其用を辨ずるなり。

然れば路すがらの事々物々、譬へばお堀端の芝生の一面に白く仄見ゆるに、幾條の蛇の這へるが如き人の踏みしだきたる痕を印せること、英國公使館の二階なる硝子窓の一面に赤黑き燈火の影の射せること、其門前なる二柱の瓦斯燈の昨夜よりも少しく暗きこと、往來の眞中に脫捨てたる草鞋の片足の、霜に凍て附きて堅くなりたること、路傍にすく〳〵と立併べる枯柳の、一陣の北風に颯と音して一齊に南に靡くこと、遙か彼方にぬつくと立てる電燈局の煙筒より一縷の煙の

立騰ること等、凡そ這般の些細なる事柄と雖も一として件の巡査の視線圏外に免るゝことを得ざりしなり。

然も渠は交番を出でて、路に一個の老車夫を叱責し、而して後此處に來れるまで、たゞに一回も背後を振返りしことあらず。

渠は前途に向ひて着眼の鋭く、細かに、嚴しきほど、背後には全く放心せるものの如し。如何となれば背後は既に一旦我が眼に檢察して、異狀なしと認めてこれを放免したるものなればなり。

兇徒あり、白刃を揮ひて背後より渠を刺さむか、巡査は其呼吸の根の留まらむまでは、背後に人あるといふことに、思ひ到ることはなかるべし。他なし、渠は己が眼の觀察の一度達したる處には、譬ひ藕絲の孔中と雖も一點の懸念をだに遺し置かざるを信ずるに因れり。

故に渠は泰然と威嚴を存して、他意なく、懸念なく、悠々として唯前途のみを志すを得るなりけり。

其靴は霜のいと夜深きに、空谷を鳴して遠く跫音を送りつゝ、行く〳〵一番町の曲角の良此方まで進みける時、右側の唯ある冠木門の下に踞まれる物體ありて、我が跫音に蠢めけるを、例の眼にて屹と見たり。

八田巡査は屹と見るに、こは最窶々しき婦人なりき。

一個の幼兒を抱きたるが、夜深の人目無きに心を許しけむ、帶を解きて其幼兒を膚に引緊め、着たる襤褸の綿入を衾となして、少しにても多量の暖を與へむとせる、母の心はいかなるべき。よしや其母子に一錢の惠を垂れずとも、誰か憐と思はざらむ。

然るに巡査は二つ三つ婦人の枕頭に足踏して、

「おいこら、起きんか、起きんか。」

と沈みたる、然も力を籠めたる聲にて謂へり。

婦人は慌しく蹶起きて、急に居住ひを繕ひながら、

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

巡査は重々しき語氣を以て、

「はいでは無い、こんな處に寢て居ちやあ下可ん、疾く行け、何といふ醜態だ。」

と鋭き音調。婦人は恥ぢて呼吸の下にて、

「はい、恐入りましてございます。」

恁く打謝罪る時しも、幼兒は夢を破りて、睡眠の中に忘れたる、饑と寒さとを思出し、あと泣出す聲も疲勞のために裏涸れたり。母は見るより人目も恥ぢず、慌てて乳房を含ませながら、

「夜分のことでございますから、何卒旦那樣お慈悲でございます。大眼に御覽遊ばして。」

巡査は冷然として、

「規則に夜晝は無い。寢ちやあ不可ん、軒下で。」

折から一陣荒ぶ風は冷を極めて、手足も露はなる婦人の膚を裂きて寸斷せむとせり。渠はぶるぶると身を震はせ、鞠の如くに竦みつゝ、

「堪りません、もし旦那、何卒、後生でございます。少時此處にお置き遊ばして下さいまし。此寒さにお堀端の吹曝へ出ましては、こ、この子が可哀相でございます。種々災難に逢ひまして、俄かの物貰で勝手は分りませず……」といひかけて婦人は咽びぬ。

これを此軒の主人に請はば、其諾否未だ計り難し。然るに巡査は肯入れざりき。

「不可、我が一旦不可といつたら何といつても不可んのだ。譬ひ汝が、觀音樣の化身でも、寢ちやならない、こら、行けといふに。」

三

「伯父樣お危うございますよ。」

半藏門の方より來りて、今や堀端に曲らむとする時、一個の年紀少き美人は其同伴なる老人の蹣跚たる醉歩に向ひて注意せり。渠は編物の手袋を嵌めたる左の手にぶら提灯を携へたり。片手

は老人を導きつゝ。

伯父様と謂はれたる老人は、ぐらつく足を蹈占めながら、

「なに、大丈夫だ。あれんばかしの酒にたべ醉つて堪るものかい。時にもう何時だらう。」

夜は更けたり。天色沈々として風騷がず。見渡すお堀端の往來は、三宅坂にて一度盡き、更に一帶の樹立と相連る煉瓦屋にて東京の其局部を限れる、この小天地寂として、星のみ冷かに冴え渡れり。美人は人欲しげに振返りぬ。百歩を隔てて黒影あり、靴を鳴して徐に來る。

「あら、巡査さんが來ましたよ。」

伯父なる人は顧みて角燈の影を認むるより、直ちに不快なる音調を帶び、

「巡査が何うした、お前何だか、嬉しさうだな。」

と女の顏を瞻れる、一眼盲ひて片眼鋭し。女はギツクリとしたる樣なり。

「ひどく寂しうございますから、もう一時前でもございませうか。」

「うむ、そんなものかも知れない、ちつとも腕車が見えんからな。」

「ようございますわね、もう近いんですもの。」

良無言にて歩を運びぬ。醉へる足は捗取らで、靴音は早や近づきつ。老人は聲高に、

「お香、今夜の婚禮は何うだつた。」と少しく笑を含みて問ひぬ。

女は輕くうけて、

「大層お見事でございました。」

「いや、お見事ばかりぢやあない、お前は彼を見て何と思つた。」

女は老人の顏を見たり。

「何ですか。」

「嘸、羨しかつたらうの。」といふ聲は嘲る如し。

女は答へざりき。渠はこの一冷語のために太く苦痛を感じたる狀見えつ。

老人は然こそあらめと思へる見得にて、

「何うだ、羨しかつたらう。おい、お香、己が今夜彼家の婚禮の席へお前を連れて行つた主意を知つとるか。ナニ、はいだ。はいぢやない。其主意を知つてるかよ。」

女は默しぬ。首を低れぬ。老夫はます〳〵高調子。

「解るまい、こりや恐らく解るまいて。何も儀式を見習はせようためでもなし、別に御馳走を喰はせたいと思ひもせずさ。たゞ羨しがらせて、情なく思はせて、お前が心に泣いて居る、其顏を見たいばつかりよ。はゝゝ。」

口氣酒芬を吐きて面をも向くべからず、女は悄然として横に背けり。老夫は其肩に手を懸けて、

「何うだお香、あの縁女は美しいの、さすがは一生の大禮だ。あのまた白と紅との三枚襲で、トしいが、お前にや九目だ。婿も立派な男だが、あの巡査にや一段劣る。もしこれがお前と巡査とであつて見ろ。嘸目の覺むることだらう。喃、お香、過日巡査がお前をくれろと申込んで來た時に、吾さへアイと合點すりや、あべこべに人を羨ましがらせて遣られる處よ。然もお前が（生命かけても）といふ男だもの、どんなにおめでたかつたかも知れやアしない。しかし何うもそれ隨意にならないのが浮世つてな、よくしたものさ。我といふ邪魔者が居つて、小氣味よく斷つた。彼奴も飛んだ恥を掻いたな。はじめから出來る相談か、出來ないことか、見當をつけて懸ればよいのに、何も、八田も目先の見えない奴だ。馬鹿巡査！」

「あれ伯父様。」

と聲ふるへて、後の巡査に聞えやせんと、心を置きて振返れる、眼に映ずる其人は、……夜目にもいかで見紛ふべき。

「おや！」と一言我知らず、口よりもれて愕然たり。

八田巡査は一注の電氣に感ぜし如くなりき。

四

老人は咄嗟の間に演ぜられたる、このキツカケにも心着かでや、更に氣に懸くる樣子も無く、

「喃、お香、嘸吾がことを無慈悲な奴と怨んで居よう。吾やお前に怨まれるのが本望だ。いくらでも怨んでくれ。何うせ、吾もかう因業ぢや、良い死樣もしやアしまいが、何、そりや固より覺悟の前だ。」

眞顏になりて謂ふ風情、酒の業とも思はれざりき。女はやう〳〵口を開き、

「伯父樣、貴下まあ往來で、何をおつしやるのでございます。早く歸らうぢやございませんか。」

と老夫の袂を曳動かし急ぎ巡査を避けむとするは、聞くに堪へざる伯父の言を渠の耳に入れじとなるを、伯父は少しも頓着せで、平氣に、寧ろ聞えよがしに、

「彼もさ、巡査だから、我が承知しなかつたと思はれると、何か身分のいゝ官員か、金滿でも擇んで居て、月給八圓におぞ毛をふるつた樣だが、そんな賤しい了簡ぢやない。お前の嫌な、一所になると生血を吸はれる樣な人間でな、譬へば癩病坊だとか、高利貸だとか、再犯の盜人とでもいふ樣な者だつたら、吾は喜んで、くれて遣るのだ。乞食ででもあつて見ろ、其こそ吾が乞食をして吾の財産を皆な其奴に讓つて、夫婦にしてやる。え、お香、而してお前の苦しむのを見て樂

むさ。けれども彼の巡査はお前が心からすいてた男だらう。あれと添はれなけりや生きてる効がないとまでに執心の男だ。其處を吾がちやんと心得てるから、きれいさつぱりと斷つた。何と慾の無いもんぢやあるまいか。其處で一旦吾が斷つた上は何でもあきらめてくれなければならないと、普通の人間ならいふ處だが、吾がのは然うぢやない。伯父さんが不可とおつしやつたから、まあ私も仕方がないと、お前にわけもなく斷念めて貰つた日にやあ、吾が、志も水の泡さ、形なしになる。處で、戀といふものは、そんな淺薄なもんぢやあない。何でも剛膽な奴が危險な目に逢へば逢ふほど、一層剛膽になる樣で、何か知ら邪魔が入れば、なほさら戀しうなるものでな、とても思切れないものだといふことを知つてるから、こゝで愉快いのだ。何うだい、お前は思ひ切れるかい、うむ、お香、今ぢやもう彼の男を忘れたか。」

女は良少時默したるが、

「い……い……え。」ときれ〴〵に答へたり。

老夫は心地好げに高く笑ひ、

「むゝ、道理だ。さうやすつぽくあきらめられる樣では、吾が因業も價値がねえわい。これ、後生だからあきらめてくれるな。まだ〳〵足りない、もつと其巡査を慕うて貰ひたいものだ。」

女は堪へかねて顏を振上げ、

「伯父樣、何がお氣に入りませんで、そんな情ないことをおつしやいます、私は、……」と聲を飲む。

老夫は空嘯き、

「なんだ、何がお氣に入りません？謂ふな、勿體ない。何だつてまた恐らくお前ほど吾が氣に入つたものはあるまい。第一容色は可し、氣立は可し、優しくはある、することなすこと、お前のことといつたら飯のくひ樣まで氣に入るて。しかしそんなことで何、巡査を何うするの、斯うするのといふ理窟はない。譬ひお前が何かの折に、我の生命を助けてくれてさ、生命の親と思へばとても、決して巡査にやあ遣らないのだ。お前が憎い女なら吾もなに、邪魔をしやあしねえが、可愛いから、あゝしたものさ。氣に入るの入らないのと、そんなこたあ言つてくれるな。」

女は少し屹となり、

「それでは貴下、あのお方に何ぞお惡いことでもございますの。」

恁言ひ懸けて振返りぬ。巡査は此時囁く聲をも聞くべき距離に着々として歩し居れり。

老夫は頭を打掉りて、

「う、んや、吾や彼奴も大好さ。八圓を大事にかけて、世の中に巡査ほどのものはないと澄まして居るのが妙だ。あまり職掌を重んじて、苛酷だ、思遣りがなさすぎると、評判の惡いのにも頓

着なく、すべ一本でも見免さない、アノ邪慳非道な處が、馬鹿に吾は氣に入つてる。まづ八圓の價値はあるな。八圓ぢや高くない、祿盜人とはいはれない、まことに立派な八圓樣だ。」

女は堪らず顧みて、小腰を屈め、片手をあげてソト巡査を拜みぬ。いかにお香はこの振舞を伯父に認められじとは勉めけむ。瞬間にまた頭を返して、八田が何等の擧動を以て我に答へしやを知らざりき。

五

「えゝと、八圓樣に不足はないが、何うしてもお前を遣ることは出來ないのだ。それも彼奴が浮氣ものので、ちよいと色に迷つたばかり、お嫌ならよしなさい、他所を聞いて見ますといふ、お手輕な處だと、吾も承知をしたかも知れんが、何うして己が探つて見ると、義延(巡査の名)といふ男はそんな男と男が違ふ。何でも思込んだら何うしても忘れることの出來ない質で、矢張お前と同一樣に、自殺でもしたいといふ風だ。こゝで愉快いて、はゝゝゝはゝ。」と冷笑へり。

女は聲をふるはして、

「そんなら伯父樣、まあ何うすりやいゝのでございます。」と思詰めたる體にて問ひぬ。

伯父は事もなげに、

「何うしても不可いのだ。何んなにしても不可いのだ。とても駄目だ、何にもいふな、譬ひ何うしても肯きやあしないから、お香、まあ、然う思つてくれ。」

女はわつと泣出しぬ。渠は途中なることをも忘れたるなり。

伯父は少しも意に介せず、

「これ、一生のうちに唯一度いはうと思つて、今までお前にも誰にもほのめかしたことも無いが、次手だから謂つて聞かす。可いか、亡くなつたお前の母樣はな。」

母といふ名を聞くや否や女は俄に聞耳立てて、

「え、母樣が。」

「むゝ、亡くなつた、お前の母樣には、吾が、すつかり惚れて居たのだ。」

「あら、まあ、伯父樣。」

「うんや、驚くこたあない、また疑ふにも及ばない。其を、其母樣を、お前の父樣に奪られたのだ。な、解つたか。勿論お前の母樣は、吾が何だといふことも知らず、弟もやつぱり知らない。吾もまた、口へ出したことはないが、心では、心では、實に吾やもう、お香、お前は其の思遣があるだらう。巡査といふものを知つてるから。婚禮の席に連なつた時や、明暮其なかの好いのを見て居た吾は、えゝ、これ、何んな氣がしたとお前は思ふ。」

といふ聲濁りて、痘痕の充てる頰骨高き老顏の酒氣を帶びたるに、一眼の盲ひたるが最もの凄きものとなりて、拉ぐばかり力を籠めて、お香の肩　摑み動かし、

「未だに忘れない。何うしても其殘念さが消え失せない。其爲に吾はもう總ての事業を打棄てた。名譽も棄てた。家も棄てた。つまりお前の母親が、己の生涯の幸福と、希望とを皆奪つたものだ。吾はもう世の中に生きてる望はなくなつたが、唯何とぞしてしかへしがしたかつた、トいつて寢刃を合せるぢやあ無い、戀に失望したものの其苦痛といふものは、凡そ、何の位であるといふことを、思知らせたいばつかりに、要らざる生命をながらへたが、慕ひ合つて望が合うた、お前の兩親に對しては、何うしても其味を知らせよう手段がなかつた。もうちつと長生をして居りや、其内には吾が仕方を考へて思知らせてやらうものを、不幸だか、幸だか、二人ともなくなつて、殘つたのはお前ばかり。親身といつて他にはないから、其處でおいらが引取つて、これだけの女にしたのも、三代祟る執念で、親のかはりに、なあ、お香、汝に思知らせたさ。幸ひ八田といふ意中人が、お前の胸に出來たから、吾も望が遂げられるんだ。さ、斯ういふ因緣があるんだから、譬ひ世界の金滿に己をしてくれるといつたつて、とても謂ふこたあ肯かれない。覺悟しろ！所詮駄目だ。や、此奴、耳に蓋をして居るな。」

眼に一杯の涙を湛へて、お香はわな〳〵ふるへながら、兩袖を耳にあてて、せめて死刑の宣告

を聞くまじと勤めたるを、老夫は殘酷にも引放ちて、

「あれ！」と背くる耳に口、

「何うだ、解つたか。何でも、少しでもお前が失望の苦痛を餘計に思知る樣にする。其内巡査のことをちつとでも忘れると、それ今夜のやうに人の婚禮を見せびらかしたり、氣の惡くなる談話をしたり、あらゆることをして苛めてやる。」

「あれ、伯父樣、もう私は、もう、ど、どうぞ堪忍して下さいまし。お放しなすつて、え、何うせうねえ。」

とおぼえず、聲を放ちたり。

少距離を隔てて巡行せる八田巡査は思はず一足前に進みぬ。渠は其處を通過ぎむと思ひしならむ。さりながら得進まざりき。渠は立留りて、しばらくして、たじ〳〵と後に退りぬ。巡査は此處を避けむとせしなり。されども渠は退かざりき。造次の間八田巡査は、木像の如く突立ちぬ。更に冷然として一定の足並を以て肅々と歩出せり。あゝ、戀は命なり。間接に我をして死せしめむとする老人の談話を聞くことの、いかに巡査には絶痛なりしよ。一度歩を急にせむか、八田は疾に渠等を通越し得たりしならむ、或は故らに歩を緩うせむか、眼界の外に渠等を送遣し得たりしならむ。然れども渠は其職掌を堅守するため、自家が確定せし平時に於ける一式の法則あり。

交番を出でて幾曲の道を巡り、再び駐在所に歸るまで、歩數約三萬八千九百六十二と。情のために道を迂回し、或は疾走し、緩歩し、立停するは、職務に盡すべき責任に對して、渠が屑とせざりし處なり。

六

老人はなほ女の耳を捉へて放たず、負はれ懸るが如くにして歩行きながら、

「お香、斯うは謂ふもののな、吾はお前が憎かあない、死んだ母親にそつくりで可愛くつてならないのだ。憎い奴なら何も吾が仕返をする價値は無いのよ。だからな、食ふことも衣ることも、何でもお前の好な通り、吾や衣ないでもお前には衣せる。我まゝ一杯さして遣るが、唯あればかりは何なにしても許さんのだから然う思へ。吾ももう取る年だし、死んだあとでと思ふであらうが、然ううまくはさせやあしない、吾が死ぬ時は汝も一所だ。」

恐しき聲を以て老人が語れる其最後の言を聞くと齊しく、お香は最早忍びかねけむ、力を極めて老人が押へたる肩を振放し、ばた〳〵と駈出して、あはやと見る間に堀端の土手へひたりと飛乘りたり。コハ身を投ぐる！と老人は狼狽へて、引戻さんと飛行きしが、醉眼に足場をあやまり、身を横ざまに霜を辷りて、水にざんぶと落ち込みたり。

此時疾く救護のために一躍して馳來れる、八田巡査を見るよりも、

「義さん。」と呼吸せはしく、お香は一聲呼懸けて、巡査の胸に額を埋め我をも人をも忘れし如く、犇とばかりに縋り着きぬ。蔦を其身に絡めたるまゝ枯木は冷然として答へもなさず、堤防の上に衝と立ちて、角燈片手に振翳し、水を屹と瞰下したる、時に寒冷謂ふべからず、見渡す限り霜白く墨より黑き水面に烈しき泡の吹出づるは老夫の沈める處と覺しく、薄氷は龜裂し居れり。

八田巡査はこれを見て、躊躇するもの一秒時、手なる角燈を差置きつ、唯見れば一枝の花簪の、徽章の如く我胸に懸れるが、ゆらぐばかりに動悸烈しき、お香の胸とおのが胸とは、ひたと合ひてぞ放れがたき。兩手を靜にふり拂ひて、

「お退き。」

「え、何うするの。」

とお香は下より巡査の顏を見上げたり。

「助けて遣る。」

「伯父さんを？」

「伯父でなくつて誰が落ちた。」

「でも、貴下。」

巡査は儼然として、
「職務だ。」
「だつて貴下。」
巡査は冷かに、「職掌だ。」
お香は俄に心着き、また更に蒼くなりて、
「おゝ、そしてまあ貴下、貴下はちつとも泳を知らないぢやありませんか。」
「職掌だ。」
「それだつて。」
「不可ん、駄目だもう、僕も殺したいほどの老爺だが、職務だ！斷念ろ。」
と突遣る手に喰附くばかり、
「不可ませんよう、不可ませんよう。あれ、誰ぞ來て下さいな。助けて、助けて。」と呼び立つれど、土塀石垣寂として、前後十町に行人絶えたり。
八田巡査は、聲をはげまし、
「放さんか！」
決然として振拂へば、力かなはで手を放てる、咄嗟に巡査は一躍して、棄つるが如く身を投ぜ

り。お香はハツと絶入りぬ。あはれ八田は警官として、社會より荷へる負債を消却せむがため、あくまで其死せむことを、寧ろ殺さむことを欲しつゝありし惡魔を救はむとて、氷點の冷、水凍る夜半に泳を知らざる身の、生命とともに愛を棄てぬ。後日社會は一般に八田巡査を仁なりと稱せり。あゝ果して仁なりや、然も一人の渠が殘忍苛酷にして、恕すべき老車夫を懲罰し、憐むべき母と子を嚴責したりし盡瘁を、讃歎するもの無きはいかん。

泉鏡花年譜

明治六年十一月四日、金澤市下新町二十三番地に生る。名は鏡太郎。父は清次、政光とて、金屬の彫工なり。母は鈴、江戸下谷の出生、葛野流の鼓の家、中田氏の女にして、能樂師松本金太郎の小妹。金太郎は中田の家を出でて、松本の養子となれるなり。

明治九年四月、年四つの時、父母に伴はれ、土地の向山に遊び、はじめて城の天守を望み、殆ど町の全景を覽る。山中の蕎麥屋にて、もり三杯を服し、往復を歩行きて、健脚健啖を、しば〳〵一つ話にさる。健啖　知らず、其の後五里以上の道を歩行し得たる覺えなし、嘲笑すべき男の足弱なり。

明治十三年四月、町より淺野川を隔てたる、東馬場、養成小學校に入學。これより先、母に草双紙の繪解を、町内のうつくしき娘たちに、口碑、傳說を聞くこと多し。

明治十六年十二月、母、二十九にして。……

明治十七年六月、父にともなはれて、石川郡松任、成の摩耶夫人に詣づ。逕の流に合歡の花咲き、池に杜若紫なり。なき母を思ひ慕ふ念いよ〳〵深し。學期より金澤高等小學校に入學。後一年ならずして、北陸英和學校に轉ず、西洋人によつて經營されたるミッションスクールなり。ウイルソン第一讀本よりはじめて、パレイ萬國史等にいたる。

明治二十年五月、英和學校をひき、專門學校(後の第四高等學校)入學準備中、町内のわんぱく等、あひともに、やあ〳〵などと武者修行の眞似をなし、遊戯中、大怪我をなす。ために素志を飜して、英數學の某私塾に通ふ。英語の教授を手傳ふ。

明治二十二年四月、友人の下宿にて、はじめて紅葉先生の、「いろ懺悔」を讀む。庭に桃櫻咲き、隣に織の梭の音、鼓の調子に似て聞えたり。六月富山に旅行し、友人の許にあり。國文英語の補習の座を開きしが、いまだ三月ならずして歸鄕す。あまたの小説を耽讀せり。大抵、貸本。見料は、辰口鑛泉に住ひつゝ、母なきわれをいとほしみし、叔母の小遣と、其の娘の小分の化粧料なり。

明治二十三年十一月二十八日、此の日發程。陸路越前を經て、敦賀より汽車にて上京。豫て崇慕湯仰したる紅葉先生の門生たらむとのみ志ししが、ながく面接の機なく、荏苒一箇年間。巷に迷ひ、下宿を追はれ、半歲に居を移すこと十三四次。盛夏鎌倉にさすらひし事あり、彼處も今は都となりぬ。或時は麻布今井町の寺院より、淺草田原町の裏長屋に移りし事あり。

明治二十四年十月、牛込横寺町四十七番地に、はじめて紅葉先生を訪ぬ。志を述ぶるや、たゞちに門下たることを許され、且つ翌日より玄關番を承る。十九日午前と覺ゆ。これより衣食煙草ともに、偏に先生の恩惠による。——新婚の令夫人、島田髷にておはせしかば、兩三日、妹ぎみと思ひまゐらせき。

明治二十五年六月、先生の「夏小袖」春陽堂より匿名にて出づ。作者の名を言ひあてたる讀者に懸賞の催しなり。堅く祕して、店員にも、活版所にも、先生の眞蹟を知らざらしめむがために、玄關番全稿を書寫す。指呼するもの十に八九は中らず。其の名あらはるゝや、「やつたな、覺えて居れ。」と、饗庭翁より端書の舞込むに至る。先生リッチモンドを斜にふかして、莞爾として、「これを知るもの全國三人」と。卽ち先生と、和田鷹城と、玄關番なり。內弟子信用を受く。十二月、金澤市大火、實家類燒の厄に逢ふ。歸鄕。年內大雪の中を上京す。汽車いまだ敦賀以北を通ぜざりき。

明治二十六年五月、京都日出新聞に「冠彌左衞門」を連載す。うけざる故を以て、新聞當事者より、先生に對し、其の中止を請求して止まず、狀信二十通に餘る。然れども、少年の弟子の出端を折られむをあはれみて、俠氣勵烈、折衝を重ねて、其の(完)を得せしめらる。此のよし後に知る處、偏に先生の大慈なり。翌年いづれより轉賣せしや、加賀、北陸新報に、おなじ插畫とともに揭げて、社は喝采を得たりと聞く。そのいはれを知らず。此の年、「活人形」を探偵文庫に、ならびに「金時計」を少年文學に。此の兩冊は、生前の父に見することを得たり。八月、重き脚氣を病み、療養のため歸鄕。十月京都に赴く。同地遊覽中なりし、先生に汽車賃の補助をうけて橫寺町に歸らむがためなりき。時小春にして、途中大聖寺より大に雪降る。年末この紀行に潤色して、「他人之妻」一篇を作る。年を經て發表せし、「怪語」は其の一齣なり。餘は散佚せしのみ。

明治二十七年一月九日、父を喪ふ。歸郷、生活の計を知らず。たゞ祖母の激勵の故に、祖母と幼弟を殘して上京す。十月、「豫備兵」つゞいて、「義血俠血」讀賣新聞に出づ。ともに歸郷中、翌日の米の計なきに切れる試作。其の新聞に掲げられたるは、先生の大斧鉞のたまものなり。

明治二十八年二月、家計を支ふ必要上、博文館輯する所の日用百科書の編纂に從ふため、小石川戸崎町大橋乙羽氏の宅に移る。紅葉先生、弟子の行を壯ならしむるため、西洋料理を馳走さる。いまだ酒なし。ホークと、ナイフの持ち方を教へられしも此の時なり。四月、「夜行巡査」を文藝倶樂部に發表。青年文誌上、田岡嶺雲氏の讃をうく。つゞいて「外科室」深夜にして成りて、文藝倶樂部卷頭に盛裝して出づ。六月、年七十を越えたる祖母を見むがために歸郷し、八九月ともに祖母の慈愛に逗留。北國新聞に「黑猫」を草す。十月歸京。また脚氣に惱む。

明治二十九年一月、舊冬より病を推して、起稿したる「海城發電」「琵琶傳」「化銀杏」三篇、一は太陽に、一は國民之友に、一は青年小說に出づ。世評皆喧し、褒貶相半ばす。否、寧ろ罵評の包圍なりし。五月、小石川大塚町に居を卜し、祖母を迎ふ。年七十七。東京に住むを喜びて、越前國春日野峠を徒歩して上りたり。母の感化による。「龍潭譚」小說六佳選に出づ。めざまし草の批評に鑑み、「九ツ谺」と改めむとせしが、いま同じ題を存す。「一之卷」「二之卷」を、月をついで文藝倶樂部に連載し初む。十月より讀賣新聞に「照葉狂言」。——此の頃笹川臨風、氣輕に大塚の長屋を訪ひ來

り、ともに十二社に遊び、酒はのまず柿をかじる。

明治三十年四月、宙外、後藤寅之助氏、新著月刊を起したる、其の首卷に「化鳥」を書く。此の頃より酒杯を手にし、人の遊に伴ふ。然れども「笈ずる草紙」は、推して端坐精進の作と言はむ。

明治三十一年二月、「辰巳卷談」を新小說に寄す。新文藝に載せたる「親子そば三人客」は、本郷壹岐殿坂の蕎麥屋に時雨の夜の實景なり。

明治三十二年一月、伊藤すゞと相識る、十二月、「湯島詣」新作にして春陽堂より、單行、出版。

明治三十三年二月、「高野聖」、新小說に出づ。

明治三十四年十一月、「袖屏風」新小說に。

明治三十五年一月、「女仙前記」新小說に出づ。「祝盃」は一度に各府縣の新聞に載せたるもの。二月、名古屋に行く。七月の末より九月上旬まで、逗子櫻山街道の一軒家にあり。胃腸を病めるなり。すゞ臺所を手傳ふ。十月、「起誓文」新小說に出づ。

明治三十六年三月、牛込神樂町に引越す。五月、すゞと同棲。その此を得たるは、竹馬の郷友、吉田賢龍氏の厚誼なり。十月三十日、紅葉先生逝去さる。十一月より、國民新聞に「風流線」を載せはじむ。これより前、「藥草取」は、換菓編の一篇にして、同葉、皆ともに先生の病床に呈したるなり。先生、筆を枕に取りて、尙ほ章行の句讀を正したまひたり。十月、「白羽箭」文藝倶樂部に出

づ。月光、草に深き、古城を歌へるなり。

明治三十七年三月、「紅雪錄」四月、「續紅雪錄」――雪中の赤帽は、名古屋停車場に、これを見たるなり。

明治三十八年二月、「銀短冊」文藝倶樂部、「瓔珞品」新小說。

明治三十九年二月、祖母を喪ふ。年八十七。七月、ます〳〵健康を害ひ、靜養のため、逗子、田越に借家。一夏の假すまひ、やがて四年越の長きに亙れり。殆ど、粥と、じやが薯を食するのみ。十一月、「春晝」新小說に出づ。うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき。雨は屋を漏り、梟軒に鳴き、風は櫟の枝を折りて、棟の柿葺を貫き、破衾の天井を刺さむとす。蘆の穗は霜寒き枕に散り、さゝ蟹は、むれつゝ疊を走りぬ。「春晝後刻」を草せり。蝶か、夢か、殆ど恍惚の間にあり。李長吉は、其の頃嗜みよみたるもの。

明治四十年一月、「婦系圖」を、やまと新聞に連載す。

明治四十一年、新作「草迷宮」春陽堂にて單行出版。二月、歸京して麹町土手三番町に居を卜す。敷金の出資、店うけ人は、ともに彌次郎兵衞、臨風氏なりとす。激暑に惱む。秋たちてより土手の松に木蒐の聲聞えたり。

明治四十二年十月、「白鷺」東京朝日新聞に出づ。

明治四十三年一月「歌行燈」、此の年より「鏡花集」袖珍本の刊行はじまる。年月相續ぎて五卷とす。五月、麹町下六番町十一に。十月、「三味線堀」三田文學に出づ。頁數の少き雜誌に、一稿百枚は、永井荷風氏の厚情による。

明治四十四年一月、「朱日記」三田文學。十月「銀鈴集」隆文館より。――この頃は里見弴氏有島家にあり。長髮白皙、しば〳〵家人の見る處。はじめ未だ逢はず、後次第に相近づく。

明治四十五年一月「南地心中」、四月、中央公論に「三人の盲の話」。

大正元年十一月、「印度更紗」中央公論。

大正二年三月、「夜叉ケ池」演藝倶樂部。十二月、「海神別莊」中央公論。ともに戲曲。おなじく「戀女房」鳳鳴社より單行す。

大正三年九月、「日本橋」知友堀尾成章氏の千章館より。小村雪岱氏はじめて裝畫を試む。

大正四年四月、「新つや物語」文藝倶樂部、六月、「夕顏」三田文學。六月、「鏡花選集」、十月、「遊里集」ともに春陽堂。出版。

大正五年十月、水上瀧太郎氏英國より歸る。此の年、初夏のはじめより、あしき病流行したるに恐をなし、門を出でざること、殆ど三月。瀧君歸朝の當時、久保田万太郎氏と相伴ひて訪れたるに快談し、十一月下旬、はじめて大根河岸に一酌す。此月新小說に「萩薄內證話」。

大正六年九月、「天守物語」新小説。

大正七年六月、「鴛鴦帳」至善堂より、新作單行。前年春、書肆より前借して、多日稿成らず。作者酒間に鬱ぐを見て、水上瀧太郎氏、我が小遣其の額に餘る、金子を返せと言ふ。厚誼と意氣に且つ感じて、草稿すゝみぬ。

大正八年一月、「ゆかりの女」を婦人畫報に連載しはじむ。

大正九年一月、「伯爵の釵」を、婦女界に、五月、「賣色鴨南蠻」を人間に。六月の頃と覺ゆ、映畫の事により、谷崎潤一郎氏と會す。芥川龍之介氏も殆ど同時なり。

大正十年二月、水上瀧太郎氏編する處の著作細表、「蜻蛉集」の附錄に出づ。訂正增補したるは、春陽堂の「全集」にあり。

大正十一年一月、「身延の鶯」を東京日日新聞に、八月より、「りんだうとなでしこ」を女性にのせはじむ。

大正十二年九月、大地震。火を避けて露宿二晝夜、家内皆無事。提灯のあかりをたよりに、徹宵、「露宿」「十六夜」を書く。

大正十三年三月、「二三羽——十二三羽」女性に出づ。「七寶の柱」を新潮社上梓。五月、苦樂に、「眉かくしの靈」を寄す。

大正十四年一月、改造社より「番町夜講」を出す。七月、春陽堂より「鏡花全集」刊行しはじむ、濱野英二氏の勞少からず。

大正十五年一月、女性に、「戰國新茶漬」を載す。大最員の、上杉謙信、場に登りて、自から大に喜ぶ。

昭和二年二月、「多神教」——文藝春秋。

昭和二年四月、改造に「卵塔場の天女」。——七月、期に遲るゝこと八ケ月にして、「全集」成る。この集のために、一方ならぬ厚意に預りし、芥川龍之介氏の二十四日の通夜の書齋に、鐵瓶を掛けたるまゝの夏冷き火鉢の傍に、其の月の配本第十五卷、蔽を拂はれたりしを視て、思はず涙さしぐみぬ。八月、東京大阪日日新聞、新八景の記事のため十和田湖を觀る、三角醫學博士同遊。森林中に、奥入瀨川をさかのぼり、戸の口、休屋に宿り、秋田に行く。途中、湖風淸冷、薄荷の濱に酒を煮る。

昭和三年三月、肺炎を病む、五月癒えて、修善寺に遊ぶ。「飛劍幻なり」改造七月に載するところ。

（以下小村雪岱追記）

昭和三年八月、「十和田湖」單行本「日本八景」のうちとして鐵道省より出づ。同月、日本戲曲全

集第十集現代篇春陽堂より出づ。九月、現代日本文學全集第十四卷「泉鏡花集」改造社より出づ。同月、「深川淺景」大東京繁昌記下町篇として春秋社より出版。同月、明治大正文學全集第十二卷春陽堂より出づ。十一月、修善寺溫泉新井に遊ばる。

昭和四年二月、「泉鏡花集」豪華版春陽堂より出版。四月、「昭和新集」改造社より出づ。五月、能登國和倉溫泉和歌崎館及加賀國金澤市上柿木畠藤屋に遊ばる、其折の御便りに。絶えて久しきゆかしくなつかしき人にあひて思はず落涙いたし候。とあり。七月より十一月にかけて、「山海評判記」を東京時事新報へ載せらる。

昭和五年一月、現代長篇小說全集第十四卷新潮社より出づ。同月、熱海新玉旅館に赴かる。熱海市紅葉祭のためなり。五月、修善寺新井に遊ばる。九月、「木の子說法」文藝春秋に出づ。十月、修善寺新井に遊ばる。

昭和六年六月、千葉縣勝浦勝浦館に遊ばる。七月、「貉市場」文藝春秋オール讀物號に出づ。八月、「木蒐俗見」を東京朝日新聞へ載せらる。九月、「貝の穴に河童の居る事」を古東多万に寄せらる。十一月、金澤市藤屋に遊ばる。

昭和七年一月、「菊あはせ」を文藝春秋に載せらる。同月、熱海水口園に遊ばる。五月、修善寺新井に遊ばる。十一月、修善寺新井に赴かる。

昭和八年一月、「神鷺の卷」改造に揭載。二月、熱海水口園に遊ばる。三月三十日、令弟斜汀泉豐春氏逝去。

昭和九年一月、「斧琴菊」中央公論に出づ。同月、熱海水口園に遊ばる。三月、小說・隨筆集「斧琴菊」昭和書房より出版。五月、水口園に赴かる。

昭和十年二月、熱海水口園に遊ばる。五月、修善寺新井に赴かる。十二月、熱海水口園に遊ばる。

昭和十一年一月、戲曲「お忍び」中央公論に出づ。同月、熱海水口園に赴かる。五月、修善寺新井。十一月、熱海水口園に遊ばる。

昭和十二年一月、「薄紅梅」東京日日新聞に出づ。三月、葉山長者園に遊ばる。同月、熱海水口園に赴かる。六月二十四日、帝國藝術院會員被仰付。十二月、「雪柳」中央公論に出づ。

昭和十三年四月、熱海水口園。九月、同水口園に遊ばる。十一月頃より御健康すぐれられず。

昭和十四年四月二十四日、佐藤春夫氏令甥竹田龍兒氏、谷崎潤一郎長女鮎子嬢の結婚の媒酌をせらる。七月、「縷紅新草」中央公論に出づ。これ病苦を押へ夫人の御心配を退けて執筆せられしものなり。七月二日、九九九會へ出席さる。この會は三宅正太郎氏長崎控訴院長に轉任決定せるため特に定日二十三日を繰上げたるものなり。八月、病勢增進さる。九月七日、急變、午後二時四十五分逝去。病名肺腫瘍。行年六十七歳。八日宮內省より

天皇陛下より幣帛御下賜有之ニ付明九日午前十一時出頭可有之旨御沙汰あり。九日午前十一時鏑木清方氏遺族代理として出頭幣帛を拜受され靈前に供へられたり。十日芝青松寺に於て葬儀執行。逝去後未發表無題の小説原稿一篇見出さる。逝去前數日、夫人二階物干臺に咲きたる露草一莖を摘みて御目にかけられしにいたく賞美せられし由。逝去後枕頭の手帖に鉛筆にて

露草や赤のまんまもなつかしき。としるされあり。

泉鏡花作品年表

明治二十六年			
五月	冠彌左衛門	京都日出新聞	京都日出新聞社
同3	『活人形』	探偵小說第一一集 署名白水郎	春陽堂
六月28	金時計	少年文學第一九編『俠黑兒』附錄	博文館
九月	窮鳥	北門新報	北門新報社
明治二十七年			
八月―十二月	大和心	幼年雜誌第四卷第一六號―第一二三號	博文館
十月1―24	豫備兵	讀賣新聞 署名なにがし	日就社
十一月1―30	義血俠血	讀賣新聞 署名なにがし	日就社
同26	『海戰の餘波』	幼年玉手函第一一編	博文館
同26	譬喩談	同上、附錄	博文館
同	亂菊（ノチ女刺客）	近江新報	近江新報社
同・十二月20	黑壁	嗣海第三輯第九卷・第一〇卷	成珠社

十二月28	鬼の角	幼年玉手函第一二編『パノラマ』附錄	博文館

明治二十八年

一月5	取舵	太陽第一卷第一號	博文館
同15	聾の一心	春夏秋冬　冬の卷『餅むしろ』	博文館
三月25	神樂坂七不思議	文藝倶樂部第三編　署名狐狗狸庵	博文館
同25―六月20	妖怪年代記	文藝倶樂部第三編―第六編　署名畠芋之助	博文館
同28―四月10	祕妾傳	近江新報　署名兼六園主人	近江新報社
四月1・15	一人坊主（ノチ旅僧、功德）	少年世界一卷七號・八號　署名白水樓主人	博文館
同20	夜行巡査	文藝倶樂部第四編	博文館
同28	『なにがし』	作品集	春陽堂
	內容―豫備兵、義血俠血		
五月5	愛と婚姻	太陽第一卷第五號	博文館
同15	起居動作	日用百科全書第一編『和洋禮式』	博文館
同15	禮式所感		

六月20	外科室	文藝倶樂部第六編	博文館
同22―七月23	黑猫	北國新聞	北國新聞社
七月29	鐘聲夜半錄	『四の緒』眉山、柳浪、紅葉と合著	春陽堂
同	貧民倶樂部	北海道每日新聞	北海道每日新聞社
同	妙の宮（ノチ扱帶）	北國新聞	北國新聞社
同	女刺客（モト亂菊）	北陸新聞	北陸新聞社
八月1・15	八萬六千四百回	少年世界一ノ一五・一六　署名白水樓主人	博文館
十月20	當世女裝一斑	日用百科全書第六編『衣服と流行』	博文館

明治二十九年

一月4	琵琶傳	國民之友第二七七號	民友社
同5	海城發電	太陽第二卷第一號	博文館
同10	御殿坂下お笑草	文藝倶樂部第二卷第一編　署名畠芋之助	博文館
二月6	取舵	太陽小說第一編	博文館
同10	化銀杏	文藝倶樂部第二卷第二編（青年小說）	博文館

三月・五月25　蝙蝠物語（後ノ湯女の魂ノ一節）　新文壇第二卷第三號・第五號　文學館
四月10　祕妾傳　文藝倶樂部第二卷第五編　署名畠芋之助　博文館
五月10　一之卷　文藝倶樂部第二卷第六編　博文館
六月4・11　五の君　毎日新聞　毎日新聞社
同10　二之卷　文藝倶樂部第二卷第七編　博文館
七月1　蓑谷　少年世界第二卷第一三號　博文館
同25　妙の宮（ノチ扱帶）　文藝倶樂部第二卷第九編（海嘯義捐小說）　博文館
八月10　三之卷　文藝倶樂部第二卷第一〇編　博文館
同10　百物語　文藝倶樂部第二卷第一〇編　署名畠芋之助　博文館
九月10　四之卷　文藝倶樂部第二卷第一一編　博文館
同10　片山里　野社（ノチ氷賣、炭の鋸、紫陽花）
同10　片山里　毬栗（ノチかくれ家、赤蛙）　大倭心第一卷第一號　女敎社
同30　『冠彌左衛門』　單行　田中宋榮堂
十月10　五之卷　文藝倶樂部第二卷第一二編　博文館
十一月3　龍潭譚　文藝倶樂部第二卷第一三編（小說六佳選）　博文館

同14―十二月23　照葉狂言　讀賣新聞　日就社
同20・十二月5　勝手口　太陽第二卷第二三號・第二四號　博文館
十二月10　六之卷　文藝倶樂部第二卷第一四編　博文館
同29・一月28・四月2　X蟷螂鰒鐵道　江湖文學第二號・第三號・第五號　江湖文學社

明治三十年

一月10　誓之卷　文藝倶樂部第三卷第一編　博文館
同20　戀愛詩人　太陽第三卷第二號　博文館
三月10　ありのまゝ　文藝倶樂部第三卷第四編　博文館
四月3　化鳥　新著月刊第一號　東華堂
五月1・15・29　さゝ蟹　國民之友第三四六・三四八・三五〇號　民友社
同5　凱旋祭　新小說第二年第六卷　春陽堂
同10　堅パン　文藝倶樂部第三卷第七編　博文館
六月10　風流蝶花形　文藝倶樂部第三卷第八編　博文館
同15　鐵槌の　少年世界第三卷第一三號　博文館

七月3　清心庵　新著月刊第四號　東華堂

同5　怪語　太陽第三卷第一四號　博文館

八月1　迷兒　少年世界第三卷第一六號　博文館

同10　雜句帖　文藝倶樂部第三卷第一一編　博文館

江戸兒、新墓、魂祭、向の女房、
月番閉口の記、嬌羞、說林、座
右の美姫、畫の如し字の如し

同　醜婦を呵す　未詳　不明

九月5・翌年二月5　赤インキ物語　太陽第三卷第一八號・第四卷第三號　博文館

同26　凱旋祭　中村雪後著『薄煙』附　春陽堂

十月10　十萬石　小國民第九年第二一號　北隆館

同10　雜句帖　文藝倶樂部第三卷第一四編　博文館

「さうですか」、珍重左衞門、露八
の物眞似、自然不自然、名題、淺
黄裏

十一月10　雜句帖　文藝倶樂部第三卷第一五編　博文館

百物語、針の山、作者の男ぶり、
近山あさり、鑛毒事件的媼、藤附
愛竹の說、ふられ行燈、竹屋の渡
（ッチ吾妻名所）、添寢

同15　『新派俳家句集』序　近藤泥牛編『新派俳家句集』　白鷗社

同25　七本櫻　新著月刊第九號　東華堂

十二月3　慈善會（貧民倶樂部ノ一節）　新著月刊第一〇號　東華堂

同5　山中哲學　太陽第三卷第二四號　博文館

同10　暗まぎれ　國民之友第三六四號　民友社

同10　髯題目　文藝倶樂部第三卷第一六編　博文館

月不詳　ねむり看守　世界之日本　開拓社

明治三十一年

一月1　玄武朱雀　反省雜誌第一三年第一號　反省雜誌社

一月1	ねむり看守	尾崎紅葉著『黄櫨匂』	春陽堂
同15	おもかげ（後ノお辨當三人前ノ一節）	日本の家庭第三卷第七號	日本の家庭社
二月3	小說文躰	早稻田文學第七卷第五號	早稻田文學社
同5	辰巳巷談	新小說第三年第二卷	春陽堂
三月3	蛇くひ	新著月刊第二卷第三號	東華堂
同5	飛花落葉	太陽第四卷第五號	博文館
	青山葉山、棟の女、並木の松、黄昏、獺、をさなあそび		
同6	海城發電	明治小說文庫第四編	博文館
同20	飛花落葉	太陽第四卷第六號	博文館
	野宿、三樣の不氣味、馬車から手、十錢の價、一錢の價		
四月5	飛花落葉	太陽第四卷第七號	博文館
	分瓣梅花、童謠、御苦勞でした、一双の明眸、立ン坊		

同10	白牛（ノチ山僧）	國民之友第三六八號	民友社
同10	笈摺草紙（ノチ紫道中）	文藝倶樂部第四卷第五編	博文館
六月5	夜行巡査	明治小說文庫第七編	博文館
八月20	みだれ橋（ノチ星あかり）	太陽第四卷第一七號	博文館
九月7	外科室	明治小說文庫第一〇編	博文館
同20・十月5	鶯花徑	太陽第四卷第一九號・第二〇號	博文館
十一月10	梟物語	文藝倶樂部第四卷第一四編	博文館
十二月5	五本松（ノチ思の車）	太陽第四卷第二四號	博文館
明治三十二年			
一月1	雪の山家（ノチ立春）	讀賣新聞	日就社
同1	繪日傘	『ふとこゝろ子』 眉山と合著	春陽堂
同5	三尺角	新小說第四年第一卷	春陽堂
二月2	『錦帶記』	單行	春陽堂
同5	雜句帖	太陽第五卷第三號	博文館

蜜柑、鮒賣、發句、方言、童謠、

二月15・三月15　俳食、新婚　少年世界第五卷第五號・第七號　博文館

四月5　さら〳〵越　新小說第四年第五卷　春陽堂

同7―五月8　湖のほとり　大阪每日新聞　大阪每日新聞社

五月10　通夜物語　文藝倶樂部第五卷第七編　博文館

丸雪小雪

風流翁、言語、のろけ箱

六月28　草水晶　『花ふゞき』風葉、花袋と合輯　新聲社

內容―卷のはじめ（一之卷ノ前半）、氷賣（野社、炭の鍋、紫陽花）、かくれ家（毬栗、赤蛙）、妙の宮（扱帶）

同28―七月28　黑百合　讀賣新聞　日就社

七月1　丸雪小雪　文藝倶樂部第五卷第九編　博文館

汽車、燒豆腐、夜の網、無題

八月　吾妻名所（モト竹屋の渡）　『紅蓮白蓮』十氏合輯　新聲社

十一月5・十二月　幻往來　活文壇第一卷一・二號　署名白水樓主人　大學館

同23　『湯島詣』　單行　春陽堂

十二月20　彌次行　太陽第五卷第二五號　博文館

明治三十三年

一月　名媛記　活文壇第一卷第三號　署名白水樓主人　大學館

同　弓取町人（白羽箭ノ前章）　ふた葉第三卷第一號　文淵堂

二月　高野聖　新小說第五年第三卷　春陽堂

同5　怪談女の輪（ノチ三重の襖、不思議）　太陽第六卷第二號　博文館

三月5　滑物語（ノチ海の鳴る時、想思）　太陽第六卷第三號　博文館

四月1　色彩の嗜好　明星第一號　東京新詩社

同15　吾妻名所（モト竹屋の渡）　山本榮次郎編『小山水』　矢島誠進堂

照葉狂言廣告

同27　『照葉狂言』　作品集　春陽堂

內容―照葉狂言、五之君

五月1　春狐談　太陽第六卷第六號　博文館

ばけかた、曲線、感應、眞言

五月25	湯女の魂	新小說第五年第六卷(春營囀)	春陽堂
六月1	道行松の露	太陽第六卷第七號	博文館
同1	旅僧(モト一人坊主、ノチ功德)	明星第三號	東京新詩社
同21	月下園	『夏模樣』(三井吳服店案內)	三井吳服店
同25	狸囃子	新小說第五年第八卷	春陽堂
七月15	うしろ髮	新小說第五年第九卷(雲の峰)	春陽堂
八月1	長屋刄傷(ノチ小劍氣)	太陽第六卷第一〇號	博文館
同	三重の襖(モト怪談女の輪、ノチ不思議)	新文第一卷第四號	言文一致會
同9～九月27	三枚續	大阪每日新聞	大阪每日新聞社
十月10	女肩衣	帝國文學第六卷第一〇號	大日本圖書株式會社
同25	一葉の墓	新小說第五年第一三卷	春陽堂
十一月1	ポンチの記(ノチ裸蠟燭)	太陽第六卷第一三號	博文館
同25	葛飾砂子	新小說第五年第一四卷	春陽堂
同・翌年一月	政談十二社	小天地第一卷第二號・第四號	文淵堂

明治三十四年

一月1	本朝食人種(ノチ雪の翼、雪の羽衣)	今世少年第二卷第一號(甲鐵艦)	春陽堂
同1	いろ扱ひ	新小說第六年第一卷	春陽堂
同1	斧の舞	明星第一〇號	東京新詩社
同1	風流後妻打(ノチそら解)	九州日日新聞	九州日日新聞社
同10	炭の鋸(モト野社、氷賣、ノチ紫陽花)	少年世界第七卷第二號(春遊び)	博文館
同17	處方祕箋	天地人第五〇號	三才社
三月1	水雞の里	新小說第六年第三卷	春陽堂
同5	創作苦心談	新聲社編『創作苦心談』 十一氏合輯	新聲社
同15	赤蛙(モト毬栗、かくれ家)	女學世界第一卷第四號(壺すみれ)	博文館
四月1	註文帳	新小說第六年第四卷	春陽堂
	通夜物語廣告		
同19	『通夜物語』	單行	春陽堂
六月	木精(ノチ三尺角拾遺)	小天地第一卷第八號	文淵堂

六月	部屋の弟（ノチ蠅を憎む記）	文藝界第一卷第一號	大日本女學會
同13	月下園	『あだ浪』紅葉、涼葉、風葉と合著	文祿堂
八月1	森の紫陽花	新小說第六年第八卷	春陽堂
十月18	旅僧（モト一人坊主、ノチ功德）	東京新詩社編『青燈集』九氏合輯	文友館
同18	斧の舞	新小說第六年第一一卷	春陽堂
十一月1	袖屏風	『短篇奇談勢揃ひ』十七氏合輯	晴光館
十二月25	立春（モト雪の山家）		
明治三十五年			
一月1	瀧の白絲について	歌舞伎第二〇號	歌舞伎發行所
同1	女仙前記	新小說第七年第一卷	春陽堂
同1	祝盃	中津新報	中津新報社
	三枚續廣告		
同1	『三枚續』	單行	春陽堂
同19	熱海の春	俳藪寅の一	俳藪發行所

同	妖僧記	九州日日新聞	九州日日新聞社
二月1	城の石垣	新小說第七年第二卷	春陽堂
三月15	波がしら	文藝界第一卷第一號	金港堂
	黑百合廣告		
同23	『黑百合』	單行	春陽堂
五月1	きぬぐ川—女仙後記—	新小說第七年第五卷	春陽堂
同15	『めぐる泡』序	後藤宙外著『めぐる泡』	春陽堂
同16	青切符	俳藪寅の五	俳藪發行所
六月1	『めぐる泡』序	新小說第七年第六卷	春陽堂
八月5	やどり木	太陽第八卷第一〇號	博文館
同25	波がしら	金港堂小說叢書第二册 三氏合輯	金港堂
九月1	手帳四五枚	新小說第七年第九卷	春陽堂
同10	逗子だより	文藝寅の八	藻社
同15	花菖蒲（ノチ御留守さま）	『花かすみ』六氏合輯	文錦堂
同15	三重の襖（モト怪談女の輪、ノチ不思議）		

九月	海浴雜記	未詳	不明
十月10	繪はがき	文藪寅の九	藻社
同15	親子そば三人客	文藝界第一卷第九號	金港堂
十一月1	起誓文	新小說第七年第一一卷	春陽堂
同10	柳のおりうに就て	文藪寅の一〇	藻社
十二月	山の手小景	未詳	不明
明治三十六年			
一月1	二世の契	新小說第八年第一卷	春陽堂
	田毎かゞみ廣告		
同1	『田毎かゞみ』	作品集	春陽堂
	內容——序、山僧(白牛)、暗まぎれ、星あかり(みだれ櫛)、處方祕箋、蠅を憎む記(部屋の弟)、名媛記、斧の舞、松の露(みちゆき)、蓑谷、玄武朱雀、祝盃、一葉の墓、さゝ蟹		
同10・二月10	千歲の鉢(ヲ千代の鉢、鶴の委)	文藪卯の一・二	藻社

二月1	吉浦蜆	新小說第八年第二卷	春陽堂
同10	抱一庵主人が其譯『聖人乎盜賊乎』の序を索めらるゝに答ふ	文藪卯の二	藻社
三月1	茶一碗(ヲ置炬燵)	文藝倶樂部第九卷第四號	博文館
四月1	舞の袖	新小說第八年第四卷	春陽堂
五月1	俠言(ヲ長さん)	文藝倶樂部第九卷第七號	博文館
同10	伊勢之卷	新小說第八年第六卷(夏木立)	春陽堂
同16・30	藥草取	二六新報	二六新報社
七月1	草あやめ	新小說第八年第八卷	春陽堂
九月1	鷺の灯	太陽第九卷第一〇號	博文館
十月1	白屈菜記	新小說第八年第一一卷	春陽堂
同24・翌年三月12	風流線	國民新聞	民友社
十一月1	白羽箭	文藝倶樂部第九卷第一五號	博文館
同	紅葉先生	明星卯歲一一號 風葉、記者、鏡花對談	東京新詩社
同1	藥草取	尾崎紅葉編『換菓篇』 十四氏合輯	博文館
十二月1	紅葉先生逝去前十五分間	新小說第八年第一三卷	春陽堂

十二月1　紅葉先生弔詞　文藝倶樂部第九卷第一六號　博文館

明治三十七年

一月1　友白髮（ノチ道中一枚繪其一）　文藝倶樂部第一〇卷第一號　博文館

三月1　軍人の留主宅見舞の文（ノチ留守見舞、見舞の文）　日露戰誌第一卷一・二號　錦文館

同1　紅雪錄　新小說第九年第三卷　春陽堂

同　滿洲道成寺　日露戰誌第一卷第二號　錦文館

四月1　續紅雪錄　新小說第九年第四卷　春陽堂

五月　千鳥川　時好辰の五號　三井吳服店

同29―十月5　續風流線　國民新聞　民友社

七月1　左の窓　新小說第九年第七卷　春陽堂

同15　外國軍事通信員　文藝倶樂部第一〇卷第一〇號（勝いくさ）　博文館

八月25　留守見舞（モト軍人の留主宅見舞の文、ノチ見舞の文）『三尺劍』十三氏合輯　國民書院

九月1　紅葉先生「寐姿百形」附記　新小說第九年第九卷　春陽堂

同1　柳小嶋　文藝倶樂部第一〇卷第一二號　博文館

十月1　深沙大王　文藝倶樂部第一〇卷第一三號　博文館

同5　隅田の橋姫　時代思潮第一卷第九號　時代思潮社

十二月9　立春　『短篇小說集』（『短篇奇談勢揃ひ』ト同ジ）　晴光館

同15　風流線廣告　單行　春陽堂

明治三十八年

一月1　わか紫　新小說第一〇年第一卷　春陽堂

同1　おもて二階

同15　雪の翼（モト本朝食人種、ノチ雪の羽衣）　女學世界第五卷第二號（小天地）　博文館

同　小劔氣（モト長屋刄傷）　秋田魁新報　秋田魁新報社

三月1　かながき水滸傳　新小說第一〇年第三卷　春陽堂

四月1　銀短册　文藝倶樂部第一一卷第五號　博文館

五月15　日記の端　天鼓第四號　北上屋書店

六月1　瓔珞品　新小說第一〇年第六卷　春陽堂

六月1	女客（前半）	中央公論第二〇年第六號	反省社
七月1	小鼓吹	新小說第一〇年第七卷	春陽堂
同1	少年行	太陽第一一卷第一〇號	博文館
同1	道中一枚繪（ノチ道中一枚繪其二）	ハガキ文學第二卷第一〇號	日本葉書會
八月	手紙二通（ウチ一通）	新評論第一卷第一號	同好會
	續風流線廣告		
同18	『續風流線』	單行	春陽堂
十月1	胡蝶之曲	新小說第一〇年第一〇卷	春陽堂
同3	北國空	軍國畫報第二年第一一號	冨山房
	伊勢の卷廣告		
同26	『伊勢の卷』	單行	春陽堂
十一月1	女客	中央公論第二〇年第一一號	反省社
十二月1	仲の町にて紅葉會の事	新小說第一〇年第一二卷	春陽堂
同1	惡獸篇	文藝倶樂部第一一卷第一六號	博文館

明治三十九年			
一月1	海異記	新小說第一一卷第一號	春陽堂
同1	月夜遊女	太陽第一二卷第一號	博文館
同1・27	式部小路（三枚續ノ續篇）	大阪朝日新聞	大阪朝日新聞社
同8	『誓の卷』	作品集	日高有倫堂
	内容―誓の卷（一之卷、二之卷、三之卷、四之卷、五之卷、六之卷、誓之卷）、清心庵		
同	毬栗（＝かくれ家、赤蛙）	秋田魁新報	秋田魁新報社
二月1	術三則	新小說第一一年第二卷	春陽堂
五月10	鳴濤館より	手紙雜誌第三卷第五號	有樂社
六月10	『無憂樹』	單行	日高有倫堂
同20	斧の舞	『明治大家文集』	日高有倫堂
	七本櫻廣告		
同28	『七本櫻』	單行	日高有倫堂
七月1	かな自在	新小說第一一年第七卷	春陽堂
同1	夏期學生の讀物	中央公論第二一年第七號	反省社

七月15	お辨當三人前	文藝倶樂部第一二卷第一〇號	博文館
八月1	逗子より	新小說第一一年第八卷	春陽堂
同15	眞情吐露に限る—日記と手紙と—	文章世界第一卷第六號	博文館
九月1	花菖蒲（ノチお留守さま）	『名家短篇傑作集』 十六氏合輯	益世堂
同1	不思議（モト怪談女の輪、三重の襖）		
十一月1	春晝	新小說第一一年第一一卷	春陽堂
同1	そら解（モト風流後妻打）	太陽第一二卷第一四號	博文館
十二月1	春晝後刻	新小說第一一年第一二卷	春陽堂
同10	愛火廣告	單行	春陽堂
同15	『愛火』	歌舞伎第八〇號	歌舞伎發行所
	女優力枝評		
明治四十年			
一月1	緣結び	新小說第一二年第一卷	春陽堂
同1	神樂坂（ノチ矢來町、山の手小景前半）	青年第一卷第一號	青年社

同1	靈象（ノチ松風）	文藝倶樂部第一三卷第一號	博文館
同1	功德（モト一人坊主、旅僧）	秋田魁新報	秋田魁新報社
同1	處女作談	大阪日報	大阪日報社
同1—四月6	婦系圖	やまと新聞	やまと新聞社
同1	『式部小路』	單行	隆文館
同3	廊下の君（幻往來前半）	北海タイムス	北海タイムス社
同	扱帶（モト妙の宮）	秋田魁新報	秋田魁新報社
同	車前草（幻往來後半）	東亞新報	東亞新報社
二月1	聞きたるまゝ	新小說第一二年第二卷	春陽堂
三月1・四月1	知つたふり	新小說第一二年第三卷・第四卷	春陽堂
同1	千代の鉢（モト千歲の鉢、ノチ鶴の麥）	女鑑第一七年第三號	國光社
同3	『新選怪談集』序	徒步主義第五號	未詳
五月5—六月10	沈鐘	やまと新聞	やまと新聞社
同20	おばけずきの謂れ少々と處女作	新潮第六卷第五號（創刊紀念號）	新潮社
同	『新選怪談集』序	『新選怪談集』	すみ屋書店

六月15　廊下の君（幻往來前半）　文藝倶樂部第一三卷第九號（ふた昔）　博文館
七月1　あひ〳〵傘　新小說第一二年第七卷　春陽堂
九月1　曙山さん　新小說第一二年第九卷　春陽堂
十一月1　かしこき女　新小說第一二年第一一卷　春陽堂

明治四十一年

一月1　雌蝶　新小說第一三年第一卷　春陽堂
同1　『草迷宮』　單行　春陽堂
二月1　謹寫—紅葉先生遺文—　新小說第一三年第二卷　春陽堂
同15　婦系圖廣告　單行　春陽堂
同20　『婦系圖前編』　作品集　左久良書房
同20　『高野聖』　内容—高野聖、政談十二社　早稻田文學第二八號　金尾文淵堂
三月1　たそがれの味　新小說第一三年第四卷　春陽堂
四月1　花間文字

同1　頰白　文藝倶樂部第一四卷第五號　博文館
同15　ロマンチックと自然主義　新潮第八卷第四號　新潮社
五月1　妙齡　新小說第一三年第五卷　春陽堂
六月1　沼夫人　新小說第一三年第六卷　春陽堂
同1　そのころ　新聲第一八卷第七號　隆文館
同18　『婦系圖後編』　單行　春陽堂
七月1　四國だより（淺井房次の手紙）はしがき　新小說第一三年第七卷　隆文館
同1　予の態度　新聲第一九卷第一號　春陽堂
九月20　『沈鐘』　單行　登張竹風と共譯　春陽堂
十月1　蘆の葉釣　新小說第一三年第一〇卷　春陽堂
十一月1　新富座所感　新小說第一三年第一一卷　博文館
同1　星女郎　文藝倶樂部第一四卷第一五號　博文館
同20　雅號の由來　中學世界第一一卷第一五號　博文館
十二月15　むかうまかせ　文章世界第三卷第一六號　博文館

明治四十二年

一月1　七草　新小説第一四年第一卷　春陽堂

同1　毬栗（＝かくれ家、赤蛙）　秋田魁新報　秋田魁新報社

同1　文士と酒煙草　國民新聞　民友社

同14　小説に用ふる天然　國民新聞　民友社

同17・19　會話、地の文　國民新聞　民友社

二月1・四月1　尼ケ紅　新小説第一四年第二卷・第四卷　春陽堂

同5　柳小島　大町桂月、樋口龍峽等編『むら雲』　日高有倫堂

三月5　座談より　東京毎日新聞　東京毎日新聞社

同13　談話　東京毎日新聞　東京毎日新聞社

四月1　舊作の回顧　新潮第一〇卷第四號　新潮社

同1　三越趣味に就て　太陽第一五卷第五號　博文館

同1　紫手綱　文藝倶樂部第一五卷第五號　博文館

同1　怪異と表現法　東京日日新聞　日報社

同15　歩くことばかり思つて歩く　文章世界第四卷第五號　博文館

同15　小説の地の文の語尾　國民新聞　民友社

同15　『柳筥』　作品集　春陽堂

内容―女客、置炬燵（茶一碗）、お留守さま（花菖蒲）、木精（三尺角拾遺）、X蟷螂鰒鐵道、妖怪年代記、化鳥、旅僧（一人坊主、功德）、幻往來、立春（雪の山家）、女肩衣、親子そば三人客、妖僧記、紫陽花（野社、氷賣、炭の鋸）、毬栗（かくれ家、赤蛙）、五本松（思の車）、青切符、千歳の鉢（千代の鉢、鶴の姿）、裸蠟燭（ポンチの記）、山の手小景、長屋刄傷（小劍氣）、妙の宮（扱帶）

五月1　貸家一覽（ッチ通り魔）　太陽第一五卷第六號　博文館

同1　文章の音律　明治評論第一二卷第五號　明治評論社

同8　『春宵讀本』　作品集　文泉堂

内容―狸囃子、彌次行、知つたふり、小鼓吹、森の紫陽花、逗子だより、術三則、聞きたるまゝ、柳のお柳について、伊勢の卷の序、怪談集序、聖人乎盜賊乎序、吾妻名所（竹屋の渡）、城の石垣、北國咲、赤インキ物語、吉浦蜆、白屈菜の記、紅葉先生逝去前十五分間、仲の町にて紅葉會の事、かしこき女、曲線、感應、眞言、かながき水滸傳、草あやめ、雜談帖（青山葉山、棟の女、並木の松、たそがれ、獺、をさなあそび、野宿、三樣の不氣味、馬車から手、

十錢の價、一錢の價、分瓣梅花、童謠、御苦勞でした、一双の明眸、立ン坊、月番閉口の記、蜜柑、鮒賣、童謠、俳食、戀愛詩人)、逗子より、妙齡、かな

五月15	自在	新聲第二〇卷第五號	博文館
六月1	藝術は予が最良の仕事也―予は藝術を如何に觀ずるか―	文章世界第四卷第七號	博文館
同1・七月1	一度は恁うした娘の時代	新小說第一四年第六卷・第七卷	隆文館
同1	怪力	春陽堂	春陽堂
同20	文藝は感情の產物也―創作に於ける知識と感情―	新潮第一〇卷第六號	新潮社
七月1	何が故に文藝革新會に入りしか　黑白(文藝革新號)		黑白社
同15	事實の根柢、想像の潤色―事實と想像―	新潮第一一卷第一號	新潮社
同15	撫子(繪日傘前半)	臺灣愛國婦人第八卷	愛國婦人會臺灣支部
同	海の使者	文章世界第四卷第九號	博文館
八月10	描寫の眞價	秀才文壇第九卷第一四號	文光堂
同20	夏の夕―都會の夏と田舍の夏―	中學世界第一二卷第一〇號	博文館
九月1	八月のある日―文士と八月―	國民新聞	民友社
	吉祥果	少女第一卷第一號	女子文壇社

同1	犯罪と小說(對話)	明治評論第一二卷第九號	明治評論社
同1	『鏡花小品』	小品叢書第五卷	隆文館
	內容―道中一枚繪(道中一枚繪其二)、神樂坂七不思議、繪はがき、怪談女の輪(三重の襖、不思議)、俠言(長さん)、海の鳴る時(稍物語、想思)、友白髮(道中一枚繪其二)、見舞の文(軍人の留主宅見舞の文、留守見舞)、千鳥川、さら〳〵越、蛇くひ、雪の翼(本朝食人種、雪の羽衣)、波がしら		
同	身だしなみの善い婦人と惡るい婦人	婦人畫報第三一號	東京社
同15	紅葉先生の玄關番	文章世界第四卷第一二號	博文館
同15	『諸國童謠大全』序	『諸國童謠大全』	春陽堂
同16	『神鑿』	單行	文泉堂書房
同	『お伽花束』序	宇野氏編『お伽花束』	
十月1	喜多八のために	新小說第一四年第一〇卷	春陽堂
同1	事實と着想	新潮第一一卷第四號	新潮社
同	雁われの秋茄子は所帶持の珍味(昨日午前の日記、十月の日記より)	手紙雜誌八卷一〇號	手紙雜誌社
同8	昨日午前の日記(モト雁われの…、ノチ十月の日記より)	國民新聞	民友社

十月11	白鷺豫告	朝日新聞	朝日新聞社
同15―十二月12	白鷺	朝日新聞	朝日新聞社
同28	『怪談會』序	『怪談會』	柏舍書樓
同28	一寸怪		
十一月20	今の女も時代的―文士の女性觀―	中央新聞	中央新聞社
十二月1	錢湯	新小說第一四年第一二卷	春陽堂
同11	滑稽趣味	時事新報	時事新報社
同27	舊文學と怪談	時事新報	時事新報社

明治四十三年

一月1	歌行燈	新小說第一五年第一卷	春陽堂
同1	女の保護色―美人の印象―	新潮第一二卷第一號	新潮社
同1	國貞ゑがく	太陽第一六卷第一號	博文館
同1	松の葉	女子文壇第六年第一號	女子文壇社
同1	『鏡花集第一卷』	作品集	春陽堂

	內容―豫備兵、義血俠血、凱旋祭、ねむり看守、辰巳巷談、うしろ髮、三尺角、三尺角拾遺(未精)、湖のほとり、繪日傘、葛飾砂子、水鷄の里、湯女の魂、伊勢之卷、袖屏風、二世の契		
同7	京都の印象	時事新報	時事新報社
二月1	初めて紅葉先生に見えし時	新小說第一五年第二卷	春陽堂
同15	『白鷺』	單行	春陽堂
同	十月の日記より(モト雁われの…、昨日午前の日記)	文學講義錄	新潮社
三月1	千鳥樣	新小說第一五年第三卷	春陽堂
同1	平面描寫に就きて	新潮第一二卷第三號	新潮社
同6	月夜車	毎日電報	毎日電報社
同17・18	文藝と東京	時事新報	時事新報社
同	『袂かゞみ』に題す		
四月1・六月1	楊柳歌	新小說第一五年第四卷・第六卷	春陽堂
同22	お花見雜感	時事新報	時事新報社
五月1	かきぬき(白鷺の芝居二三節)	新小說第一五年第五卷	春陽堂

五月10　『鏡花集第二卷』　作品集　春陽堂

内容―註文帳、若紫、紅雪錄、胡蝶之曲、瓔珞品、高野聖、誓之卷、清心庵

同　窓の四季　鰭崎英朋氏寫生帳に題す　やまと新聞

同27　わんぱく物語　やまと新聞社

七月1　文章上達の順序　新潮第一三卷第一號　新潮社

八月6　『鏡花集第三卷』　作品集　春陽堂

内容―縁結び、海異記、女仙前記、きぬ〳〵川、七本櫻、雌蝶、春畫、春畫後刻、尼ヶ紅、沼夫人、七草

九月1・十一月1　遠野の奇聞　新小説第一五年第九卷・第一一卷　春陽堂

同15　活人形　探偵文庫第七編　署名白水郎　春陽堂

十月1　色暦　新小説第一五年第一〇卷　春陽堂

同1　三味線堀（前篇）　三田文學第一卷第六號　三田文學會

同5　『デモ畫集』序　名取春仙著『デモ畫集』戊の卷　如山堂

十一月1　櫛卷　太陽第一六卷第一四號　博文館

同27　作物の用意　毎日電報

十二月1　麥搗　文藝倶樂部第一六卷第一六號　博文館

同　畫の裡　學生文藝第一卷第五號　棗精堂

明治四十四年

一月1　小春　學生文藝第二卷第一號　棗精堂

同1　雪茶屋（山中哲學ノ一節）　臺灣愛國婦人第二六卷　愛國婦人會臺灣支部

同1　朱日記　三田文學第二卷第一號　三田文學會

同1　一銚子　大阪毎日新聞　大阪毎日新聞社

同1　青鷺（鷺の灯ノ一節改作）　毎日電報　毎日電報社

同1　『三味線堀』　單行　籾山書店

同3　酸漿　萬朝報　朝報社

二月1　露肆　中央公論第二六年第二號　反省社

三月1　鑑定　學生文藝第二卷第三號　棗精堂

同1　吉原新話　新小説第一六年第三卷　春陽堂

三月4-6　築地兩國　萬朝報

同23　『鏡花叢書』　朝報社

作品集　博文館

内容―序、外科室、海城發電、化銀杏、慈善會（貧民倶樂部ノ一節）、勝手口、鶯花徑、梟物語、外國軍事通信員、やどり木、月夜遊女、少年行、深沙大王、靈象（松鳳）、頰白、鷺の灯、そら解（風流後妻打）、星女郎、紫手綱

四月1　草雙紙に現はれたる江戸の女の性格　新小説第一六年第四卷　春陽堂

五月1　妖術　太陽第一七卷第六號　博文館

同1　人參　文藝倶樂部第一七卷第七號　博文館

六月1　一景話題　新小説第一六年第六卷　春陽堂

夫人堂、あんころ餅、夏の水、甲冑堂

同1　高棧敷　新日本第一卷第三號　冨山房

同1　池の聲　太陽第一七卷第八號　博文館

同14　丸で形なしと御承知あるべし―娘問題―　國民新聞　民友社

同15・16　逢ふ夜　國民新聞　民友社

七月1　笹色紅（ノチ祇園物語）　文藝倶樂部第一七卷第九號　博文館

同　江戸の女　新彩七月號　新彩社

同20　萬舟の涼味　時事新報　時事新報社

八月1　杜若　新小説第一六年第八卷　春陽堂

同　森の中（後ノ參宮日記ノ一節）　太陽第一七卷第一一號　博文館

同1　月夜　婦女界第四卷第二號　同文館

九月10　能樂座談　能樂第九卷第九號　能樂館

十月1　昔の浮世繪と今の美人畫　新小説第一六年第一〇卷　春陽堂

同1　豆名月　俳味第二卷第一〇號　大日本俳諧講習會

同　貴夫人（ノチ雪衣の鸚鵡）　三越第一卷第九號　三越吳服店

同1　『銀鈴集』　作品集　隆文館

内容―笈摺草紙（紫道中）、龍潭譚、風流蝶花形、山中哲學、弓取町人、白羽箭、惡獸篇

十二月　鰻（ノチばけ鰻、夜釣）　新小説第一六年第一二卷　春陽堂

同1　爪びき　文藝倶樂部第一七卷第一六號　博文館

明治四十五年

一月1	南地心中	新小説第一七年第一卷	春陽堂
同1	片しぐれ	日本及日本人第五七三號	政教社
同1	紫道中（ヘモト笈摺草紙）	能樂第一〇卷第一號	能樂館
同	一席話	旅行第二卷第一號	旅行社
同1	『歌行燈』	作品集（現代文藝叢書第七編）	春陽堂
	内容―歌行燈、通り魔（貸家一覽）		
同	二番目狂言は	通夜物語興行の告條	本郷座
二月1	三つの色々―酒と色と味―	新小説第一七年第二卷	春陽堂
同	女の所から手紙	新婦人第二年二月の卷	聚精堂
同9	稽古扇	中央新聞	中央新聞社
三月1	東京の女と大阪の女	新潮第一六卷第三號	新潮社
同1	唐模様	文藝倶樂部第一八卷第四號	博文館
	麗姫、勇將、愁粧、捷術、驕奢、		

同5	空蟬	『華壇』（『短篇奇談勢揃ひ』ト同ジ）	日吉堂本店
同10	立春	能樂第一〇卷第三號	能樂館
四月1	對の鼓（風流線ノ一節）	中央公論第二七年第四號	反省社
同	靄（ノ三人の盲の話）	作品集	春陽堂
	『國貞ゑがく』		
	内容―國貞ゑがく、櫛卷、海の使者、露肆、小春、朱日記、逢ふ夜、築地、雨國、妖術		
五月1	廓そだち	新小説第一七年第五卷	春陽堂
同15	『數奇傳』序	田岡嶺雲著『數奇傳』	玄黄社
六月15	糸遊	太陽第一八卷第九號（雄飛二十五年）	博文館
同20	唐模様	文藝倶樂部第一八卷第九號	博文館
	人妖、少年僧、魅室、良夜		
七月	紅提灯	淑女畫報第一卷第四號	博文館
同1	歌仙彫	新小説第一七年第七卷	春陽堂
八月1	江戸の女	新天地第一卷第一號（江戸開府號）	新天地社

大正元年

九月　稽古扇　文藝畫報第一卷第九號

十月15　淺茅生（ノチ產婦）　地球第一卷第七號　文藝畫報社

十一月1　霰ふる　太陽第一八卷第一五號　博文館

同1　印度更紗　中央公論第二七年第一一號　博文館

十二月20　『南地心中』　作品集　反省社

內容—南地心中、三人の盲の話（鶴）、產婦（淺茅生）、紅提灯、高棧敷、印度更紗、霰ふる　文藝書院

大正二年

一月1　五大力　新小說第一八年第一卷　春陽堂

同1　遊行車　文藝倶樂部第一九卷第一號　博文館

同1　『鏡花集第四卷』　作品集　春陽堂

內容—取舵、錦帶記、照葉狂言、五の君、黑百合、吉原新話、楊柳歌

三月1　夜叉ヶ池　演藝倶樂部第二卷第三號　博文館

同18　『櫻草』　作品集　文藝書院

內容—夫人堂、あんころ餅、夏の水、甲冑堂、魅宝、良夜、喜多八のために、人參、廓そだち、花間文字、鑑定、鰻（ばけ鰻、夜釣）、畫の裡、遠野の奇聞、千鳥樣、いろ扱ひ、左の窓、怪力、麥搗、月夜車、松の葉、吉祥果、昔の浮世繪と今の美人畫、麗姬、愁粧、蘆の葉釣、手帳四五枚、錢湯

四月1　艶書　現代第四卷第四號　現代社

同1　銀杏の下（ノチ公孫樹下）　臺灣愛國婦人第五三卷　愛國婦人會臺灣支部

五月1　狸囃子（ノチ陽炎座）　新小說第一八年第五卷　春陽堂

同　畫博堂報條　畫博堂

六月1　銀杏の下（後ノ鳥笛ノ前半）　雪月花第一卷第三號　雪月花發行所

同5　『遊行車』　作品集　尙榮堂

內容—遊行車、雛色紅（祇園物語）

同20　菖蒲本　ホトトギス第二〇二號　ホトトギス發行所

七月1	紅玉	新小說第一八年第七卷	春陽堂
八月28～十月1	二挺鼓（ノチ『參宮日記』）	京城日報	京城日報社
九月1	情景相伴ふ名物の美—名物の印象—	臺灣愛國婦人第五八卷	愛國婦人會臺灣支部
同1	二た面	文藝倶樂部第一九卷第一二號	博文館
十月	『乘合船』 內容—髯題目、艶書、貴婦人（雪衣の鸚鵡）、糸遊、莵蒻本、爪びき	作品集	春陽堂
十二月1	海神別莊	中央公論第二八年第一四號	反省社
同5	『紅玉』 內容—酸漿、公孫樹下（銀杏の下）、柳小島、月夜、紅玉	作品集	植竹書院
	戀女房廣告		
同18	『戀女房』 內容—戀女房、稽古扇	作品集	鳳鳴社
大正三年			
一月1	魔法壜	新小說第一九年第一卷	春陽堂

同1	第二莵蒻本	新日本第四卷第一號	富山房
同1	鳥笛	臺灣愛國婦人第六二卷	愛國婦人會臺灣支部
同1	華やかな思出—正月の思ひ出—		
同1	『參宮日記』（モト二挺鼓）	單行	春陽堂
二月1	革鞄の怪（ノチ片袖）	淑女畫報第三卷第二號	博文館
同	水際立つた女	演藝倶樂部第三卷第二號	博文館
三月1	みつ柏 曠野、買はれた女、狐	文藝倶樂部第二〇卷第四號	博文館
同	『春宵讀本』	縮刷	文友堂
五月	小袖幕	演藝場番組	
同	裏木戸		
七月17	『相合傘』 內容—五大力、片袖（革鞄の怪）、第二莵蒻本、歌仙彫	作品集	鳳鳴社
同	妖怪畫展覽會	告條	畫博堂
九月	『日本橋』	單行	千章館

十月 1　湯島の境内―婦系圖補遺―　新小說第一九年第一〇卷　春陽堂

十一月25　『袖垣』　作品集　献文堂

内容―銀短册、杜若

十二月1　紅葛　中央公論第二九年第一三號　中央公論社

大正四年

一月1　櫻貝　淑女畫報第四卷第一號　博文館

同1　櫻心中　新小說第二〇年第一卷　春陽堂

同　雪の羽衣（モト本朝食人種、雪の翼）　岩手每日新聞　岩手每日新聞社

三月5　『高野聖』　作品集（代表的名作選集第一〇編　新潮社

内容―高野聖、湯女の魂

四月1　新つや物語　文藝倶樂部第二一卷第五號　博文館

同17　『百花爛熳』　作品集（「春宵讀本」ト同ジ）　文藝社出版部

五月1　夕顏　三田文學第六卷第五號　三田文學會

同1―十二月　星の歌舞伎　女の世界第一卷第一號―第九號　實業之世界社

五月20　『菖蒲貝』　作品集（現代代表作叢書第八編）　植竹書院

内容―序、春書、春書後刻、袖屏風、歌行燈、夜行巡査、處方祕箋、玄武

朱雀、三味線堀

六月21　『鏡花選集』　作品集　春陽堂

内容―湯島詣、通夜物語、婦系圖

七月1　蒔繪もの（ヅ箱根三妓）　新小說第二〇年第七卷　春陽堂

同1　古典趣味の行事―七夕祭と盆の印象―　臺灣愛國婦人第八〇卷　愛國婦人會臺灣支部

同17　松翠深く蒼浪遙けき逗子より　時事新報　時事新報社

九月1　懸香（ヅ不知火）　新小說第二〇年第九卷　春陽堂

十月5　自然と民謠に―鄕土光華―　日本及日本人第六六五號　政教社

同10　『白羽箭』　單行　千章館

同15　『遊里集』　作品集　春陽堂

内容―白鷺、紫手綱、辰巳巷談、葛飾砂子、三尺角、逢ふ夜、糸遊、酸漿、

第一菖蒲本、第二菖蒲本、南地心中

大正五年

一月1　白金之繪圖　新小說第二一年第一卷　春陽堂

同1　『鏡花双紙』　作品集　春陽堂

内容—月下園、三枚續、さゝ蟹、鐘聲夜半錄、波がしら、親子三人客、柳小島、風流蝶花形、草迷宮、笈摺草紙（紫道中）、髯題目、藥草取、千鳥川、鶴の麥（千歳の鉢、千代の鉢）

同　長さん（モト俠言）　岩手日報　岩手日報社

二月1　錦染瀧白糸　趣味之友第一卷第二號　趣味之友社

四月1　浮舟　新小說第二一年第四卷　春陽堂

同15　『照葉狂言』　作品集　春陽堂

内容—照葉狂言、水鷄の里、緣結び

同　花見風俗　雨聲會席上　西園寺公爵家

五月1・六月1　柏奇譚　三田文學第七卷第五號・第六號　三田文學會

六月・七月　摩耶山記（後ノ峰茶屋心中ノ一節）　邦樂第二卷第三號・第四號　邦樂社

七月1　人魚の祠　新日本第六卷第七號　冨山房

八月15　『星の歌舞伎』　單行　平和出版社

九月　島田髷の人形（後ノ戲曲日本橋ノ一節）　產業評論第三號　產業評論社

十月　萩薄內證話　新小說第二一年第一〇卷　春陽堂

愛染集廣告

同2　『愛染集』　作品集　千章館

内容—日本橋、註文帳

同18　『由緣文庫』　作品集　春陽堂

内容—梟物語、龍潭譚、夕顏、櫛卷、印度更紗、不知火（懸香）、霰ふる、柏奇譚、松風（靈象）、櫻貝、白金之繪圖、夜叉ヶ池、浮舟、月夜遊女、銀短册

十一月　通路　文藝倶樂部第二二卷第一五號　博文館

同20　文房具をたいせつに…　大正六年『文章日記』題詞　新潮社

十二月　木曾の紅蝶　文藝倶樂部第二二卷第一六號　博文館

同　『流轉のはじめ』序　『流轉のはじめ』　須原啓興社

大正六年

一月1　雨夜の姿（ノチ時雨の姿）　淑女畫報第六卷第一號　博文館
同1　伊達羽子板　女學世界第一七卷第一號　博文館
同1　町雙六　新小說第二二年第一號　春陽堂
同1　炎さばき　女の世界第三卷第一號—第八號　實業之世界社
同1　『幻の繪馬』　單行（俠艶情話集第一編）　春陽堂
同2　夏目さん　新小說臨時號（文豪夏目漱石）　春陽堂
同3　緣日　東京日日新聞　東京日日新聞社
三月1　雛がたり　新小說第二二年第四號　春陽堂
四月1　峰茶屋心中　新小說第二二年第五號　春陽堂
同20　『彌生帖』　作品集　平和出版社

內容—雛がたり、木曾の紅蝶（通路ヲフクム）、時雨の姿（雨夜の姿）、伊達羽子板、新通夜物語、人魚の祠、箱根三妓（時繪もの）、政談十二社、陽炎座（狸囃子）

五月8　『戲曲日本橋』　單行（戲曲選集第四編）　春陽堂
六月1　二人連　俳界第一卷第三號　俳界社
七月1　卯辰新地　文藝倶樂部第二三卷第九號　博文館

同　作の苦心　青年文壇第二卷第七號　東亞堂
八月1　『粧蝶集』　作品集　春陽堂

內容—祝盃、女客、外科室、夜行巡査、化銀杏、蠅を憎む記（部屋の弟）、三人の盲の話（靈）、朱日記、露肆、頰白、海神別莊、鶯花徑、玄武朱雀、國貞畫く、片袖（革鞄の怪）、峰茶屋心中、處方祕箋、歌行燈

九月1　天守物語　新小說第二二年第一〇號　春陽堂
十一月　句讀の一點は…　大正七年『文章日記』題詞　新潮社

大正七年
一月1　繼三味線　新小說第二三年第一號　春陽堂
同1　黑髮　中外新論第二卷第一號　中外新論社
同1　『紅梅集』　作品集　春陽堂

內容—起誓文、舞の袖、神鑿、無憂樹、星女郎

二月1　中庸の人—柳川春葉氏追想記—　新演藝第三卷第二號　玄文社
同1　新春閑話—いかにして文壇に出た乎—　文章倶樂部第三卷第二號　新潮社

二月16・23・三月2	友染火鉢	週第二卷第七號—第九號	週發行所
三月1	煙管を持たしても短刀位に—里見弴氏の文章—	文章倶樂部第三卷第三號	新潮社
四月10	茸の舞姫	中外第二卷第五號	中外社
五月	若松家挨拶	報條	若松家
六月4	『日本橋』	縮刷	春陽堂
同27	『鴛鴦帳』	單行	止善堂
同28	『鏡花隨筆』	作品集	文武堂

内容—絲日、手帳四五枚、鑵湯、畫の裡、花間文字、鑑定、ばけ鰻(鰻、夜釣)、雪衣の鸚鵡(貴婦人)、曠野、買はれし女、狐、靑切符、鶴の姿(千歲の鉢、千代の鉢)、矢來町(山の手小景前半)、茗荷谷(山の手小景後半)、長屋刄傷(小劇氣)、月夜、妙の宮(扱帶)、蓑谷、紫陽花(野社、氷實、炭の鍋)、毬栗(かくれ家、赤蛙)、道中一枚繪其一(友白髮)、道中一枚繪其二、海の鳴る時(稽物語、想思)、人參、夫人堂、あんころ餅、夏の水、甲冑堂、魅室、良夜、喜多八のために、麗姬、愁莊、蘆の葉釣、序類(怪談會の序、デモ畫集序、序(『諸國童謠大全』序)、妖怪畫展覽會、八笑人改版の序、贊(畫博堂報條)、朧夜の頃序、通夜物語興行の告條(二番目狂言は))、一葉の墓、

	いろ扱ひ、左の窓、怪力、麥搗、吉祥果		
七月1	あの紫は	赤い鳥第一卷第一號	赤い鳥社
同7	芍藥の歌	やまと新聞	やまと新聞社
十二月7			
同23	『愛艸集』	作品集	春陽堂

内容—白羽箭、化鳥、艶書、廊下の君(幻往來前半)、妖術、山僧(白牛)、暗まぎれ、山中哲學、祇園物語(袈色紅)、そら解(風流後妻打)、お留守さま(花菖蒲)、三味線堀

同26	手紙二通	『文壇名家書簡集』	新潮社
八月1	私の好きな夏の料理	中央公論第二三年第九號	中央公論社
九月14	柳小島	樋口龍峽編『雲か波か』	松本商會出版部
同	『鏡花集第五卷』	『鏡花双紙』改題	春陽堂
十月1	蓑着て通る	赤い鳥第一卷第四號	赤い鳥社
同1	大阪まで	新小說第二三年第一〇號	春陽堂

大正八年

一月1―十年二月1　由緣の女（『ゆかりの櫛笥集』）　婦人畫報第八年一月卷―第一〇年二月卷　東京社
同1　『友染集』　作品集　春陽堂

内容―萩薄内證話、二人連れ、稽古扇、町雙六、卯辰新地、天守物語、高桟敷、紅提灯、繼三味線、悪獸篇、黒髪、友染火鉢、芋の舞姫、木曾の紅蝶（通路ヲフクム）

三月1・四月1　紫障子　新小説第二四年第三號・第四號　春陽堂
同　堀の鷗　中央文學第三年第三號　春陽堂
同20　『弓藥の歌』　單行　春陽堂
五月1―十二月1　五月―十二月―美文十二ケ月―　婦女界第一九卷第五號―第二〇卷第六號　婦女界社
同20―七月1　柳の横町　大阪朝日新聞　大阪朝日新聞社
七月　紅葉先生の追憶　中央文學第三年第七號（文豪追想號）　春陽堂
八月1　たとへば牡丹を描きて…　中央文學第三年第八號（盛夏號）題詞　春陽堂
九月1　手習　新小説第二四年第九號　春陽堂
同7　緣日商品　『夜の東京』　文久社
十月20　『雨談集』　作品集　春陽堂

大正九年

一月1　江戸土産（『妖劍紀聞前篇）　新小説第二五年第一號　春陽堂
同1　伯爵の釵　婦女界第二一卷第一號　婦女界社
同1―十二月1　一月―十二月―月令十二態―　婦女界第二一卷第一號―第二二卷第六號　婦女界社
三月　神樂坂魚徳新築開店御披露　ひきふだ　魚徳
四月1　新江戸土産（『妖劍紀聞後篇）　新小説第二五年第四號　春陽堂
五月15　賣色鴨南蠻　人間第二年五月號　人間社
七月1　役者本位が變らねば―かういふ芝居が見たい―　新演藝第五卷第七號　玄文社
同12　私の事　時事新報　時事新報社
同15　寸情風土記　新家庭增刊「山水巡禮」　玄文社
十月1・十一月1　榲桲に目鼻のつく話　現代第一卷第一號・第二號　大日本雄辯會
同1　瓜の涙　國粹第一號　國粹出版社

内容―柳の横町、新通夜物語、人魚の祠、戀女房、時雨の姿（雨夜の姿）、歌仙彫、紫障子

十月25　『銀燭集』　作品集　春陽堂

内容―日本橋、名媛記、紫陽花（野社、氷賣、炭の鍋）、吉祥果、五大力、海の使者、伯爵の釵、鴛鴦帳

十二月1　唄立山心中一曲　改造第二卷第一二號　改造社

大正十年

一月1　鯛　現代第二卷第一號　大日本雄辯會

同1―十月1　毘首羯摩　國粹第二卷第一號―第一〇號　國粹出版社

同1―翌年二月1　彩色人情本　新演藝第六卷第一號―第七卷第二號　玄文社

同1　薺　新家庭第六卷第一號　玄文社

同1　定九郎　人間第三卷一月號　人間社

同1　想思（モト滑物語、海の鳴る時）　旭川新聞　旭川新聞社

二月15　『蜻蛉集』　作品集　國文堂書店

内容―妖劍紀聞前篇（江戸土產）、妖劍紀聞後篇（新江戸土產）、立春（雪の山家）、緣日商品、紅玉、貸家一覽（通り魔）、堅麵麭、裸蠟燭（ポンチの記）、手習、紅葛、賣色

三月1　鴨南蠻　附錄　泉鏡花著作細表（水上瀧太郎編）　國本三月號　國本社

四月1　蝶蝶の目　小說倶樂部第五卷第四號　民衆文藝社

同1　雪靈記事　新小說第二六年第四號　春陽堂

五月10　雪靈續記　縮刷　銀鈴社

七月1・八月1　『相合傘』　國本七月號・八月號　國本社

同1　銀鼎　人間第三卷七月號　人間社

同21―27　七寶の柱　東京日日新聞　東京日日新聞社

八月1　飯坂ゆき　新演藝第六卷第八號　玄文社

同1　茶話―小說家の見たる芝居―　中央佛敎第五卷第八號　中央佛敎社

同18　松の葉　單行　春陽堂

『ゆかりの（をんな）櫛笥集』（モト由緣の女）

大正十一年

一月1　妖魔の辻占　新小說第二七年第一號　春陽堂

同1　『新柳集』　作品集　春陽堂

内容―唄立山心中一曲、瓜の涙、鯛、定九郎、幻の繪馬、雪靈記事、雪靈續記、薺、蝶蝶の目、銀鼎、續銀鼎、榲桲に目鼻のつく話、飯坂ゆき、七寶の柱

一月1―六月1　黒髪（後ノ『りんだうとなでしこ』ノ一部）　良婦之友第一卷第一號―第六號　春陽堂
同12―三月22　身延の鶯　東京日日新聞
五月23―31　番茶話　時事新報
蛙、玉蟲、赤蜻蛉
七月10　楓と白鳩　時事新報社
八月1　みなわ集の事など　サンデー毎日第一年第一六號
同1―翌年一月1　龍膽と撫子（ノチ『りんだうとなでしこ』）　女性第二卷第二號―第三卷第一號　新小說第二七年第九卷（文豪鷗外森林太郎）　春陽堂
十月　十三娘　鈴の音第二卷第一〇號　プラトン社
同7―12　入子話　東京朝日新聞　鈴の音社　東京朝日新聞社

大正十二年

一月1　鷸狩　サンデー毎日第二年第一號　大阪毎日新聞社
同1　鶚の鮨　新小說第二八年第一號　春陽堂

同1―十一月1　一月―十一月―婦人十二題―　婦女界第二七卷第一號―第二八卷第五號　婦女界社
二月1―九月1　龍膽と撫子（續篇）　女性第三卷第二號―第四卷第三號　プラトン社
三月5　『龍蛯集』　作品集　春陽堂
内容―彩色人情本、妖魔の辻占、賣色鴨南蠻、爪びき、身延の鶯
同20　磯あそび　サンデー毎日第二年第一三號　大阪毎日新聞社
五月26―七月14　朝湯　大阪朝日新聞　大阪朝日新聞社
六月1　山吹（劇本）　女性改造第二卷第六號　改造社
同27　くさびら　東京日日新聞　東京日日新聞社
七月5　女波（炎さばき一節改作）　サンデー毎日第二年第二九號　大阪毎日新聞社
八月1　祭のこと―夏十題の内―　女性第四卷第二號　プラトン社
十月1　露宿　女性第四卷第四號　プラトン社
同1―5　十六夜　東京日日新聞　東京日日新聞社
十一月10　間引菜　週間朝日第二二號　大阪朝日新聞社
同10　雨ばけ　隨筆第一卷第一號　隨筆發行所
同　たとへば牡丹を描きて…　大正十三年『新文章日記』題詞　新潮社

大正十三年

一月1	駒の話	サンデー毎日第三年第一號	大阪毎日新聞社
同1	傘	隨筆第二卷第一號	隨筆發行所
同1	小春の狐	女性第五卷第一號	プラトン社
同1-7	春着	時事新報	時事新報社
二月1	湯どうふ	女性第五卷第二號	プラトン社
同10	胡桃	新興創刊號	新興社
三月12	『七寶の柱』	作品集(感想小品叢書四)	新潮社

内容―露宿、間引菜、駒の話、くさびら、女波(炎さばき一節改作)、傘、雨ばけ、小春の狐、大阪まで、寸情風土記、春着、婦人十一題、七寶の柱

四月1	第一菎蒻本	苦樂第一卷第四號(別冊附錄)	プラトン社
同1	火のいたづら	サンデー毎日第三年第一五號	大阪毎日新聞社
同1	假宅話	新小說第二九年第四號	春陽堂
同1	二三羽―十二三羽	女性第五卷第四號	プラトン社

同1	きん稻	隨筆第二卷第三號	隨筆社
五月1	眉かくしの靈	苦樂第一卷第五號	プラトン社
六月21	『通夜物語』	改版縮刷	春陽堂
七月1	雨ふり	苦樂第二卷第一號	プラトン社
同1	夫人利生記	女性第六卷第一號	プラトン社
同5	『りんだうとなでしこ』	單行	プラトン社
同21-九月6	玉造日記	大阪朝日新聞	大阪朝日新聞社
八月1	栃餅(ノチ栃の實)	新小說第二九年第八號	春陽堂
同1	旅行笑話(女性談話會)	女性第六卷第二號	プラトン社
	森田草平、鈴木三重吉、田山花袋、久米正雄、鏡花		
九月1	鰌すくひ(ノチ光鑑)	隨筆第二卷第八號	隨筆社
十月1	夜釣(モト鰻、ばけ鰻)	サンデー毎日第三年第四三號	大阪毎日新聞社
同1	露萩	女性第六卷第四號	プラトン社
同1	秋の草(ノチ玉川の草)	三越カレンダー第三年第一〇號	三越呉服店大阪支店
同17	『鏡花選集』	改版	春陽堂

十一月15　『愛府』　作品集　新潮社

内容―鷭狩、楓と白鳩、磯あそび、みさごの鮨、朝湯、十三娘、番茶話―蛾―玉蟲―赤蜻蛉、入子話、祭のこと、山吹、十六夜

同21　『婦系圖』　改版　春陽堂

同21　『湯島詣』　改版　春陽堂

十二月30　『番町夜講』　作品集　改造社

内容―眉かくしの靈、夫人利生記、假宅話、きん稻、光籃(鰯すくひ)、胡桃、火のいたづら、栃の實(栃餅)、雨ふり、湯どうふ、二三羽―十二三羽

大正十四年

一月1　道陸神の戯　サンデー毎日第四年第一號　大阪毎日新聞社

同1　甲乙(きのえきのと)　女性第七卷第一號　プラトン社

二月1・四月1　本妻和讃　苦樂第三卷第三號、第四號　プラトン社

同　鎧　寫眞報知第三卷第五號　報知新聞社

三月1　怨靈借用　改造第七卷第三號　改造社

同1　神樂坂の唄―清元のつもり―　文藝春秋第三年第三號

同1　獻立小記　東京朝日新聞

四月1　田植　週間朝日第七卷第一五號　大阪朝日新聞社

同1　色鳥

六月17　蓑着て通る　日本童謠集(一九二五年版)　新潮社

同17　あの紫は

九月4　『泉鏡花集』　現代小說全集第二卷　新潮社

内容―序詞、玄武朱雀、さゝ蟹、笈摺草紙(紫道中)、辰巳巷談、水鷄の里、南地心中、女客、國貞畫く、歌行燈、白鷺　著者年譜

大正十五年

一月1　戰國新茶漬　女性第九卷第一號　プラトン社

同1　繪本の春　文藝春秋第四年第一號　文藝春秋社

二月1　雪解(俳句)　女性第九卷第二號　プラトン社

四月1　隣の糸　女性第九卷第四號　プラトン社

四月1	城崎を憶ふ	文藝春秋第四年第四號	文藝春秋社
同30―五月6	火の用心の事	東京朝日新聞	東京朝日新聞社
五月	報條二枚	三田文學復活第一卷第二號	三田文學會
九月1	眞夏の梅	女性第一〇卷第三號	プラトン社
同1	小唄	文藝春秋第四卷第九號	文藝春秋社
同23―十月8	麻を刈る	時事新報	時事新報社
十月1	半島一奇抄	文藝春秋第四年第一〇號	文藝春秋社

昭和二年

三月1	泉鏡花氏の書簡―『尾崎紅葉集』について―	改造第九卷第三號	改造社
同1	多神教	文藝春秋第五年第三號	文藝春秋社
四月1	卵塔場の天女	改造第九卷第四號	改造社
同1・五月1	河伯令孃	婦人倶樂部第八卷第四號・第五號	大日本雄辯會
六月1	玉川の草（モト秋の草）	文藝春秋第五年第六號	文藝春秋社
同15	金色夜叉小解	明治大正文學全集第五卷『尾崎紅葉篇』	春陽堂

七月5	葶さん小話	改造社文學月報第七號	改造社
同17―八月7	深川淺景―新東京繁生記―	東京日日新聞	東京日日新聞社
八月	芥川龍之介氏を弔ふ	改造社文學月報第八號	改造社
同	あの紫は	小學生全集第二四卷日本童謠集上級用	興文社　文藝春秋社
同1	唄「あけやすき」	手帖第一卷第六號	文藝春秋社
同1	唄「夏帽子」		
同1	泉鏡花座談會	文藝春秋第五年第八號	文藝春秋社
	柳田國男、里見弴、久保田万太郎、菊池寛、鏡花		
九月1―翌年二月1	楊弓（ノチピストルの使ひ方）	文藝倶樂部三三卷一一號―三四卷二號	博文館
十月1	小唄	文藝春秋第五年第一〇號	文藝春秋社
同1・9	十和田湖	東京日日新聞 大阪毎日新聞	東京日日新聞社 大阪毎日新聞社
十一月1	健ちゃん大出來！―院賞作家月旦―	美の國第三卷第九號（帝展號）	行樂社

昭和三年

一月1	啄木鳥	サンデー毎日第七年第一號	大阪毎日新聞社